

My Godness
～俺の女神～

恵未
(東 めぐみ)



Prologue～序章～

一心が、壊れてゆく。俺の中で、何か大切なものが音を立てて壊れてゆく。一

「この口紅、少し派手すぎない？」 「いや、そんなことは全然ないッスよ。とてもよくお似合いです」俺は、もうこれかれこの鬱陶しい女に二時間余りもとっ捕まったままだ。俺が営業用のスマイルを顔に貼り付けたままでいるのを良いことに、女は次第にエスカレートして馴れ馴れしくなってく。まあ、それも当たり前といえば当たり前だ。彼女一いや、この店を訪れる女性客たちは皆、法外な金を払って、俺たちホストとのひと刹那の偽りの恋を、幻の夢を見にきているのだから。

つい先刻から、女はついに俺の肩に両腕を回し、抱きついてきた。体勢から見れば、女は俺にしなだれかかっている一というよりは、完全に俺の膝に乗っている。他の店は知らないが、俺の勤める店はすべて完全個室制になっている。まず店を訪れた女性客は店頭のパネルを見て、今日の指名を決める。パネルにはむろん、うちの店にいるホスト全員の顔写真と名前がズラリと並んでいる。指名を受けたヤツが空いていれば相手をするし、生憎と接客中だったら、代替りのホストが入る。

その写真は当然ながら、客に指名して貰うためには大切な手がかりになる。だから、仲間の中にはわざわざ高い撮影料を支払って有名な写真館で写真を撮って貰うヤツもいる。もちろん、町のいかにもといった古めかしい写真館ではなくて、そういう風俗営業のキャバ嬢とかホステス、ホストといった連中の宣伝広告用の顔写真を撮り慣れている専門のところだ。

俺はそういうのは好きじゃないし、そこまでする気も全然ない。だから、そのまま適当に撮ったケータイ写真を使っている。しかし、不思議なものだ。何万と使って撮った写真を載せているヤツよりも、ただの素人写真を使う俺の方が断然、指名が多い。別に自分が店のナンバーワンだからって、それがどうしたのか？ と言いたいけれど、他のヤツらにとっては重大問題らしいのだ。まっ、俺には馬鹿馬鹿しい話だ。俺には早妃(さき)さえいれば、十分だったから。俺のパネル写真を撮ったのも実はといえば早妃だったんだ。気障な言い方だろうが、俺は早妃にとってナンバーワンの男でありさえすれば良かった。他の女なんて全く眼中になかった。おい、止めてくれよと言いたいのをぐっと堪えて、俺は女性客の背中に片手を回し抱き寄せる。女は完全に頭に血が上ったみたいで、俺の膝の上で無遠慮に唇を重ねてきた。ああ、ムカムカして吐きそうだ。何なんだ、このどぎつい香水の匂いは。

旦那の金が有り余ってるから、こんなところにまで来るんだらうけど、もうちったァ、マシな金の使い方はないのかよ。そう思ってしまう。可哀想なのは旦那だ。手前の嫁さんがホストクラブで昼日中から若い男とこんな風にいちゃついているなんて知りもせずに、汗水垂らして働いているんだらう。

だが、考えてみれば、この女だって哀れなもんだ。この店に来るのは大抵、金だけは有り余っても、心が少しも満たされていない女ばかりだからな。他のホストたちは俺がそんなことを言うと、ゲラゲラと笑う。

一悠(ゆう)理(り)はまだまだ蒼いなあ。オバさんたちが俺らに逢いにくるのは心の渴きよりも身体の方が乾いて仕方ないからさ。なんて、俺より年上のホストが馬鹿にしたように言う。

けど、身体の乾きなんてものは無理に馬鹿高い金払ってまで男を買わなくても、何とかなる。今は怪しげな道具が色々と出回ってるからな。しかし、どれだけ道具を駆使して欲望処理してみたところで、それは所詮、自己満足じゃないか。

この店に来る女たちは皆、淋しいんだろう。亭主にも子どもにも見向きもされず、空っぽになった心を持って余しかねて堪らずに来る。俺らが彼女たちに同情する必要はさらさらないが、言ってみれば、ここに来る客たちも皆、可哀想なんだろう。

おばさんの行動はますますエスカレートしてきて、今度は生温い舌が俺の口の中に入ってきそうだったので、俺は堪りかねて彼女の身体を少し押しやった。もちろん、相手にあからさまに判るようなヘマはしない。あくまでも、さりげなく、だ。

「折角、よくお似合いの口紅が落ちてしまいますよ？ 実沙(みさ)さん」

このおばさんの名前は藤堂実沙。名前だけは早妃に似ているけれど、外見も中身も似ても似つかない。

「あら、口紅なんて、また塗り直せば良いだけなのに」

おばさんは満更でもないような表情で頬を染める。この女は毎回、俺を指名してくれる言わば常連さんだから、間違っても嫌な顔は見せられない。もう、ここに通い出して二年近くになるんじゃないか。

確か五十二になるとか聞いたが、まあ、年齢と見た目もどっこいどっこいってところか。特別に美人というわけでもないし、ブスというわけでもない。一どころか、こんないかにも平凡そうなおばさんがホストに狂ってるなんて誰も信じやしないだろう。

客とホストの間では携帯の番号とか個人的な情報の交換は基本的にしないことになっている。それは店の規約にもちゃんと明記されていることだ。もっとも、その規約を何人が守っているは知らないが。

たまにホストの営業用のお愛想を本気にして、のめり込んでしまう客がいる。そういう客が実はいちばん厄介。このおばさんのように、気晴らしは気晴らしと割り切ってここに来ている連中は、俺たちホストにとっては実はありがたい客なのだ。後腐れがないから。

本気になった女ほど怖いものはない。夢中になったホストの私生活にまでずかずかと入り込んでこようとするし、ホスト本人も店も大迷惑だ。まあ、十年くらい前に、まだ新婚の若妻とナンバーツリーのホストが夜逃げしたって話は俺も聞いたことがあるかな。

そいつらは両方がマジになって駆け落ちしたっていう稀な例だけど、そんなことはまずあり得ない。ホストたちにもちゃんと彼女や恋人がいるし。客の相手はあくまでも金のため。それはキャバ嬢が客に振りまく愛想が見せかけだけのものだってことと同じ理屈だ。

客とだって、寝ることはある。ま、うちの店では基本、それは禁止事項に入ってるけど。守ってるヤツは少ないんじゃないかな。俺たちは、それをアフターと呼ぶ。アフターサービスの略だ。店内で客と性的関係を持つのはご法度、やりたきゃ外でやってくれってわけ。

さっきの本気になったらヤバって話と重なるが、女って不思議な生き物だ。身体を重ねてしまえば、男が自分のものになったと錯覚してしまう。だから、店ではアフターは禁止されてるんだ。つまり禁止というよりは、そこから先はどうなっても、店は責任持たないぞ、当人同士で勝手にやってくれってことでもある。

殆どのホストに特定の彼女がいるから、じゃあ、何で客と寝るの？ と訊かれたら、そりゃ、やっぱり愉しみたいとかいうのではない。大体、自分の母親のような歳の女とどうやって愉しめ
って？

金、金が欲しいからに決まっている。ただキスや手を握らせるだけでもかなりの金をふんだくるけど、その金はかなり店の方がピンハネするからね。その点、アフターで入ってくる金は全部俺たちの手に入る。だから、悪い顔もせず親ほども歳の違うおばさんの相手をする。

「悠理クンに逢うから、新しい香水つけてみたんだけど、どうかしら？」

上目遣いにあからさまな媚を含む眼で掬い上げるように見つめられ、俺は顔が引きつりそうになるのを必死で堪えた。ひと月前に付けてた香水の方がまだマシだったよ、とは口が裂けても言えない。

俺はできるだけ笑顔が自然に見えるように祈りながら言った。

「この前のも良い感じでしたけど、今日のはまた格段に良いですね。何かこう、花の香りをイメージさせるようで」

花は花でも、反吐が出そうな毒花ですけど。 と、心の中で余計なひとことを付け加えた。

「悠理君に一ヶ月ぶりに逢うから、気合いを入れてシャネルを買ったの。褒めて貰えて良かったわぁ」

と、外見はともかく、大袈裟な身振り手振りだけは十代の女子高生のような女を俺は冷めた眼で見つめる。

「俺に逢うから、わざわざ？ 実沙さん、そんな男を歓ばせること、言いつこなしですよ～。そんな可愛い科白を聞いたら、俺、本気になっちゃうかもしれませんよ？」

こんな心にもない科白を口にするときの自分がイヤで堪らない。

が、流石に、女もこの科白を真に受けるほど世間知らずではない。五十二歳なりの分別は持ち合わせている。

「まあ、そんなお世辞なんて、こんなおばさんに言う必要はないのよ。私はここに来て、悠理君の顔を見るだけで幸せになれるんだから」

相手は俺の言葉を信じてはいないようだ。

俺はもっともらしく見える笑顔—とびきりの微笑で更にとどめを刺す。大概の女はこれでイチコロだ。この笑顔が何よりの武器になることを、俺は四年のホスト勤めでイヤになるくらい学んだ。

「実沙さんって、俺と同じ歳の息子さんがいるんでしょ？ 到底、そんな歳には見えませんかって」「まァ、口がうまいんだから」

と言いながらも、満更、悪い気はしないといった表情である。

ああ、反吐が出そうだ。元々、俺は息をするように嘘をつくのが得意でもないし、好きでもない。

「うちのドラ息子とは大違い、悠理くんって、可愛いわ。ほら、俳優のむか、そう、向井理に似てるわよねえ」

実はしょっちゅう客からも言われることだが、ここはむろん、素知らぬ顔を通す。俺はわざとらしく愕いた風を装った。「ええー、俺と向井さんじゃ、それこそ月とスッポンっすよお」
「ああ、向井くんて、クールに見えて、意外に情熱的でナイーブそうなところ？ 相反する魅力っていうのかしら、そういうのがあるじゃない。悠理くん、もちろんルックスも似てるけど、そういう内面的なものが何か似てるような気がするのよう」

「ハハ、そうっすか？ まあ、そう言って貰えて悪い気はしませんけどね」

俺は照れたように頭をかき、はにかんだ風に笑って見せた。

「ホント、うちの息子も悠理くんみたいにイケメンだったらねえ。うちの子は亭主に似て、ルックスはからきし駄目なのよ。もう冬眠中のカバみたいなの」

「冬眠中のカバ、ですか？」

「そうよ、見た目も中身も面白み一つないわぁ」

「いえ、実沙さんの息子さんなら、きっと実沙さんに似て今風のイケメンに違いありませんよ。俺なんか足許にも寄れないですって」

「フフ、本当に口が上手なのね」

馴れ馴れしく肩に手を置き、耳許で囁く。

「ねえ、この時間が終わったら、アフタで私とどこかに行かない？ できれば悠理クンと二人だけになれる場所が良いわ」

おっと、この女もとうとう来たか。俺は鳥肌立ちそうになるのを我慢して、やんわりと手を払う。

「俺も是非、そうお願いしたいところなんですけど、店の規則でそれは禁止されてるんで」

「あらあ、でも、どうせ皆やってることでしょ。貢(みつぐ)クンや聯(れん)クンなんて毎度のことじゃない？」

貢と聯というのは、この店のホスト仲間だ。俺が以前、接客中だった時、この女の相手を一、二度したことがある。

俺はわざとらしく拗ねた声を出した。

「実沙さん、俺がいるのに、貢や聯とアフタに行ったの？」

俺の気を惹くことができた—と女は思い込んだらしい。忽ち嬉しげに顔を綻ばせた。

「あらあ、私には悠理くんがいるのに、何で他の子とアフターに行ったりするものですか。私には悠理くんだけ」

女が更に口を近づけ、生暖かい吐息が直接、耳朶に吹きかけられる。俺は全身、総毛立った。

「ちょっとだけ、悠理くんに焼きもちを焼かせてみたかったの。フフ、嫉妬する悠理くんも可愛いわ」

何という救いがたい勘違い女！ 俺は心の中で毒づき、それでも極上の笑みは絶やさなかった。

「お袋の具合が良くないもんで。今日は早く帰らないといけないんです」

女はマジで心配そうな顔をした。こんな時、俺は人の好いこの中年女を騙している自分がこの世の中で最低最悪の男だと思わずにはいられない。

この女は確かに恋愛対象にはならないが、それは何も女のせいではない。彼女はただ日頃、満たされない心の間隙を埋めたくて、ここに来ているだけなのに。この女だって、淋しいに違いないのだ。ここに来る女たちは皆、幸せではない。第一、幸せならば、こんなところには来ないだろう。少なくとも、表面的には満たされた生活をしていながらも、心は飢えて渴いた哀れな女たち。

「まあ、それは心配ね」

女は珍しく少し考え込む素振りを見せた。

「悠里クンのお母さまはお幾つ？」

「四十四ですけど？」

女は露骨に愕いた顔をした。

「まあ、若いのね、私より八つも下なの」

母親が四十四だというのは本当のことだ。ただ、今も生きていればの話だが。大体、男を作って幼稚園児の息子を一人、ほっぽり出して家を出ていったような女、今更、母親だなんて思いたくもないし、思ったこともない。親父はあの女のせいで、一生を棒に振った。毎日、日雇いの工事現場で汗水垂らして働いて、挙げ句に過労死で呆気なく死んだ。それが今から数年前のことだ。

親父が死んでから、俺は今の仕事について。昔気質の生真面目な親父が生きていれば、ホストになんぞ間違ってもならなかったろう。

親父と母親は熱烈な恋愛結婚だと聞いている。名家の一人娘だったお嬢さまと家庭教師の恋だなんて、今時、昼メロでも流行らないが、俺の両親はその下手くそなメロドラを地でいった。

だが、我が儘に育った母親はろくな稼ぎもない父親に直に愛想を尽かした。二人が出逢ったのは母親が高校一年、親父が大学三年のときだ。母親が高校卒業するのを待って、二人は手に手を取って遠くの町に行き入籍したが、妄想的恋愛はそこで終わった。母親は貧乏を嫌悪し、事あるごとに父を不甲斐ないと責め立てた。そしてついに、俺が五歳のときに突然、男と逃げた。母親がいなくなった日、父は俺を抱きしめて男泣きに号泣した。

—ごめんな、父ちゃんが甲斐性ないばかりに、ごめんな。

悪いのは何も親父じゃない、勝手に男を作って出ていった母親だったのだが、幼い俺はそれを言葉にして伝えるすべはなかった。不器用で、生涯、社会の片隅で細々と生きていたような人だったけれど、俺は少なくとも親父を好きだったし、尊敬もしていた。

親父の人生は再婚もせずに男手一つで俺を育て、四十三で死ぬまで働きどおしで働いて、何も良いことなんてなかった。親父が死んでから、俺はすぐに高校を止めた。元々、勉強なんて嫌いだったし、学校に行くよりは働きたいと思っていたんだ。それでも真面目に勉強し学校にも通っていたのは、すべて親父のためだった。親父は俺に教師か公務員になって地道に生きて欲しいと願っていたから、その望みを叶えるためにやっていた。

でも、その親父ももう死んだ。母親は十七年前に出ていったきり、どこにいるのか、生きているのかも判らない。俺を辛うじてつなぎ止めていた細い糸がプツリと音を立てて切れたようだった

。

最初はガソリンスタンドでバイトしていたが、もっと収入が良い仕事を探している中にスナックのウェイターの求人が見つかった。夜の仕事に入ったのは、それがきっかけだ。

俺の母親は貧乏だった親父を棄てた。それなら、もっと一杯稼いで金持ちになってやれば、どこかで生きているかもしれないあの女を見返してやれる。そう思った。

毎日、がむしゃらに稼いだな、あの頃は。今から思えば、あの時期はただ目的もなく、母親を見返したいがために、あがいていただけだった。早妃に出逢ったのは、そんな頃。ある日、近くのキャバクラの女の子数人が連れ立って、俺のいるスナックに来た。その中に早妃がいた。ひとめで可愛い子だなと思ったよ。

色の白い、透き通るような肌で、眼が大きいんだ。俺はよく知らないけど、最近、韓国のKポップとかが日本でも流行ってる、あの韓流スターのK A R Aとかいう女の子のグループにでもいそうな感じの娘だった。

背も高く、脚が凄く長い。スタイルも抜群だった。数人いた子たちの中でも、早妃はとても目立っていたし、絶対に忘れられない強烈な印象を受けた。初めて皆と来てから、一週間もしない中に今度は一人で来てくれて。それで、親しくなったんだ。彼女も俺と似た境遇で育ったんだと判って、尚更、距離がぐっと縮まった。早妃は父親が三歳のときに女を作って出ていったらしい。俺とは反対だ。俺たちが出逢ったときには、両親とは音信不通になっていた。

三度めにスナックに来た時、突然、早妃をよく指名するという客が来た。どうも早妃はそいつのことが嫌いらしくて、逃げ回る早妃をそいつがしつこく追いかけ回していた。カウンター席の早妃と俺が話し込んでいる最中に、そいつが急に現れて、嫌がる早妃を無理に引っ張っていかうとしたから、俺はそいつをぶん殴って、それで店を辞めさせられた。

別に後悔はしてない。俺たち、二人とも頼れるような親もいなかったし、その日から早妃は俺のアパートで暮らし始めた。また、あのイヤな客が早妃のところまで押しかけてこないとも限らなかったからね。

早妃と暮らすようになってから、俺はホストクラブで働くようになった。早妃はアパートの家賃や生活費を出すと言ったけれど、俺は頑として受け付けなかった。当たり前だろ、男として女の面倒見るのは当たり前なもの。その時、俺は十八、早妃は十六だった。早妃も店を変えた。その店は前のところほど大きくはなかったが、前の店のように女の子たちに売春させたりとかしない、風俗にしては比較的、良心的な店なのも俺は安心できた。

でも、男なら、誰でも自分の女に風俗の仕事なんてさせたくないのは当たり前。俺は同棲を始めてから二年目にそのことをはっきりと早妃に伝えた。早妃は俺の意を受け入れてくれて、十五歳から十八歳まで続けていた風俗嬢の仕事から脚を洗った。

俺も早妃と結婚してからは、客と寝るのは一切、止めた。どれだけ金を積まれても、客の誘いには応じなかった。

それから、俺は更にコンビニのバイトも始めた。早妃も昼間、同じコンビニで働くようになった。俺は普段はホストクラブに行かなければならないし、コンビニのバイトは週末の限られた時間しかできなかった。

正直、早妃がキャバ嬢をしていた頃より、家計は苦しかった。男なら女の面倒を見るべきだなんて偉そうなことを言っても、二人の生活は俺の収入だけでは賄えないこともあった。そんなとき、早妃は黙って足りない分を出してくれた。

しかし、早妃が風俗を辞めてからは、それも頼りにはできなくなった。金のことを思えば、正気なら絶対にその気にならないような客相手でも寝た方が良かった。でも、俺はどんなことがあっても、それだけはしなかった。俺には早妃がいる。早妃が側にいてくれるだけで、幸せな満ち足りた気持ちになれるから、この世の終わりが来たって、他の女と関係を持つ気にはなれなかった。

早妃が堅気に戻ってほどなく、俺たちは正式に籍を入れた。結婚式なんてものもやれなかったから、よくチラシに載ってる写真だけの結婚式ってのをやった。別に男はそういうのって、たいして拘りはない。でも、女ってのは、一生に一度だから、ちゃんと形にして残しておきたいものだろうと思って。

早妃は白無垢、俺は柄にもなく紋付き羽織袴。当日は俺も滅茶苦茶、緊張しまくった。あんまり硬くなってるんで、写真館のおじさんに
—背中つついただけで、前に倒れそうやな。 と大笑いされた。

早妃は言うまでもない、めっちゃ、綺麗だった。俺は花嫁さんなんてあまり見たことはない。そんな俺でも、世界でいちばん綺麗な花嫁さんじゃないかと思ったよ。それくらい眩しいくらい綺麗だった。

今でも早妃は時折、そのときの写真を出してきて、嬉しそうに眺めている。早妃が幸せなら、俺も幸せだ。こうやって、その気にもならないお婆さんの相手するのも我慢できる。

「悠理くん？」

客の声で現実に引き戻され、俺は慌てて笑顔で取り繕った。

「済みません。つい、ボウっとして」

客は本当は人の好いおばさんなのだ。俺の物思いも言葉通りだと思ってくれたらしく、シャネルのバッグからニナ・リッチの財布を無造作に取り出し、中から一万円札を数枚引き抜いた。

「これでお母さんに何か栄養のつくものでも買ってあげなさい」

妙なもんだと思う。つい今までは俺を恋人扱いしていた癖に、こういうときは、この人は息子に対するような物言いをする。もしかしたら、俺の母親も今頃は息子のような歳の若い男と一緒にのかもしれない。元々、亭主と息子を棄てて男の許に走るような無節操な女だ。自分の母親が今の客とふいに重なり、俺は堪らない不快感に駆られた。

思わず渡された数万円を突き返してやりたい衝動を襲われた。しかし、これを返すわけにはいかない理由があった。

俺は握りしめた指の関節が白くなるくらい強く力を込めた。

具合の悪い身内がいるというのは満更、嘘ではない。早妃の具合が良くない。

結婚しているというのは店には内緒だ。基本的に彼女、恋人というのは許されるが、妻子持ち、所帯持ちは規格外である。まあ、そこは余計な揉め事を避けるための店側の配慮だろう。なので、早妃は妻ではなく、あくまでも同棲中の彼女ということにしていた。早妃の胎内には今、俺の子どもが宿っている。妊娠が判ったのは四ヶ月前のクリスマスだ。早妃が一できたらしいの。

と言った時、俺は一瞬、ポカンとした。何のことなのか本当に判らなかつたんだ。

そうしたら、早妃が少し小さな声で「赤ちゃんができたらしいの、と恥ずかしそうに言う。そのときの彼女、とても可愛らしくて思わず抱きしめてやりたくなった。

翌日、二人で近くのクリニックを受診し、妊娠が判った。あれから四ヶ月経ち、早妃のお腹はもうかなり大きい。予定日は七月、今は四月に入ったばかりだから、あと三ヶ月もしない中に俺と早妃の子どもが生まれてくる。

子どもが生まれたら、俺もそろそろホスト家業から抜けようかなと考えている。親なら、ちゃんと子どもに胸張れるような生き方しなきゃ。それは親父が俺に身をもって教えてくれたことだ。たとえ、どれだけ貧乏でも、親父はちゃんと前向きに生きてた。

子どもが物心ついたときに、父ちゃんの仕事はって訊かれて、ちょっとあまり言いたくはない。別にこの仕事はどうのとかいうわけじゃない。でも、俺は子どもには、もっと別の仕事をしていると胸を張って言いたいんだ。

俺の心が今も晴れないのは、早妃がずっと家で寝たきりになっているからだ。どうも早産気味らしくて、起きてトイレに行っただけで、赤ん坊が下がってくるのが判るんだとか本人は言っている。

男の俺にはよく理解できないが、クリニックの先生の話では、本当は入院した方が良いのに、早妃が家にいたいと言うんで入院は控えて自宅安静にしているのだ。まあ、確かに、三ヶ月で妊娠が判った直後も迫流産だと言われ、二週間ほど入院したこともあった。

切迫流産という聞き慣れない響きのある言葉が俺には世にも怖ろしげな禍々しいもののに思えた。その早妃のことを思えば、このおばさんのくれた数万円は貴重な収入源だ。あまつさえ、これから赤児が生まれて店を辞めたときのことを思えば、金は少しでも多く貯めておいた方が良い。実入りの点でいえば、この仕事に勝るものなんて、そうそうはないのは判りきっている。

「お母さまの具合が良くなったら、また、考えておいてね。アフターのこと」

生暖かい声がふうっと吹きかけられ、俺は思わず身震いした。

「そういえば、今日は夕方から雨だって、予報では言ってたわね。悠理くん、私、傘持ってきてないのよ。コンビニのでも何でも良いから、傘買ってきてくれない？」

女が事もなげに言い、また長財布から一枚抜いてよこした。今度は流石に千円札だ。

「はい。店の隣に小さなコンビニありますから、そこで買ってきますよ」

こんな場合、タクシーを呼ぶだなんて、野暮なことは絶対に口にしないのが鉄則だ。旦那にも子どもにも内緒のホストクラブ通いでタクシーなんかうっかり使おうものなら、どこから情報が洩れるか知れたものではない。

俺は女が犬に餌でも投げるように渡してきた千円を握りしめ、部屋の外に出た。ソファとガラステーブルの他には小さな冷蔵庫とクローゼットがあるだけの個室は、けして狭くはない。モノトーンで統一された室内はシンプルだがオシャレなはずなのに、俺はこの殺風景な部屋が大嫌いだ。

日常に倦んだ女が若い男を買い、束の間の憂さを晴らす場所。そんな風に思い込んでいるせいだろうか。

部屋から一歩出ると、何かホッとする。生き返ったような心地がして、蒼い絨毯の敷き詰められた廊下を玄関フロアに向かって歩く。

女性客は、夕方から雨だと言っていたが、そういう俺自身も傘は持ってきていない。まあ、ついでにこの千円で俺のビニール傘も買わせて貰おう。たかだかビニール傘を買うのに千円札をよこすくらいだから、おつりがなくても、文句は言わないだろう。大体、そんな金銭感覚の正常な女なら、真昼間から家族に内緒でホストクラブなんかには来ない。

フロアまで出ても、そこには人はいない。いつものようにホストたち全員のパネル写真がズラリと並んでいるだけだ。客たちはまずここで指名したいホストを選び、パネルの側にあるインターフォンを鳴らす。すると、常駐の控え室に待機している支配人が揉み手をしながら遊女を売る女郎屋の女将よろしく飛んで出迎えるという仕組みになっている。

俺は一旦立ち止まり、パネル写真の一角を見つめた。指名率の最も多いナンバーワンの俺はいちばん上にいる。茶色がかった髪は何も染めているわけではなく、全くの自前だ。

自分でいうのも何だが、確かに向井ナントカという俳優に似ている。俺はあんまりテレビは見ないから、俳優とか女優なんて有名人の顔も名前も知らない。

以前、早妃が何かのドラマを見ていたら突然、
一ねえ、あたし、前から思ってたんだけど、悠君って、向井理に似てるね。

と俺を冷やかしてきたことがあった。

他の誰に言われても別に嬉しくも何ともないが、早妃だけは別だ。俺は柄にもなく照れくさくて、

一馬鹿言ってるじゃねえよ。

なんて、わざと渋面拵えて言ったけど。

本当はかなり嬉しかったんだ。早妃、俺の女神。早妃は俺にとってはただ一人の女神さまだから、早妃に褒められれば、天にも昇る心地になれる。

今日は雨だし、ずっと布団の中にいなきゃならない早妃のことも気になるし、早退させて貰うか。

俺は呑気に考えながら、店の自動ドアから歩道に出た。女の言うとおりに、確かに雨は降っていた。

アスファルトが雨に濡れた匂いが鼻をつく。俺は雨の匂いが嫌いではない。深呼吸して思い切り雨の匂いを胸に吸い込んでいると、歩道沿いに一定の間隔をあけて立つ桜並木が眼に入った。

今年の春は桜の開花が早かったから、もう満開だ。この雨でかなり散るかもしれない。俺の店はF駅からほど近い繁華街ともいえない商店街の街角にある。駅前といったって、急行や特急も素通りする小さな駅だし、商店街の店も昔からどこにでもあるような古びたものばかりだ。それでも、この店が結構繁盛しているのは、今風のイケメン揃いだという口コミと、かえって人眼につきにくい場所にあるからだといわれている。

桜が雨に打たれ、しっとりとした良い感じだ。そういえば、今年は俺が忙しかったし、早妃も寝たきりの生活で、花見にも行けなかった。まあ、来年には親子三人で行けば良い。早産気味だとはいえ、早妃もお腹の赤ん坊も順調な経過を辿っていると聞いている。問題はないだろう

あと三ヶ月で、待望の我が子に逢える。俺は口笛を吹きながら、隣のコンビニに向かった。昔から大好きな雨が嫌いになるだなんて、そのときは考えもしなかった。

あれから二ヶ月経った今でも、俺は相変わらず店にいて、惚れてもいない女性客の手を握り、愛想を振りまいている。生まれるはずだった赤ん坊も早妃ももう、この世にはいない。どこを探してもいない。俺の心の中で何かが壊れてゆく。「香奈恵さん、今日のワンピース、物凄くお似合いですよ。何かこう、ぐっときちゃいますね。凄いセクシー」

三十代後半だという女性客に囁きながら、もう一人の俺は泣いている。

お前はここで何をしているんだ。ああ、どこかに行ってしまうものなら、行きたい。ここではないどこかへ。早妃や赤ん坊が逝ってしまった遠い場所へと。

心にもない言葉を吐き、外側だけは甘い砂糖菓子のような中身のない愛の囁きを繰り返す度、俺の内側で何かが音を立てて壊れてゆくのだ。

—あの日、俺と早妃を取り巻くささやかな幸せが脆いガラス細工のように一瞬で壊れた。—

A c c i d e n t

雨が降っている。実里(みのり)は先刻から何度目になるか判らない吐息をついた。車窓のワイパーがかすかな音を立てて、ひっきりなしに眼前で揺れている。いつもは気にならないその音が今日に限って、必要以上に神経をかき立てる。

自分が常になく神経質になっていることに気づき、実里は更に大きな溜息を吐き出した。潤平さんは、どうして自分の気持ちを理解してくれないのだろう？ 短大を卒業し入社して七年めにやっと訪れたチャンスだった。まさに、待ちに待った千載一遇の好機だと言っても、差し支えはない。

なのに、彼は実里にニューヨークについて来いと言うばかりだ。今度のプロジェクトに参加しなければ、恐らく実里には一生、チャンスはめぐって来ないに違いない。だからこそ、今は眼前の事に専念したいのだと心を込めて訴えても、潤平はおよそ聞く耳を持たずしなない。

一体、何がどこで間違ってしまったのだろうか。F女子大の短大部英文科を卒業してから、実里は外資系の出版社に就職した。実里は念願の総合職に配属され、それなりに頑張ってきたつもりだ。

しかし、入社翌年早々、総合職から受け付け係に回されてしまい、実里の希望は空気の抜けた風船のように萎んでしまった。この会社は主に幼児・低学年向けの絵本を出版しており、外国で出版された優秀な絵本を日本向けに翻訳して国内に広めるといふ事業に力を入れている。

得意の英語を活かしたいと思って入社を希望したのに、二年目で早々と総合職から受け付け嬢に回されてしまった。会社の顔といえは聞こえは良いけれど、所詮は単なるお飾りにすぎないのは誰の眼にも明らかである。一君の容貌からすれば、やはり、ここが最もふさわしい居場所だよ。ま、一つ頑張ってくれたまえ。

上司は実里の肩を叩いて慰めるような口調で言ったが、あれは「君は役立たずだ」と宣告されたも同然だった。

以来、秘書検定や英検一級などの様々な必要かつ役立つと思われる資格試験を受け、それらに備えて勉強してきたのだ。社内の自主講習会や有名人を招いての講演会にも積極的に参加して、自分の存在を地味にアピールすることにも努めてきた。その傍ら、休暇にはヨーロッパやアジアを巡り、埋もれた優良な絵本を探して熱心に翻訳した。

そして、チャンスはついに巡ってきた。半年前、新しいプロジェクトを立ち上げるという話が社員全員に告知された。社員であれば誰でも応募できる資格があり、そのプロジェクト案の内容をレポートに纏めて提出する社内選抜試験が行われるというものだ。採用されれば、新プロジェクトの主要メンバーになれるのはむろんのこと、総合職への復帰、引いては実里が最終目標にしていた編集部への道も拓けるのは判っていた。

実里は参加を躊躇わなかった。これまで見つけてきた絵本の中から幾つかを選び、自らの翻訳をつけて、これらの絵本を我が社の優秀選定図書として出版することを提案した。実里の考えるプロジェクトの全容はそれだけではなかった。

まず、新しく刊行する絵本の挿絵を従来のようにプロの絵本作家に頼むのではなく、障害を持ったアマチュアの作家、或いはイラストレーターに頼むというものだ。広く応募者を募り公的なコンクールで優秀者を選び、その作家に挿絵を依頼する。

障害者の就労もしくは社会参加をも促し、同時に話題性も高まり、会社の社会への貢献をアピールすることができる。ただ埋もれた良い絵本を日本に広めるというだけでは、さして斬新なアイデアとはいえないかもしれないが、そこに挿絵を任せる作家を公募で、しかも応募者資格を障害者に限定すれば、話はまた違ってくる。

実里のアイデアは社内選考会で見事に第一位を獲得し、採用されるに至った。むろん、彼女が新プロジェクトの主要メンバーに選ばれたことは言うまでもない。

実里には短大時代から付き合っている恋人がいる。もうかれこれ八年にもなる付き合いだから、半端ではなく長い。実里のアイデアが採用されたその日、彼女は恋人音無潤平とデートする約束があった。実里は待ち合わせた会社の近くのフレンチレストランで早速、潤平に歓びの報告をした。だが、話をひとつお聞き聞いた潤平の表情は冴えなかった。

—それで、どうするつもりなんだ？ 眉間に皺を刻んで問う恋人に、実里は小首を傾げた。—
それって、どういうこと？ 潤平の眉毛の間の皺が更に深くなった。—俺の言いたいことが判らないのか？

正直、そのときは彼の意図を計りかねた。

—俺たち、付き合って何年になると思うんだ？

実里は眼を瞠った。

—この四月で八年目よ。それがどうかしたの？

潤平は焦れたように煙草を取り出し、火を付けた。

—そろそろ潮時だろ、俺たちも。—潮時って？ 潤平が呆れたように鼻を鳴らした。—だからさ、結婚しても良いんじゃないかって言ってるんだよ。

その言葉を聞いて、実里は啞然とした。

皮肉なものだった。実里にだって潤平と結婚したいと願ったことは一度や二度ではなかったのだ。まずは総合職から突如として受け付けに回された時。あのときは、いっそのこと潤平がプロポーズでもしてくれればと思った。

だが、それが単なるに逃げでしかないことに気づき、結婚を逃避の理由にしてはならない考えを改めたのだ。たとえ結婚退職して一時的に安息を得られたとしても、人生に困難はつきものだ。そうやって逃げてばかりいては、何の進歩もない。

それ以外にも、結婚を考えたことはある。今の会社で活躍したいという実里の夢は結婚しても叶えられるものだと思っていた。しかし、大手の広告代理店に勤務する潤平はその頃、仕事の方が面白くてならない様子で、積極的に結婚しようという意思はないらしかった。それが何故、今になって潤平の口から「結婚、という言葉が何の前触れもなく飛び出したのか、最初は怪訝に思った。

確かに付き合ってきた月日だけを数えれば、今、結婚したからといって、けして早過ぎはしない。むしろ、実里の両親などは、潤平との仲はどうなっているのか、そろそろ結婚はしないのかと不安そうに訊ねてきた。

女の二十七歳というのは、まさに適齢期である。今、結婚しなくて、どうするのか？と昔気質の両親などは潤平のどっちつかずの態度にひどく心配して、親戚に実里の縁談紹介を頼む有様だったのである。

けれど、今はその頃とは状況が違う。新プロジェクト立ち上げメンバーに選ばれたことで、実里の未来は大きく変わろうとしている。この企画が少なくとも軌道に乗るまでは、結婚なんて考えられるはずもない。この企画には、実里のすべてがかかっているのだから。

潤平が言うには、何でも今年の秋にニューヨーク支社への出向が決まったという。そこで何年か勤め上げて本社勤務に戻れば、そのときは間違いなく栄転が約束されている。しかし、この出向には一つの条件があった。出向する者は既婚者であるということ。現地では関係者同士一会社ぐるみの付き合いが盛んで、様々なレセプションが催されるのが慣習であり、そのためには夫人同伴でなければならないというのが理由であった。

まあ、言ってみれば、潤平が実里との結婚を決めたのも、その出向話があつてこそではあつた。つまりは、必要に迫られて決断したと言っても良い。

正直、実里には、あまり嬉しい話ではなかつた。いや、彼女だけでなく女にとっては皆、同様だろう。実里は即答は避けた。それが、そのときの彼女に出せる精一杯の応えであつたからだ。

一少し考えさせて。

潤平は考えもしなかつた応えを聞かされたとでも言いたげに、露骨に不満を示した。一何でだ？ お前だって、俺からのプロポーズを待っていたんじゃないのか？ そのいかにも自信家の彼らしい物言いに、実里もカッと頭に血が上つた。一なに、その言い方。それでは言わせて貰いますけど、潤平さんだって、ニューヨーク出向の話がなければ、私と結婚しようだなんて考えもしなかつたでしょ。

こうなると、売り言葉に買い言葉である。その後、二人は無意味な言葉の応酬を繰り返した挙げ句、気まずいままだった。実里は潤平の運転するセダンで自宅前まで送って貰ったが、車を降りるまで二人ともにひと言も喋らなかった。それが、今から一週間前のことになる。更に追い打ちをかけるような出来事があった。

昨夜、潤平からメールがあったのだ。あの夜から一週間、電話どころかメールもない状態が続いていた。一そろそろ頭が冷えた頃だろう？ 良い加減に賢くなれよ。俺と仕事とどっちが大事なんだ？

潤平

あまりにも傲岸なというのか、自分本位の内容に、実里はかえって心が冷えてゆくばかりだった。

今になって急に結婚だなんて、しかもニューヨーク支社に行くための条件を満たすために？

冗談ではない。自分が仕事に夢中なときには実里の心など考えもせず、今更、結婚？

実里は考えた。自分は今まで、彼の何をどう見ていたのか。潤平と知り合ったのは、短大の手話サークルに入ったのが馴れ初めだった。F大の法学部に入ったばかりの彼とは同年だったけれど、短大を卒業した実里の方がひと脚早く社会人になった。

それでも、二人の恋は続いた。二人ともに地元で生まれ育った人間だったのも幸いして、遠距離恋愛になったのは潤平が今の会社に入って四年目にインドのニューデリー支社に一年の期限付きで転勤させられたときだけだった。そのときは実里も一度、インドを訪れている。潤平は俺様で多少我が儘なところはあるが、基本的には根は悪くない男だ。上から目線で常に「俺について来い」のタイプだから、上手く付き合えば、扱いやすい男だともいえる。多少の虚栄心を満足させて、相手を怒らせない程度に実里も自分を主張する。いつしか、実里はそんな風に潤平の前では自分をコントロールするすべを身につけていた。

だが、果たして、それが良かったのかどううか。今となっては疑問を抱かずにはいられない。潤平の顔色を窺いながら付き合っている間中、実里は本当の自分でいられたのだろうか。彼の前で見せる自分は所詮、偽りの自分でしかなかったことに、今頃、漸く気づいたのだ。

物分かりが良くて、従順で女らしくて可愛くて。それが潤平の好みの女の子だった。思えば、実里はずっとこの八年間、彼の望む理想像を演じてきたにすぎない。

知らずも今回の騒動で、実里は自分たちが八年もの歳月をかけて築いてきたものが空しい幻のようなもの一砂上の楼閣に過ぎないことを知ってしまった。

知らなければ何とか自分を騙し騙し彼との関係が続けていられたろうが、知ってしまったからにはもう今までどおりではいられない。かといって、今になって潤平と別れて別の男を好きになり、また一から始めると考えるだけで、気が遠くなるようだ。

恋愛について、どうも自分はいあまりに臆病というか怠惰になりすぎてしまったらしい。

実里はまた大きな息をついた。ワイパーの音が相変わらず耳障りだ。昨夜は結局、あまり眠れず朝を迎えた。更に今日は新規プロジェクトに参加するメンバー全員がほぼ顔を揃え、初めての企画会議を行った。実里はパネルやフィルムなどを駆使して企画の全容を参加者に詳しく説明し、質問者からの鋭く的確な質問に一人で対応しなければならなかった。

この企画のチーフ、主任は本社の編集部の部長が兼ねるが、副主任は何と企画発案者の実里が任命された。一入倉君。私はあくまでも飾り物の主任だから、責任者はこの企画を考え出した君自身だということは忘れないでくれたまえよ。

会議後、部長から直々に申し渡された言葉は、良く取れば実里を頼りにして立てているということでもあり、逆に取れば、この企画が失敗に終われば、実里に全責任が来るという風にも取れる。

今、実里は、これ以上はないというほど、疲れ切っていた。潤平とのことは、どうしたら良いのか判らない。ここらで別れるべきだと囁く冷静な自分がある傍ら、今、彼と別れたら、もう二度と自分は誰とも結婚できないのではないかと怖れる自分がいた。

新規プロジェクトは漸く動き出したばかりで、果たして未熟で経験もない自分に副主任、事実上の責任者だなどという重い役が果たせおおせるのか自信もない。

失敗すれば、夢が潰えるどころか、会社にも居られなくなるだろう。こんなときこそ慰め側にいて支えて欲しい恋人は、自分の仕事のことしか頭になく、新規プロジェクトか結婚かどちらかを選べと迫っている。

実里は、ふいに眼をしばたたいた。精神的な重圧が高じたのか、あまりに深い疲労のせいかな、眼の前が一瞬、霞んだのである。ハンドルから片手を離し、慌てて眼をこすっている中に、視界のブレは治まった。

ホッとしたその瞬間、数メートル前方に白い影が揺れているのが映じた。刹那、ゾワリと背筋を寒気が走った。しかし、自らを叱咤して落ち着かせる。

ここら界限は閑静な住宅地が続いていて、幽霊が出るなどという話はずいぞ聞いたことがない。ありったけの自制心をかき集めると、グッとハンドルを握る手に力を込めた。

と、あろうことか、白い影はふらふらと頼りなげに浮遊するように揺れながら、こっちへ向かって来るではないか。

実里は焦った。このままでは、あの白い影にぶつかる。慌てて急ブレーキをかけるも、間に合うはずはなかった。やがてドスンと鈍い音がして車のボンネットに少なからぬ衝撃が加わった。一人を、轢いて、しまった。

実里はひたすら茫然としていた。車はとうに停止していたが、彼女はハンドルを異常なほどの力で握りしめたまま、しばらく凍り付いたように動かなかった。やがて永遠にも思える時間が途切れ、実里はハッと我に返った。

随分と長い時間が経ったようだけれど、恐らくものの数秒ほどであったろう。実里は狂ったような勢いで軽自動車のドアを開け、路上に転がり出た。

やはりー。世にも不幸な予感は的中した。急停車した車の真ん前に一人の女性が倒れていた。白い影のように見えたのは、女性がアイボリーの丈長のワンピースを着ていたからだろう。長く茶色い髪が雨に濡れて細い身体に張り付いている。その周りに飛散した血飛沫が見え、雨に濡れたアスファルトを不吉な血の色に染めているのが夜目にも判った。

女性はうち伏した格好で倒れている。実里は女性の身体に手をかけて揺さぶろうとして、思いとどまった。こんな場合には、下手に動かさない方が良い。

「しっかりして下さい。大丈夫ですか？」

女性に自分の声が聞こえているかどうか判らなかったけれど、実里は声を限りに呼んだ。

と、女性がわずかに身体を動かした。

—良かった、生きている！

神に感謝しながら、実里は女性の顔許に近寄った。女性が顔を少し動かし、持ち上げたからだ

。

「大丈夫ですか？ 私の声が聞こえますか？」

実里が問うと、女性がかすかに頷いた—ように見えた。

「お腹に、お腹に」

か細い声で呟くので、なかなか聞き取れなかったが、やっと何回めかに聞き取れた。

「お腹に一赤ちゃんが」 実里は愕然として、女性の細すぎる身体を見つめた。そう、確かに彼女は妊娠していた。これ以上は細くならないのではと思えるほど細い肢体の腹部だけがこんもりと大きく突き出ている。明らかに妊婦の体型だ。 自分は身重の女性を撥ねてしまったのか？

実里は蒼褪め、倒れ伏した女性を見つめた。

実里は顔を覆っていた両手を放し、腕にはめた時計を眺めた。あの白い服の女性—不幸にも車で撥ねてしまった女が処置室に運ばれてから、もう一時間以上が経つ。

女性が身重だと知った実里の行動は早かった。すぐに携帯で救急車を呼び、救急車が来ると、自分もそれに同乗して搬送先の病院まで付き添った。女性が運ばれたのは駅にほど近い小さな総合病院だった。規模はさして大きくはないが、ここには外科も産科もあるし、何より近いということで選ばれたらしい。

—痛いよ、脚が痛いよ、悠君。

担架に乗せられる間、うわごとのように呟き続けた女性の手を実里はずっと祈るような想いで握りしめていた。

救急車で搬送されている途中で、その呟きは途絶えた。女性が意識を失ったのだ。 救急隊員の呼びかけにも女性は二度と反応することはなく、酸素マスクが装着された。

女性が病院に運び込まれている最中、女の看護師が実里に訊ねてきた。

—失礼ですが、ご家族の方ですか？

—いいえ。私が車であの人を撥ねてしまったんです。

実里の言葉に、看護師は同情とも哀れみともつかない視線を投げてから、去っていった。その中にちらりと咎めるようなものが混じっていたのは当然だろう。既に警察にも連絡は行き、現場にも来ていたが、取り調べは明日以降になるだろうと聞かされている。

実里と言葉を交わした警察官は逃亡の怖れもないと判断したのだろう。訊ねるだけのことを訊ねると、後は淡々と現場検証を行っていた。

—まだ詳しく状況を調べてみなければ何とも言えませんが、あなたのお話が真実であるとするれば、非はあなたにではなく、むしろ急に路上に飛び出してきた被害者の方にあるようです。ですから、あなたが責任を問われることはないでしょう。

三十過ぎの警察官はかえって実里に同情を抱いている様子であった。

しかし、今更、責任の所在は実里にとっては取るに足りないことだった。仮にこの生命と引き替えに、あの女性の生命が助かるものならば死ぬことも厭わない。自分のために、他の誰かの生命が失われるなんて、考えただけでも耐えられなかった。

リノリウムの白っぽい病院の廊下を白色蛍光灯がぼんやりと照らし出していた。夜の病院ほど無機質で不安を湛えた場所はない。殊にそこが救急病棟であるだけに、雰囲気はいっそう重く沈んでいるように見える。

座り心地の良くない固い長椅子がぽつんと放り出されているように廊下に置かれていた。実里はその椅子にもう一時間半も座り続けているのだった。

そのときだった。

薄気味悪いほど静まり返っていた夜の病院には不似合いな足音が聞こえた。廊下を駆けてくる足音は真っすぐに近づいてくる。実里は無意識の中に、その足音に身体をかすかに震わせた。

それはやがて実里を見舞うことになるであろう運命の迫り来る足音だったかもしれない。やがて足音がぴたりと止んだ。実里は弾かれたように顔を上げた。視線の先に、一人の男が佇んでいた。無機質な光が照らし出す男の顔は硬く強ばり、この世のすべてを拒絶しているように頑なに見えた。

実里は咄嗟に立ち上がり、深々と頭を下げた。何も訊かなくとも判る。この男はあの妊婦の縁(ゆかり)の人、恐らくは近しい関係にある人だ。年の頃から見れば、夫だろう。

後から彼の影のようにひっそりと現れたのは、やはり男と同じ年頃の男性だ。こちらは沈痛な面持ちではあっても、先の男性よりは切迫感が感じられない。やはり、先に駆け込んできた男性の方が妊婦の夫に違いない。

「この度は本当に申し訳ないことをしてしまいまして、何とお詫びを申し上げて良いものか判りません」

申し訳ありませんでした。

実里は更に消え入るような声で繰り返した。謝って済む問題ではないのは承知しているが、今はただ頭を下げるしかなかった。

男はただ冷淡な眼で実里を睨みつけ、視線をすぐに逸らした。まるで実里をこれ以上は視界に入れたくないとでもいうように。

それも当然だろう。この男性にとって、自分は憎んでも憎みきれない、いや殺してやりたいほど憎い相手だろうから。実里が続けて何か言おうとしたのと、処置室の扉が開いたのはほぼ同時のことだった。

と、眼前の男性が弾丸のような速さで走っていった。ちょうど前に立っていた実里は男性にもろに突き飛ばされる形になった。もちろん、男性は無我夢中で、実里を突き飛ばすつもりはなかったろう。実里は勢い余ってよろけて、危うく転びそうになった。すんでのところで踏ん張り、転ばずには済んだ。

「大丈夫ですか？」 横から控えめな声がかかけられ、実里は虚ろな視線を動かした。見れば、妊婦の夫と思しき男と共にいた連れの男が側に来ていた。

「あいつ、今、動転しちまってるから」

「判っています。悪いのはすべて私ですから」

実里はうつむいた。

白衣を着た中年の医師が出てくる。男が近寄ると、医師は看護師と同じ科白を口にした。

「患者さんのご家族の方ですか？」

男は幾度も頷いた。

「はい、夫です」 やはり、実里の予測は当たっていた。 医師は気の毒そうに彼を見つめてから、静かな声音で言った。

「残念ですが、持ち堪えられませんでした。下肢を複雑骨折していて、内臓の損傷も見られましたね。出血もひどかった。死因はショック死です」

男が嘔みつくように叫んだ。

「子ども、子どもは？ 早妃の腹には俺たちの赤ん坊がいたんだ」

銀縁めがねの医師は眼を伏せ、かすかに首を振った。

男がギロリとにらみ付けた。

「あんたが早妃を殺したのか？」

殺したのか？ その一言が胸を鋭くえぐり、実里は息を吸い込んだ。

「悠理、止めろよ」

付き添いで一緒に来た友人といったところだろうか、先刻、転びそうになった実里に声をかけてくれた男が傍らから男を止める。

「警察の人も言ってただろ。この人だけが悪いんじゃないって。お前のかみさんの方がふらふらと車の前に飛び出していったらしいって」

友人の科白で、男の腹立ちは最高潮に達したらしい。男は両脇に垂らした拳を握りしめた。

「そんなのは、この女の作り話かもしれない。それにー」

男は一瞬、何かに耐えるように眼を瞑り、すぐに開いた。

「それに、そんなことは問題ではない。早妃はこの女の運転していた車にぶつかって死んだんだ。つまり、こいつが早妃を殺したってことさ」

「馬鹿言うなよ。言ってみれば、この人だって、被害者だろうが。急に人が車の前に飛び出してきて、ビビったと思うぜ」

「貴様、一体、誰の味方だ？」

凄みのある声で男が言い、実里を睨(ね)めつけた。

「そうさ、お前がすべて悪いんだ。あんたが早妃を殺したんだ！」

不意を突いて男が実里に掴みかかってきた。

「なあ、頼むから返してくれよ。あいつの腹には赤ん坊がいたんだぞ？ あと三月(みつき)もしたら生まれるはずだったんだ。なあ、お願いだから、早妃と赤ん坊を返してくれよ」

男は実里の胸倉を掴み、烈しく揺さぶった。揺さぶられるままに、実里の身体ががくがくと動く。意思のないマリオネットのように小柄な身体が揺れても、実里はただ相手のなされるままになっていた。

「おい、止せ」

友人が見かねて男を止めに入り、なりゆきを見守っていた看護師二人も色を変えた。最後に処置室から出てきたもう一人の若い医師が駆け寄ってきて、男の片腕を掴んだ。

「離せよ、こいつを殺してやる。早妃の代わりに、俺がこいつを地獄に送ってやる」 男は手負いの獣のように烈しく暴れた。

「何をしていますか！ 止めて下さい。哀しみが大きいのは理解できますが、ここは病院ですよ。気を確かに持って下さい」

若い医師の声が深夜の深閑とした病院に響き渡った。

ついに友人に後ろから羽交い締めになれ、男は抵抗を止めた。

「悠理。そんなことしたら、早妃さんがかえって哀しむぞ？ なあ、早く家に連れて帰ってやろうや。早妃さんも帰りたいってきつと思ってるだろうからな。ここは暗いし寒すぎる」

友人が宥めるように言い聞かせ、男はがっくりと肩を落とした。「早妃、早妃ー」 悠理というのが男の名前なのだろう。男は女性の亡骸にくずおれるように取り縋った。心を引き裂くような咆哮が洩れ、男性が早妃と呼ぶ妻の頬に頬ずりしながら号泣する。到底、見ていられない光景だ。 悠理から手を放した友人が実里に小声で言った。「もうここは良いですから、帰って下さい」 でも、と言いかけて、実里は口をつぐんだ。確かに彼の言うとおりで。実里がここにいなくても、何の意味もなく、ただ嘆き哀しむ人が怒りと憎しみを余計に募らせるだけだ。「明日は君も取り調べがあるんだらう？ 早く帰って休んだ方が良い」 被害者の夫側の人なのに、実里には好意的に接してくれるのは涙が出るほどありがたかった。「それでは、これで失礼します。何か私にできることがあれば、何なりとおっしゃって下さい」 実里は彼にも頭を下げ、踵を返した。実のところ、自分にできることなど何一つないと判っていた。自分という存在は、あの悠理という男や亡くなった妻に対しては、ただ厭わしい存在であるだけ。自分がこれほど無力で惨めに、罪深く思えたことはなかった。病院の前でタクシーを拾う。後部座席のシートに深々と背をもたれかけさせた時、改めて、涙が滲んできた。 一体、自分は何ということをしでかしてしまったのか。一早妃、早妃ィ。 妻を呼ぶ男の声が今も耳奥に灼きついて離れない。 続いてフィルムを再現するかのよう、息絶えた妊婦に取り縋って泣く男の姿がフラッシュ・バックした。 実里は両手で顔を覆い、低い嗚咽を漏らした。タクシーの初老の運転手がちらと振り返り、後は何も見なかったように運転してくれたことも全く気づかないでいた。

V e n g e a n c e (復讐)

誰かが呼んでいる。おい、あの声は誰の声だ？ 悠理は夢い期待に胸を震わせたが、やがて、それはすぐに水の泡のように消え去った。違う、あれは早妃の声じゃない。男の声だ。煩いな、俺を起こすのは止めてくれよ。俺はもう疲れたんだ。このままずっと眠り続ければ、早妃や赤ん坊の許に行ける。早妃のいないこの世界に何の未練があるっていうんだ？ なあ、名前を呼んでるばかりじゃなくて、教えてくれよ。早妃がいなくなったこの世界で、俺は何を支えに生きていったら良い？ 「一悠理、悠理」 呼び声が次第に近くなってくる。悠理は長い翳を落とす睫を細かく震わせ、ゆっくりと眼を見開いた。ゆるゆると面を上げると、親友の柊の気遣わしげな顔が入った。「大丈夫か？」 短いひと言の中に、友の無限の優しさと不安を感じ取り、悠理は無理に微笑んで見せる。「ああ」 だが、言葉とは裏腹に少しも大丈夫ではないことは自分でも判り切っている。現に、それを物語るように、悠理の周囲には既に空になったビール缶が散乱していた。「これ、全部、お前が飲んだのか？」 返事をするのも億劫だったので、悠理はぞんざいに顎を引いた。柊は呆れたと言わんばかりに肩を竦めた。「お前なあ、幾ら酒豪だったって、これだけ飲めば下手すれば急性アル中ものだぜ」 少なく見積もっても、ビール缶は十本近くはあった。

悠理はフツと自嘲めいた笑みを刻む。「それも良いかもな。いや、俺としては是非、そう願いたいよ。いっそのこと、くたばっちまえば早妃や子どもにも逢えるだろう」 柊はわざとらしい溜息をついた。「馬鹿か、お前。良い歳をして、何でそれだけ聞き分けのない三歳児のようなことを言うつもりだ？ お前が早妃さんの後を追ったから、彼女が歡ぶとでも？」 そんなことは思いやしないさ。 早妃はそんな女じゃない。むしろ、ひとり残された俺の心配をあの世とやらでしているだろうよ。 悠理は心の中で呟いた。あいつは、そういう女だった。自分よりも、いつも他人のことを気にかけているような人間だった。だから、俺はあいつに惚れたんだ。あいつの身体との相性が良いとか、今風の美人だからとか、そんな上っ面だけのものに惹かれたんじゃない。 悠理は自分でもゾツとするような昏(くら)い声で言った。「そんなことは言われなくても判ってる」「なら、何で早妃さんを安心させてやれない？ 死んだ方がマシだなんて言うんだよ」 柊が覆い被せるように言うのに、悠理は怒鳴った。「俺が！ この俺が苦しいんだよ。苦しくて堪らないんだ。あいつのいない世界はあまりにも淋しくて空しすぎる。もう、何を目標に生きていけば良いか判らないんだ」「悠理、気持ちは判るけど、しっかり気を持たなきゃ駄目だ」 柊が屈み込んで悠理と眼線を合わせようとして息を呑んだ。「悠理、お前、泣いてるのか？」 悠理の頬をひとすじの涙が流れ落ちていた。悠理は無意識の中に手のひらで頬を撫でた。確かに濡れていた。 そうか、俺は泣いていたんだな。

馬鹿みたいだが、柊に言われて初めて納得した。　どうやら、自分でも自覚のないままに涙を流していたらしい。　柊が押し黙り、小さく首を振っている。今は何を言っても無駄だと思ったのかもしれない。柊の本当の名前は柊(しゅう)路(じ)という。一クリスマスイブに生まれたから、この名前がついたんだ。全くロマンチックっていうか変な趣味で息子の名前つけやがってよう。

　と言いながらも、実のところ、当人はこの名前を気に入っている。悠理と同じホストクラブ `Star★Light` に在籍するホストでもある。四年前に入店して二年目に悠理がナンバーワンになるまでは、彼が常に指名率一位を獲得していたという売れっ子だ。　確かに悠理とはまた違ったタイプだとは思う。悠理が優男なのに対して、柊は陽に焼けた精悍な風貌でワイルドという形容がふさわしい。玄関フロアの紹介パネルにはそれぞれのホストの紹介も簡略に記されており、その中に似ている芸能人、有名人という項がある。柊はそこに `俳優松岡昌宏` と書かれていた。　確かにTOKIOの松岡昌宏を何となく彷彿さとせる風貌ではある。性格も見かけどおり、剛胆で男らしい。その中にも不器用な男の優しさというものが見え、現在は一位の悠理、二位の十代の若いホストに次いで三位にランクインしていた。　多分、悠理とは対照的な性格だから、店のホストたちの中でも長くに渡って親友づきあいが続いたのだろう。タイプが違うから、それぞれの常連というか得意客も全く違う、その点、一人でも多くの馴染みを獲得したいと凌ぎを削るホストたちの中でライバルになることもなかった。はっきりとした歳を訊いたことはないが、多分、悠理より二つくらい上なのではないか。

「夢を見ていたんだ。もしかしたら、夢を見ながら泣いていたのかもしれない」 悠理が呟くと、柗は眼を見開いた。「夢？」 「どこかから声が聞こえてくるんだ。俺を一生懸命探してるって感じかな。俺は辺り一面、白い霧に包まれた中を必死でそいつを探すんだけど、見つからないんだ」 柗は絶句した。 そんな友には頓着せず、悠理は熱に浮かされたように続ける。「遠くから聞こえてくるその声は早妃に似ていた。でも、目覚めてみたら、側には柗がいて、早妃のものだと思い込んでいた声は柗の声だった」 悠理は胡座をかいた上に乗せた両手を握りしめた。「—あいつは、どうなった？」 「あいつ？」 柗は戸惑った顔で悠理を見た。「あいつだよ。早妃と赤ん坊を殺しやがった、あの女」 柗がまた息を呑んだ。「おい、悠理。これはお前にちゃんと言っとかないと駄目だとは思っていたんだが、あれは不幸な事故だったんだ。お前の気持ちは判るが、彼女を逆恨みするのは止めろ」 悠理が燃えるようなまなざしで柗を射抜いた。「逆恨みだと？ 何で、そうなる？ 早妃と子どもがあの子の車に撥ねられて死んだのは紛れもない真実なんだぞ」 柗は激昂する悠理をとよりより、自らを落ち着かせようとするかの口調で言った。「実は俺もあれから気になって警察に電話してみたんだ。まっ、いずれ捜査当局の方からお前に直接、連絡はあるだろうがな。取り調べを担当した刑事がぼやいてたぜ。お前の携帯に何遍電話しても、電源が切られてるって。事故の翌日、彼女に事情聴取をしたところ、やはり、早妃さんが一方的にあの子の車の前に飛び出してきたということらしい。それとは別に行った現場検証や目撃者の証言でも裏付けは取れたそうだ」

「目撃者？ そのときの様子を見てたヤツがいるのか？」　ああ、と、柊は頷いた。「雨が小降りになったので、近くの自販機までジュースを買いに出かけた近所の大学生がいたとのことだよ。帰りに丁度、現場を通り掛かって、事故の一部始終を目撃したそうだ。彼の証言では確かに早妃さんの方が先に路上の真ん中に飛び出して、車は慌てて急ブレーキを踏んだのに間に合わなかったと」「そんなのはデタラメだ」　悠理は低い声で言った。「悠理、そんなはずは一」　言いかけた柊に、悠理は叫ぶ。「お前もだ柊、何で、あんな見も知らない女をそんなに庇うんだ？

お前もその目撃者とやらも警察とグルになって嘘八百を並べ立ててるんだろ」　柊の濃い男らしい眉が少しつり上がった。「馬鹿言うなよ。何で俺が嘘を言う必要がある？」　悠理が掬い上げるような眼で柊を見た。「なら、もし仮に真琴ちゃんが同じ目に遭ったら、どうするんだ？」

真琴というのは、柊が三ヶ月前に別れた元カノである。二年付き合っ、柊はベタ惚れだったのに、真琴に同じ歳の彼氏ができて、あっさりフラれてしまったのだ。真琴は柊よりも八つも下の女子高生だった。「一」　黙り込んだ柊をちらりと見、悠理が勝ち誇ったように言う。「お前の大切な真琴ちゃんが早妃と同じように車に撥ねられて死んじまっても、お前はそんな物分かりの良いことが言えるのか！？」　柊はしばらく考え込んでいたかと思うと、きっぱりと言った。

「ああ、俺なら言えるね」　悠理がフと馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「それは所詮、お前にとっては他人事だからさ。早妃は俺の女であって、お前には拘わりのない赤の他人だもんな。だから、そんなに綺麗事ばかりが言えるんだ」「良い加減にしろよ、悠理」

柊を拒むかのようにそっぽを向いた悠理に、柊がついに声を荒げた。「俺が早妃さんを他人だと思っていたって？ よくそんなことが言えるもんだな。俺にとっちゃア、悠理は弟分、早妃さんは弟の嫁さんくらいに思ってたんだぜ。あんな良い娘(こ)がこんな風に死んじゃいけない、死んで良いはずがないって想いは俺も同じだ。だがな、悠理、早妃さんの死を乗り越えなきゃ、お前は前には進めないぞ？ そうやって、いつまでもうじうじと内に閉じこもっていても、前には進めないだろうが。世の中には乗り越えたくなくても乗り越えなくてははいけないことがあるし、認めたくなくても認めなくちゃいけないことがあるんだ」「ああ、お前の言うとおりで。確かに早妃が死んだ時、俺の人生の時間は止まった」

悠理がうつむくのに、柊はすかさず言った。「だからこそだ、その止まった時間をもう一度、流れ始めるようにするには早妃さんの死という大きな試練を乗り越えなくてはならない。それくらいは悠理にだって判るだろう」

短い沈黙が流れた。悠理は唇を噛みしめた。「俺は始まらないし、始めるつもりもない。柊、一つだけ教えてくれ。早妃の方が道に飛び出したというのなら、あの女は無罪なのか？ 人ひとりをひき殺して、のうのうとこれからも陽の当たる道を歩けるのか？」「目撃者までいるからには、何らかの罪に問われるとは考えにくいだろうな」

柊が考え深げに言う。悠理は更に唇を強く噛んだ。あまりに強く噛んだために、口の中に鉄錆びた味がひろがる。口の中が切れたのかもしれない。

俺の、俺の早妃が死んだっていうのに、あの女には何も罪を償う必要がないというのか？ 悠理の心に烈しい憎しみと怒りが燃え上がる。だが、悠理にはもう一つ疑問が残っていた。「どうして早妃はあんな時間にあそこをうろついていたんだろう」 疑問がそのまま口に出てしまった。それは悠理が最初から感じていたものではあった。事故が起こったのは午後七時を回った、かなり遅い時刻である。当日は雨が降っており、桜の季節とはいえ、流石に夜も七時ともなれば周囲は闇に包まれていた。早妃の方が飛び出してきたという話が事実だとして、雨のせいで道は滑りやすくなり、ブレーキをかけても停車しにくい状況であったはずだ。おまけに、雨と暗闇のせいで、視界はきかず、車の中から前方を見るのは晴れているときよりも格段に難しい。あの界限は静かな住宅街で、昼間ですら人通りはない。ましてや、あの時間帯に目撃者がいたとすれば、あの女はよほどの幸運に恵まれていたと見える。見通しの悪い狭い道に所々、ポツンと街灯が立っているだけで殆ど明かりらしいものはない淋しい場所だ。認めたくはないが、すべてが事故の起こりやすい状況であった。そんな時間に何故、早妃があその場にいたのか？ 早妃は妊娠中であり、切迫早産でずっと自宅安静をしていたというのに。本来ならば、早妃があそこにいたということ自体が解せないのだ。悠理の疑問は直に解消された。悶々とする悠理の耳を、柗の静かな声が打った。「そのこともちゃんと警察は調べ上げてたよ」 悠理がハッと顔を上げた。柗は大きく頷いた。「早妃さんはお前を迎えに行こうとしていたんだ」

「早妃が一俺を？」 衝撃に心臓が止まりそうになる。「悠理、あの日は傘を持たずに家を出ただろ？ だから、彼女は気になって仕方なかった。お前のことが心配で仕方なかったから、傘二つを持ってアパートを出たんだ。それで、あの事故が起きた」 悠理はしばらくの間、言葉を上手く発せられなかった。様々な想いが一挙に溢れ出て、言葉にならない。 そんな悠理を痛ましげに見つめ、柊が言い添える。「あの日の夕方、六時四十分頃に、アパートの管理人さんが早妃さんに逢ってる。ビニール傘を二つ大切そうに抱えていたと警察に証言したそうだよ。そんな身体でどこに行くのか、寝てなくちゃ駄目じゃないのかと言ったら、笑って言っただろう」 —これから主人を迎えに行ってきます。こんな雨では困ってると思うんで。 そのひと言が悠理の胸を鋭く刺し貫いた。 ああ、何てこった。それなら、早妃を殺したのは、彼女を撥ねたあの女だけじゃない、俺だって、その原因になってるってことじゃないか！ 「馬鹿だな、ホント、馬鹿だよ、あいつ。店の近くにはコンビニもあるし、傘なんて今時買おうと思えば、どこでも買えるのに」 悠理の声が戦慄(わなな)いた。「早妃さんにとって、お前はそれだけ大切な人だったんだよ、悠理」 ああ、そうだったよ。早妃、俺にとっても、お前は世界一の女だった。俺の女神だったんだ。 悠理の眼から涙が流れ落ちた。「こんなことを言えば、お前はまた俺が所詮は他人事だから言うとおっぱを向くかもしれないが、悠理、早妃さんは短い一生だったが、幸せに精一杯生きてと思うぞ。お前に出逢って、二人で暮らしたのが彼女の十九年の生涯でいちばん幸せな時期だったんじゃないのかな」

三歳で父親に棄てられ、母親は早妃が七歳のときに再婚した。その義父は見かけは大人しい平凡な会社員だったが、酔うと別人のようになるという典型的な酒癖の悪いパターンであった。早妃が十三歳の時、酔って帰宅した義父が早妃の勉強部屋を訪れ、既に寝ていた早妃を無理に起こしてレイプした。以来、酔うと似たようなことを繰り返した。母親は途中からは気づいてはいたが、知らん顔をしていた。既に一度男に棄てられた身で、また棄てられるのが怖かったのだ。悪い人ではなかったけれど、いつも亭主の顔色ばかり窺うおどおどした女だった。ついに早妃は耐えられず、十五歳で家を飛び出した。それからの転落は早かった。繁華街をあてもなく歩いているところを風俗の店にスカウトされ、中学も止めて風俗嬢の道に入る。以来、幾つかの店を転々とし、流れ着いたのが悠理と出逢った頃に勤めていたキャバクラだった。けして幸福とも恵まれているともいえない短い生涯であった。悠理との同棲生活は三年に及んだ。「幸せ、だったのかな」早妃のあまりにも短い人生を考えると、今更ながらに早妃が不憫でならない。俺は早妃に一体、何をしてやれたらろう？俺と出逢わなければ、あいつが死ぬことはなかったかもしれないのに。「酷い話だよな。義理とはいえ父親にずっと好き放題にされてきたんだよ。あいつの人生を皆で寄ってたかって踏みにじったんだ。もしかしたら、俺もその一人だったかもしれない」今まで早妃の体面に拘わるからと柊にさえ話したことの無いスキャンダル。流石にこの話には柊も衝撃を隠せなかったようだ。

「何ともやり切れない話だな。世の中の連中は俺たちのようにホストしてるヤツを白い眼で見るけど、実は真っ当に生きてるいかにも真面目そうな男がそんな風に大人しい顔の下に世にも怖い本性を隠してるってこともある。誰も想像もしないだろうよ」 柊は首を振ると、嘆息した。「早妃さんがお前に出逢って不幸だったなんて、頼むから、そんな馬鹿げたことを考えないでくれ。彼女は間違いなく幸せだったはずだ。早妃さんにとって悠理は最後の男で、お前にとっては早妃さんは最高の女だろう？ それで幸せじゃなくて、何なんだ」 悠理はうつむいた。「柊、俺だって判ってるさ。早妃なら、俺が彼女の死から立ち直り、先へ向かって進むことを望むだろう。あいつは、そういう女だ。けど、このままでは俺はどうしても納得できない。早妃を殺して何の償いもしなくても良いというあの女を許せないんだ」「おい、何を馬鹿げたことを言っている。目撃者だっているのに、これ以上、何をどうするというんだ。考えてみれば、彼女も今回の事故の犠牲者の一人だぞ？ 人ひとりを轢いたという大きな罪の意識を背負って生きていかなきゃならないんだ。それがどれほど過酷なことか、お前にだって判るだろうが」「あの女に人並みの良心があればね。柊も言ったじゃないか。いかにも真面目そうな男が実は世間から隠避されている俺らみたいな人種よりも怖いって。女だって、同じだ。あんな、苦労なんてしたこともないようなお嬢さまが実際にはあばずれだったり、良心の欠片(かけら)もないヤツだったりするんだ」 悠理が唾棄するように言うと、柊が眉をひそめた。「そんな言い方するなんて、お前らしくないぞ、悠理。彼女、そんな風には見えなかったじゃないか。ごく普通の子だよ」 悠理の唇が皮肉げに歪んだ。

「まさか、あの女に惚れたのか？　そう言えば、最初から柗は、あいつの肩ばかり持ってるもんな」 「馬鹿も休み休み言え。幾ら長年の付き合いのお前でも許さないぞ？　彼女とは事故のあった当日、初めて逢ったばかりだし、ましてや、あんな状況で惚れるも何もあるもんか。そんなことまで考えるなんて、悠理、お前はどうかしてるんじゃないのか？」 「そうかもな」　悠理は自棄のように頷き、立ち上がった。ふらつく脚で部屋を横切り、隣の小さな板敷きのスペースに行く。そこが流し場のあるスペースで、いわば台所の役割を果たしていた。二人が暮らしたのは、この六畳の和室と三畳ほどの板の間二つきの木造平屋建てのアパートだった。それでも、悠理は幸せだったのだ。早妃さえ、側にいてくれれば。　悠理は小さな冷蔵庫を開け、新しい缶ビールを取り出す。そのままプルタブを引き抜き、一気のみしようとしたところを脇から柗が奪い取った。「良い加減にしろッ。まだ俺の言いたいことが判らないのか」「返せよ」　悠理がビールを取り戻そうとして、勢い余って、缶が吹っ飛んだ。その拍子に柗の顔にまともにビールが飛び散り、彼は顔から身体からビールの洗礼を受けることになった。　素直に詫げる気にもなれず、悠理はプイと横を向いた。　柗は哀しげな眼で悠理を見た。「今日のところは帰るよ。だが、俺が今日、お前に話したことをもう一度、よく考えてみてくれ」　ドアが閉まる音が聞こえ、悠理は両手で髪を掻きむしった。　事故のあった日から、既に十日が過ぎていた。早妃の葬式は近くの会館で簡略に済ませた。

柊はあの女を庇うが、あいつは葬式にすら顔を出さなかった。本当に済まないと良心の咎めを感じているならば、葬式くらいは顔を出すはずだ。来なかったということからも、あの女が今回の事故に対して、さほど何も感じてはいないことが知れる。恐らく上手く罪を逃れられたので、とうに忘れているのだろう。まあ、来たとしても、俺が追い返してやっただろうが。柊の話では、とうにあの女の取り調べも終わり、事件はひと段落しているようだ。そうやって、事故は忘れ去られてゆく。身重の女が一人、車に撥ねられて死んでしまったことなど、世間はなかったことのように直に忘れてしまうのだ。だが、そうはさせるものか。悠理は固く唇を引き結び、真正面を見据えた。たとえ誰が忘れても、この俺は忘れない。早妃は俺の宝だった。俺の宝を突然、奪ったあの女一、名前すら知らないあの女を誰も咎めないというのなら、天に変わって、俺があの人に鉄槌を下してやる。そう、裁くのは天でもなく警察でもなく、この俺だ。早妃が味わった苦しみを倍にして、あの人に味合わせてやるのだ。復讐を遂げなければ、俺は始まらない。早妃を失った後の人生を始めることなどできはしない。なあ、柊。本気で俺を心配してくれるお前には悪いが、俺は自分の思うようにするさ。悠理はクックッと低い声で笑った。忘れようとしても、忘れさせるものか。その双眸の奥に蒼白い復讐の焰が閃いた。

実里は空を振り仰ぎ、小さく身を震わせた。こんな空模様は嫌いだ。まるで今にも泣き出しそうな空は低く垂れ込め、グレーの絵の具一色に塗りつぶされた画用紙のようだ。時折、薄陽がベールのような雲間から細く差し込みはするものの、空の色は明らかに不穏な兆候を示しつつある。

もっとも、曇り空を嫌いになったのは、つい最近のことである。いや、もっと正しくいえば、曇りが嫌なのではなく、曇り空の次に来るもの一雨が嫌いなのだ。雨の日はとても怖ろしく嫌なことを思い出させる。真っ暗な夜道をふらふらと漂うように歩いていた白い服の女。その女に実里の運転する車がぶつかって一。実里は両手で顔を覆った。ああ、誰でも良いから、この底なしの暗闇から救い出して欲しい。あの女性が亡くなる前、一瞬、脳裏に思い浮かべたことは嘘ではなかった。こんな想いをするほどなら、自分が代わりに死んでいれば良かった。この手で、私は人を殺したのだ。たとえ直接に手を下してはいなくても、悪意はなかったとしても、自分のせいで一人の女性が死んだ。しかも、彼女はその身に新しい生命を宿していた。つまり、実里は二人の生命を奪ったことになる。実里の瞼であの日の凄惨な光景がフラッシュ・バックする。路上に倒れ伏していた白いワンピースの女が大きくクローズ・アップされる。まるで棒切れか何かのように道に転がっていた。濡れた髪が白い服に張り付いて一。一赤ちゃん、赤ちゃんが、お腹に。ただひと言、落とした呟き。場面は変わり、救急車の中で女性は実里の手を握りしめて、幾度も訴えた。一悠理君、痛い、脚が痛い。恐らく、あの時、女性は実里を`悠理君、だと思い込んでいたのだろう。そして、`悠理君、というのが、あの男一病院で実里に憎悪と敵意に満ちたまなざしを向けた人であることは疑いようもない。あの男性は亡くなった被害者溝口早妃の夫だと聞いた。早妃は亡くなった当時、妊娠七ヶ月半ばで、そのときに生まれていたとしても今の医学では無事成長する可能性は大いにあった。医師団はせめて胎児か母体のどちらかでも救いたいと手を尽くしたようだが、甲斐もなく先に胎児の心拍が停止し、数十分後に母体の方も血圧が急低下し、心拍も途絶えた。

早妃は早産の傾向はあったものの、妊娠経過は順調で、このままいけば予定日より少し早めに元気な赤児が生まれるはずだったという。つまり、実里が早妃を撥ねなければ、早妃は今もちゃんと生きていて、彼女の胎内に宿った生命も日一日と育っていたはずなのだ。一許してください。何度詫びても、到底、気の済むはずもなかった。事故の数日後に行われた警察の事情聴取では、警察はどちらかといえば、実里の方に同情的だった。一まあねえ。不幸な事故だと思うしかないな。目撃者もちゃんといることだし、入倉さんの方に落ち度はないわけだから。まあ、こんなことはここだけの話だけど、あんたも傍迷惑だったよねえ。夜道でただでさえ視界もきかないのに、いきなり飛び出てこれたら、びっくりするよ。型どおりの話をしただけで、実里はその日の中には自由になれた。その日も既に聞かされていたが、後日、更に連絡があり、裏も取れたことだし、実里が罪に問われることはないということだった。実里は溝口早妃の葬儀には参列しなかった。というより、できなかったのだ。過度の精神的ショックで翌朝から高熱を発してベッドに寝たきりで数日間を過ごす羽目になった。確か早妃の葬式は若夫婦の暮らしていたアパートからほど近い会館で行われると聞いていたから、絶対に行くつもりだったのだけれど。

漸く熱も下がり、何とか聴取を受けられるまでに回復したときには、既に葬儀は終わっていた。実里の懊悩は深かった。たとえ警察で「不幸な事故」と言われても、それで納得はできなかった。自分のせいで人ふたりの生命が失われたということをそう容易く忘れて良いものではないし、また忘れられるものではない。

プッパー。クラクションの音がけたたましく鳴り響き、実里はハッと顔を上げた。今、実里は会社から出てきたところだ。十階建ての近代的なビルは高層建築の見当たらないこの町では結構目立つ。丁度、会社の前が大きな交差点になっていて、大通りは行き交う車が絶えなかった。横断歩道の手前でつい物思いに耽ってしまっていたのだが、どうやら信号が青になったようである。実里は意を決して歩き出そうとしたその時。――ね、死ね。 声が突如として耳奥で響いた。一死ね、死ね。 実里は忌まわしいものを振り払うように、烈しく首を振った。一シネ、シネ、オマエナンカ、シンデシマエバイイ。 だが、幻の声は幾ら首を振っても、いっかな消えない。 実里の身体がユラリと傾いだ。ふらふらと何ものかにいざなわれるかのように車道へと近づいてゆく。 と、先刻より更に烈しいクラクションの音が耳をつんざいた。「危ねえじゃないか、こん畜生、死にてえのか！」 我に返ると、実里は横断歩道のほぼ中央に立ち尽くしていた。信号は赤だ。青になったと思って歩き出したのだけれど、勘違いしてしまったのだろうか。 実里の前すれすれのきわどいところを大型トラックが噴煙を巻き上げながら猛スピードで走り去ってゆく。どうやら、先刻の罵声はその蒼いトラックの運転手が投げたものらしかった。 実里は茫然として小さくなってゆくトラックを見送った。そして、そこに突っ立っていたのでは余計に危ないことに気づき、慌てて引き返した。

歩道には長方形のフラワーポットが何個か置いてあり、紫陽花が植わっている。まだ青々とした葉を茂らせているだけで、花は見当たらない。何台かの車がやはり唸りを上げて眼前を通り過ぎた後、やっと信号が変わった。今度こそ青だ。実里は確認してから、横断歩道を渡り始めた。向こう側からもこちらに向かって歩いてくる人がいる。最初は逆光になってよく見えなかったが、やがて、その人物がはっきりと見て取れた。丈長の薄いブルーと紫のストライプのシャツに、インディゴブルーのジーンズに包まれた両脚は日本人には珍しいくらい長い。茶色がかった長めの前髪の間からかいま見える端正な風貌は、溝口早妃の夫悠理に相違なかった。何を言えば良いのか判らないまま、頭を垂れると、いきなり腕を掴まれた。声を上げる間もなく引きずられるようにして後戻りする。背後には数分前に出てきたばかりの会社のビルが聳え立っていた。悠理は何をするのかと思えば、また突然、実里の身体を突き放した。勢いで実里の小柄な身体は脇へ飛び、よろめいて尻餅をついた。無様な格好の彼女を、悠理は腕組みなどし睥睨している。「結構なところに勤めてるんだな。ここの会社、良いとこの坊ちゃん嬢ちゃんしかコネで入れないんだって？」 そんなのは言いがかりだ。現に実里はちゃんと試験を受けて採用されたし、遠縁の端々まで探し回っても、ここの会社に縁の人はいない。実里は座り込んだまま、無表情に悠理を見上げた。「ところで、そんな格好のままじゃ、中が見えてるんだけど？」 最初は何のことか判らず、やっと彼の意図が判った。スーツのスカート丈が膝少し上なので、姿勢によっては下着がちら見えしてしまうことがあるのだ。

実里は頬を赤らめ、恥ずかしさに消え入りたい衝動と闘いながら立ち上がった。無意識の中にスカートの皺を伸ばす。「本当に申し訳ありませんでした」この男の顔を見れば、同じ科白を口にするしかない。しかし、悠理はそれには何の反応も示さなかった。と、突如として大声で叫び始めたのだ。「皆さん、この女は十日前、F町の住宅街で人を撥ねたんですよ。妊婦を車でひき殺した人殺しなんです。そんなヤツが何の罰も受けなくて、こうしてのうのうと陽の当たる道を歩いてるなんて、おかしいと思いませんか？」「一！」流石に実里も声がなかった。よもや実里の退社時刻を見計らって姿を現し、近隣に響き渡る大音声で`人殺し、と叫ぶとは。今も白い高層ビルからは吸い出されるように次々と社員たちが出てくる。今が丁度、定時の退社時刻なのだ。「この女は人をひき殺したんだ！ それもあと三ヶ月で赤ん坊を生むはずの妊婦をひき殺したんですよ」行く人、行く人に聞こえよがしに同じ科白を口にしている。その様は到底、尋常とは思われなかった。道行く人の反応は様々だ。半数の人は知らん顔をして通り過ぎるが、残りの半分は好奇心と軽蔑の入り混じったまなざしを実里にくれてゆく。中には実里の方を指さし、いかにも意味ありげに囁き交わして通り過ぎる女子高生の二人組もいた。実里の眼に熱いものが滲んだ。駄目だ、泣いては駄目。これは当然の報いなのだ、人一人をひき殺してしまった罪への。でも、このまま、この場所にいるのは耐えられそうもなかった。実里は両手で耳を塞ぎ、泣きながら横断歩道を渡った。涙が溢れて出て止まらなかった。

どこをどのようにして帰ったのか判らない。実里が両親と暮らす自宅は会社から歩いてもせいぜい二十分程度である。あの不幸な事故のあった住宅街からほど近い一角に暮らしているのだ。気がついたときには、自分の家に辿り着いていて、二階まで駆け上がり自室のベッドに身を投げ出していた。両親が留守をしていたのは幸いだった。実里の父は町役場に勤める謹厳実直な公務員であり、母親は駅前のスーパーヘレジ打ちのバイトに行っている。二人ともに実里が起こした事故については、極力触れない。あの日以来、まるで腫れ物に触れるように実里を扱っていた。父も母も衝撃を受けているのは明らかだが、娘が不起訴処分になったことでもあり、これ以上、嫌な事には触れたくないという気持ちがありありと窺えた。少なくとも、この小さな家の中では表面だけは淡々とした以前と同じ時間が流れているかに見えた。それは社内でも同様だ。あの事故はこの町では圧倒的購読数を誇る地方紙の二面に出た。スペースはさほど大きくはないが、眼を通した人は少なくなかったはずである。翌日から熱を出して会社も休まざるを得なかったが、何人かの知り合いには一大丈夫？ 大変だったわね。それで、どうなったの、その後は。と、慰めとも単なる野次馬根性とも取れないような科白をよこされた。他の人も口には出さなくても、腹の中は皆似たようなものだろう。どの人もあの日のことを知っている癖に、敢えて触れようとしなない。その癖、態度には微妙にその影響が出ていて、実里はやりきれなかった。泣きながら、実里はいつしか眠りに落ちていた。哀しい夢を見た。どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえてきて、実里は赤児を探し回っているのに、見つからない。実里の回りには一面ミルク色の靄が立ちこめていて、実里は際限なく赤児を探し続けなければならなかった。

夢の中を漂いながら、実里は泣いていた。一赤ちゃん、私の赤ちゃんはどこなの？ 実里の中に、あの儚く亡くなった女性一溝口早妃の浮かばれない魂が入り込んでしまったのだろうか。

実里は紛れもない我が子を探すように、涙を零し、いなくなった赤ん坊を探していた。闇の中からメロディが流れている。実里はハッと目覚め、ベッドの上に身を起こした。茫洋としていた意識が次第に鮮明になるにつれて、今日の出来事が次々に脳裏に甦った。会社から出てきてほどなく、どこからともなく溝口悠理が現れ、横断歩道を渡りかけていた実里を引きずり戻した。会社前で「人殺し」と実里を通行人の前に引き据えて声高に触れ歩いたこと。思い出すだけで、恥ずかしさと屈辱に涙が出そうになる。しかし、己れのしたことを思えば、致し方ない報いなのだろう。そう思うしかなかった。音楽が鳴っているのは、枕元のナイトテーブルに置いてあった携帯からだ。実里は手を伸ばして携帯を取り上げた。二つ折りの携帯を開き、耳を当てる。一もしもし、入倉さんのお電話で大丈夫ですか？ 若い男の声だ。瞬時に悠理の顔が浮かび、実里は全身に警戒を漲らせた。一はい、入倉ですけど。自らを落ち着かせるように深呼吸してから、続けた。一どちらさまでしょうか？ 一俺、いや、僕は片岡柊路といいます。一片岡さん？ 聞いたことのない名前である。だが、少しだけ安心もしていた。この声は、数回聞いただけの悠理のものとは違う。凍てついた氷のような声ではなく、もっと温かみのある人間らしい声だ。

「はい。その一、何と言ったら良いのかな。溝口悠理の友人です。やはり、と、実里の中で再び疑念と警戒が兆した。悠理本人からでなくとも、彼に拘わりのある人物からの電話なんて、できればご免蒙りたい。―それで、私に何かご用でしょうか？ 用心しながら問うと、片岡柊路と名乗る男は控えめに言った。―お逢いして、お話ししたいことがあるんです。明日の夕方、少しの時間で良いから、逢えませんか？ 実里は躊躇った。あの男の友達だなんて、二人きりで逢わない方が良いに決まっている。その時、実里の中で閃くものがあった。―もしかして、片岡さんって、あの日、病院へ溝口さんと一緒に来られていた？ ―ええ、そうです。相手の声が少し活気を帯びた。あの男は悪い人ではない。ともすれば感情のままに実里に衝突しようとする悠理を宥め、実里を庇いさえしてくれた。―判りました。時間と場所を教えてください。短いやりとりの後、柊路はすぐに電話を切った。翌日の夕刻、実里は柊路の指定した喫茶店にいた。そこは会社からも近いF駅前の小さな店である。二人きりではなく、人眼の多い駅前の喫茶店を選んだのも柊路の思慮深さを物語っている。「済みません、急に呼び出したりして」実里が曇りガラスの扉を開けた時、柊路は既に奥まったテーブル席で手を振っていた。「いいえ、お気になさらないでください。ですが、何故、急に？」柊路はここまで来ても躊躇うことがあるのか、逡巡する様子を見せた。それから覚悟を決めたようにひと息に言う。

「最近、何か身の回りで変わったことはありませんか？」 「変わった一こと、ですか」 やはり真っ先に浮かんだのは、昨日の出来事だ。しかし、そのことを当の悠理の親友であるこの男に打ち明けても良いものかどうか、即断はできかねた。実里の表情に何か感じるものがあったのだろう、柊路はわずかに身を乗り出してきた。「心当たりがあれば、何なりと教えてください」

それでもまだ言うだけの勇氣はない。柊路が溜息をついた。「あるんですね？ 気になることが」 実里は口を開きかけ、また黙り込む。「もしかして、悩んでいるのは悠理のことですか？」 沈黙が何よりの肯定となる場合もある。柊は、やれやれといった表情で首を振った。「多分、そんなことになってるんじゃないかと思っていました」 刹那、実里はバネ仕掛けの人形のように顔を上げた。「何で判るんですか？」 柊路が笑っている。「まあ、あいつ—悠理とはもう長い付き合いですからね。あいつの考えてること、やりそうなことくらいは判ります」 柊路はいきなり押し黙り、実里を見つめた。気まずい沈黙が漂う中、それを破ったのも柊路の方だった。「こんな言い方は誤解させてしまうかもしれませんが、悠理は今、まともな状態ではありません。奥さんを失って、常識的な判断というものが全くできなくなってる」「私のせいですね」 うなだれると、柊路は力強い声で否定した。

「僕は違うと思う。悠理には僕が他人だから、そんな冷たいことを言えるのだと言われましたけどね。確かに、それもあるかもしれない。もし僕が悠理の立場だったら、今のように公平に物事を見られるかどうか？ 自信はありません。ただ、今の僕は客観的に考えられる立場にあるので、言わせて貰いますが、あなたは悪くはないでしょう。それは警察の調べでも十分すぎるほど証明されたはずだ」 柊路はそこで既に運ばれていたコーヒーに口をつけた。とっくに生温くなっているはずだが、砂糖もミルクも入れずに飲んでいる。「だが、僕は悠理の気持ちもよく判る。あれだけ愛していた奥さんを急に一しかも、赤ん坊ごと失ったんだ。その哀しみややりきれなさを誰かにぶつけることで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしているんです」 柊路はまだ、ひと口ブラックを飲み、今度はカップをソーサーの上に置いた。カチリと小さな音がする。「だけど、それはけして許される行為じゃない。先日、悠理に逢いました。勤め先もずっと休んでるし、携帯にかけても通じないしってんで、気になって様子見にいったんです。そうしたら、またこういう言い方はどうかと思いますが」 柊路は小首を傾げ、続けた。「まるでドラッグをやったヤツのように訳が判らなくなってるんですよ。急に凶暴になったかと思うと、次の瞬間には嘘みたいに大人しくなって、どん底まで落ち込む。要するに、浮き沈みというか感情の起伏が異常なくらい激しくなるんです」「ドラッガー」 実里には、眼前の男の口から次々と飛び出す言葉が異国の別世界のものののように聞こえた。

柊路が薄く笑む。「あなたのような根っからのお嬢さまには縁もゆかりもない世界のことでしょうけど。俺たちがいる世界では、さほど珍しくはありませんよ」 彼が頭をかいた。「ああ、地が出ちまったな。済みません。あまり慣れてない言葉遣いしてたもんで。普段どおりでも良いですか？」 実里は頷いた。「気にしないでください」 少し悩んだ挙げ句、思い切って訊ねてみた。「あの、失礼かもしれませんが、何のお仕事を？」 柊路が笑った。「知りたいですか？

あまり聞いても、良い気分にはなれませんよ。ホストですよ、俺たち」 `俺たち、というのがこの男とあの悠理を指すのだとは判る。小説や映画、ドラマでは耳にしたことはあるけれど、現実に本物のホストに出逢ったことはない—それが実里の生きてきた世界の限界であった。 実里の胸中を見透かすかのように、柊路がやや自嘲気味に笑った。「軽蔑する？」 「いいえ！」 即座に大声で言ってしまい、実里は慌てて口を押さえた。「ごめんなさい。大きな声を出したりして。でも、私、そんなことで人を決めつけたりはしません。だって、どんな仕事をしていても、それがその人のすべてじゃないでしょう。大切なのは職種ではなくて、どれだけその仕事を頑張っているかだと思いますから」 柊路が眼を丸くした。「へえ、そんな考え方をする子もいるんだ。君って珍しいね」 実里は少しムキになり過ぎたことを後悔して、紅くなった。

柊路はふと真顔になった。「君みたいな良い子なら、尚更、忠告しておく必要があるそうだな。良い、今の悠理は本当の悠理じゃなくなってる。だから、気をつけて。入倉さんもさっき、悠理について何か悩んでることがあるような感じだったけど？」　この人なら信用できる。実里は昨日の出来事を包み隠さず柊路に話した。話を聞いていた柊路の顔が徐々に蒼褪めていくのを、実里は不安そうに見た。「こんな話して、気を悪くされました？」　悠理はこの男にとっては無二の親友なのだ。もしかしたら、実里の被害妄想的な作り話だと思われたかもしれない。が、柊路は予想外のことを言った。「今の彼なら、やりそうなことだ。入倉さん、しばらくは一人で行動しない方が良い。何なら、警察にでも伝えて、ボディガードして貰ったら？」「そこまでは」　実里が首を振ると、柊路は頷いた。「確かにね。話が余計に大きくなるだけかもな」それからしばらく当たり障りのない話をした後、柊路は走り書きのメモを渡した。「何か気になることがあったら、電話して。俺も悠理の様子に気をつけておくから」　柊路はこれから店に出るという。聞けば、駅前のスターライトという店にいるらしい。ここからだと言と鼻の距離だ。

自宅まで送るという柊路の申し出を丁重に断り、実里は一人、柊路が残していったコーヒーカップを見つめた。実里の前のアイ스티ーはとうとう少しも口を付けなかった。ここまで深刻な話をしながら、アイ스티ーを飲む気になんて毛頭なれなかった。ホストクラブ、ドラッグ。

どれもが実里とは縁のない世界のことばかりだ。まるで果てしない闇へと続く世界の深淵を垣間見たようで、実里は知らず身体を震わせた。

それにしても、あの柊路という男性は、影がなくて頼もしい。むしろ誠実ささえ感じられる人だった。やはり、人を外見とか職業だけで判断してはいけないのかもしれない。だが。溝口悠理という男は何を考えているのだろうか。最愛の妻を殺したと実里を恨んでいるのはよく知っているけれど、昨日のように、ずっと実里に付きまといて恨み言を囁き続けるつもりなのだろうか。一哀しみややりきれなさを誰かにぶつけることで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしているんです。もし彼が一時的にでもそうやって自分に恨み辛みをぶつけることで、いずれ立ち直れるというのなら、実里は辛くとも耐えるつもりだ。しかし、あの憎悪に燃える瞳は、単に恨み言を述べ立てるだけで済むとは思えないような一何か空恐ろしい企みが秘められているのではないか。そう思うような危うさがあった。私は、あの瞳が怖い。暗い焰を宿した瞳が常に、どこにいても自分を射貫くように見つめているようで。実里は思わず両手で自分の身体を抱きしめていた。

S t a l k e r (忍び寄る影)

日毎に萌え立つ緑が眩しい季節となった。 柘路から改めて警告を受けてから三日後の夜である。実里はいつものようF 駅近くのフレンチレストランで潤平と待ち合わせした。 その日、実里はかなり落ち込んでいた。 というのも、同じ日の昼休みに突如として編集部の部長から直々に呼ばれたのだ。 そういえば、このところ新企画の進行について特に何も触れられることはなく、日は淡々と過ぎていた。確か、第一回目の初顔合わせのときには四月半ばには二回目の会議がもたれるということだったのではないか。 しかし、実里は特に何の疑念も抱かずにいたのだけれど、どうやら、それは甘かったらしい。 部長室に入った実里は部長から一方的に新プロジェクトのメンバーから外される一と申し渡された。 一ええっ、何ですか？ 衝撃と愕きを隠せない実里に、部長は神経質そうにコツコツと人差し指でデスクを叩いた。 一理由を私の口から言わせるのかね。 一そうおっしゃっても、私には何故なのか納得がいきません。 部長は少し憐れむような視線をよこしてきた。 一君自身もあまり聞きたくはない理由だと思うが。 部長は机の表面を弾くのを止めると、今度はすっかり薄くなった頭髪を掻いた。 一まあ、君がそこまで言うのなら、理由を話そう。入倉君、最近、君は自動車事故を起こしたそうだね。 刹那、実里の身体が硬直した。 一君もまさか、この私がそのことを知らないと思っているわけではなかろう。私だけではなく、社員全員が知っていると言っても過言ではないはずだよ。

部長は実里の顔色が白くなっているのを見、ゆっくりと頷いた。一何しろ小さな町だから、悪い噂はすぐに知れ渡る。だとすればねえ、入倉君。そういうとかくの風評がある人物を我が社の大切な新規プロジェクトの主要メンバーにしておくわけにはいかんのだよ。殊に今回の企画はやや低迷気味の我が社の社運を立て直すための重要なものだ。会社の威信を賭けてのものといっても良いこの企画に、新聞に載るような事件を起こした者を加えるわけにはなあ。むろん、私だって、君に何の落ち度もないことは理解しておるつもりだ。しかし、上のお達しで、まあ、そのう、こういう結果になってしまって非常に残念だ。要するに、人を撥ねて殺したような人間は、会社の`顔、を賭けた重要企画には拘わらせたくない、というのが言い分であった。一判りました。部長がここまで言うからには、恐らくは社長命令に違いない。今更、どう抗議したところで、この命令が覆されることはないだろう。実里は小さく頭を下げ、部長室を出た。落胆とやるせなさが同時に胸の内ですめぎ合い、溢れそうになる涙をまたたきで散らすのが精一杯だった。後に、実里は企画書の社内選考会で第二位を獲得した若手男子社員が自分の代わりに抜擢されたと聞いた。しかし、かといっても、実里の出した企画案はそのまま採用され、それを考え出した実里本人だけが不名誉な噂によって切り捨てられただけだ。潤平にそのことを訴え、やりきれない気持ちを聞いて貰えればと思ったけれど、それはできない相談である。潤平は九月のニューヨーク出向までに実里と入籍したいと望んでいるのだ。そのためにも、今回の新規プロジェクト企画は諦めて欲しいと考えていた。今、彼に企画メンバーから外されたことを話しても、かえって、あからさまな安堵の表情を見ることになるだけだろう。

余計に空しくなるばかりなのは判っていた。折角注文したシーフードパスタも一向に食が進まない。実里が沈みがちなのに気づいたのか、潤平がわずかに眉根を寄せた。「どうしたんだ？ 元気ないな」「そう？」 実里は気のない様子で応え、無意味にパスタをフォークでかき回した。「何かあったのか？」 探るような声に、実里は思わず笑い出したくなった。潤平は実里が心配というよりは、実里を沈ませている問題が自分にまで波及しないかどうかの方が気になるのだ。その心情がもろに顔に出ている。そんな彼の様子を見ている中に、三日前に逢った柊路の顔が自然に浮かんでいた。ホストクラブ勤務だとか、ドラックなど日常的なことで珍しくはないと語っていた。話だけ聞けば、今までの実里なら避けて通り過ぎていたような世界の人だ。しかし、実際に柊路と眼前の恋人を比べて、どちらが男として、いや、人間としてより誠実であり、優れているか？ そんなことは考えなくても最初から判っている。名の知れた大手の広告代理店に勤めるサラリーマンの潤平よりもホストだという柊路の方が数倍も人間が上だ。どんな仕事をしているかよりも、その仕事にどれだけ打ち込んでいるかが大切なのだ。あの日、柊路に言った言葉は、あながち間違っただけではなかったのだと確信が持てた。「ううん、別に。たいしたことじゃないの。潤平さんには関係ないから、心配しないで」 潤平さんには関係ないから一、そこだけわざと強めに発音したが、当の男には伝わっていないらしい。潤平はあからさまに安堵の表情を浮かべた。この調子では、自分たちはいずれ別れなくてはならないだろうな。実里はこの時、ぼんやりと潤平との別離を意識した。

八年も付き合ってきて、彼との別離を考えたのは、これが初めてだ。「そろそろスイーツを注文したら、どうだ？ お前、好きだろ。今日はじゃんじゃん食べよな。何でもありだぞ」と、いつになく実里の機嫌を取るのは、やはりニューヨーク出向の話があるからだろう。潤平は一日も早く、実里から`Yes`の返事を引き出したいのだ。おかしなものだ。これまでなら、一男に食事代を払わせないなんて、俺を馬鹿にしているのか？ と言う癖に一食事の他にケーキなんか食べるのか？ お前は贅沢だな。俺は贅沢はさせない主義だから、食事代は出すけど、その他は自分で払えよ。などと平気で相反することを言っていたのに、今夜はまるで別人だ。あまりの変わり様を皮肉げに実里が見ていることも知らず、潤平は機嫌が良い。だが、この場で別離を切り出すつもりがない以上、ここは二人の関係を波立たせるような言動は慎むべきだ。よほど`今夜はもう結構よ、`と言おうとしたが、思い直して微笑んだ。「ありがとう。それでは、お言葉に甘えてー」メニューを開いたまさにその瞬間、店の入り口がざわざわとざわめくのが耳に入った。次いで罵声が聞こえてくる。ふいの侵入者が何やら喚いているようだが、奥まったここまでは詳細は判らない。「何だ？ 皆、静かに食事を愉しんでるのに」潤平が不機嫌そうに振り返った。と、白と黒のお仕着せを身につけた若いウエイターが慌てて近寄ってきた。「お客さま、お食事中のところを真に申し訳ございませんが、溝口さまとおっしゃる方がご相席なさりたいとたってのご所望でした」ウエイターの言葉が終わらない中に、あの男一溝口悠理がゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。

「何だ、君は」 潤平が眉をひそめても、悠理は平然としている。「ホウ、今夜は恋人同伴でお楽しみですか、お嬢さま。こんな高い洒落た店は俺なんかには一生、縁はなさそうですがね」 悠理は揶揄するように言うと、空いていた椅子の一つに腰掛け、悠然と長い足を組んだ。「溝口さん、話があるのなら、どこか別の場所でー」 言いかけた実里を制し、潤平が態度だけは慇懃に言った。「これは一体、どういうことかな。君は何者なんだ」「俺？ 俺は溝口悠理」 暗に、そんなことも知らないのか？ と馬鹿にしたように言うのに、潤平の白い面が怒りにうっすらと染まった。「実里、この男は？」 悠理では話にならないと考えたのだろう、潤平が実里に確認するような視線をよこす。「この人は」 言いかけた時、悠理が突然、ダンと大きな音を立ててテーブルを拳で打ちつけた。「あんたらな、俺の名前つつうか、溝口と聞いて、何とも思わないどころか、思い出もしないってところが、はや頭がイカレちまってるとしか思えねえんだよ」「なっ」 潤平は怒りのあまり、声を震わせた。 穏やかな物腰の潤平を見た人は誰でも皆、その性格まで同じかと勘違いするのだが、現実には外見と正反対である。むしろ、癩性で短気といった方が良かった。「潤平さん、もう、今日は帰りましょう」 実里がしきりに彼の背広を引っ張っても、潤平は無然として、その手を払った。「お前は黙ってろ。こんな失礼な態度を取られて、黙ってられるはずがない」 と、潤平が小さく頷いた。

「なるほど、そういうことか」 一人で納得顔になり、先刻よりは穏やかな口調で悠理に話しかけた。「いや、失敬した。確か君の名字はどこかで聞いたはずだとは思ったんだが、すぐに思い出せなくて申し訳ない」 言いながら、仕立ての良いビジネススーツの内ポケットをまさぐり、長財布を取り出した。その中からおもむろに一万円札を数枚引き抜き、悠理に差し出した。「これで足りるかな？」 「潤平さんっ。止めて、そんなことしないで。かえって失礼よ」 実里が慌てて止めても、潤平は聞く耳を持たなかった。 悠理の切れ長の眼(まなこ)に剣呑な光が瞬いた。「それは、どういう意味だ？」 悠理は今にも牙を剥いて喉笛に喰らいつきそうな狼に見える。だが、潤平は悠理のそんな微妙な変化には気づかず、滔々と述べ立てた。「何って、金だよ。これが欲しいから、わざわざ恥知らずにもこんなところまでやって来たんだらう？」 「一」 悠理が押し黙り、テーブルの上に置いてあったワイングラスを取り上げた。スと立ち上がり、ワイングラスを潤平の頭上で傾ける。深い紫のロゼワインは見事に潤平の全身にひろがり、上等のスーツには至るところ、滲みができた。 先刻からの興味深いやりとりに、店内にいた客たちの殆どが注目している。こういった場合、他人の喧嘩は大きければ大きいほど面白いものだ。実里は穴があれば、すぐにでも入って隠れたい気分だった。「き、貴様ッ。何をするっ」 潤平の顔が怒気に染まったかと思うと、今度は白くなった。「あんた、ひと一人の生命をたったの数万と引き替えにしようっていうの？」

潤平を馬鹿にするように、悠理の眉が上り上がる。「僕はそんなことは言ってない。だが、君。よく考えてみたまえ。この金を持って、さっさと立ち去った方が君にとってはよほど賢明ではないかと思うがね。この際だから、はっきり断っておこう。僕のフィアンセは君の奥さんを殺してはいない。大体、お宅の奥さんの方がふらふらと路上に飛び出してきたという話じゃないか。妊婦がでかい腹をして夜の七過ぎに外をうろついていたというのも信じられない話だが、僕のフィアンセはそのことで多大な迷惑を蒙ったんだぞ？ そのせいで、社会的な名誉を大いに傷つけられた。実里の方には全く非がないということは警察に行けば、すぐに証明して貰えるだろう。もし、君がこれ以上、実里にしつこくつきまとうようなら、僕にも考えがある。逆に警察に通報して、君を逮捕して貰うことだってできるんだ」 潤平にしては酷く常識的なことを言ったものだ。実里は、そんなことをぼんやりと考えた。確かに、潤平の言うことは筋が通っている。しかし、今の場合、悠理の前で口にするにふさわしい科白とは思えなかった。これでは、かえって相手の感情を逆撫でして、火に油を注ぐようなものである。「お前なア、人間一人を轢き殺しておいて、その言い草はないだろう？ 少しでも死んだ人間に対しての罪の意識とか、ないのかよ」 その科白は潤平ではなく、むしろ実里の方に向けられているかのようでもある。実里が身体を強ばらせている側で、潤平が代わりに応えた。「だから、先刻から言っている。実里に非はないのだから、謝る必要がどこにあるというんだ！ 本当にしつこいな。良い加減にしたまえ。今、この場で警察に突き出されたいのなら別だがね」「潤平さん、お願い、もう止めて」

見かねて縋るようなまなざしを送ると、潤平は鼻を鳴らした。「折角の夜が台無しだ。悪いが、これで失礼するよ」　ワインの赤い滴をしたたかせながら、潤平はぞんざいに顎をしゃくった。「行くぞ」　実里はさっさと先に行く潤平の後を慌てて追う。　後には悠理だけが残された。　ダーン。悠理が腹立ち紛れに座っていた椅子を蹴り倒した。　その場全体が息を呑んだかに見えた。ウェイターたちは拘わりにすらなりたくないというように、遠巻きに離れて眉をひそめている。店のテーブル席をほぼ三分の二ほど埋め尽くした客たちは小声でしきりに囁き交わっていた。

店を出た後、潤平はすごぶる機嫌が悪かった。むっつりとして、実里が差し出したハンカチで滴る赤い滴(しずく)をぬぐっている。「潤平さん、私のためにああ言ってくれたのは嬉しかったけど、あれは言い過ぎだわ。たとえ刑事責任には問われなかったとしても、私があの人のおさんを轢いてしまったのは事実だもの。今、おさんを失った哀しみの底にいる人にあんなことを言えば、かえって逆効果よ」　店から少し離れた駐車場まで行き潤平の運転する白いセダンに乗り込んでからも、実里は懸命に訴えた。だが、運転席に乗り込んだ潤平は氷の彫像のように冷ややかな横顔を見せている。　ややあって、潤平が低い声で言った。「これからホテルに行こう」「え？」　実里は愕いて眼を瞠った。「スーツも濡れてしまったし、着替えたい。ホテルに着く前にどこかの店で使い捨てにできるような服を買えば良い」

「潤平さん、ホテルって」 実里は予期せぬなりゆきに狼狽えながら問う。「俺は今まで実里を少し大事にしすぎた。実里が結婚するまで待ってくれって言うから、キス以上はしなかったけど、そろそろ次の段階に進んでも良い頃合いじゃないのか、俺たち。むしろ、八年も付き合いながら、いまだに実里を一度も抱いていないなんていう方が不自然なんだ」「待って。私はまだ潤平さんと結婚するって決めたわけではないのよ」 潤平の眼に欲望とも怒りともつかない感情が燃え上がった。「良い加減にしてくれよ。今日日、女子高生だって、お前のようなガキみたいなことは言わないぜ」「あんなことがあったばかりなのよ、そんな気になれないわ」「あんなこと？」 意外そうな口ぶりに、実里は眼に涙を滲ませて言った。「溝口さんの奥さんが亡くなってまだ、たったの十日余りしか経っていないわ。なのに、今、潤平さんとそんな関係になれるはずない」「別に構わないだろう。俺たちには関係ない話だ」「どうして？ どうして関係ないなんて言うの？ あの男(ひと)の言うことも満更、間違っただけじゃないのよ。あの男の奥さんは私の運転していた車に当たって死んだわ。確かに私は法的には責任を問われない立場かもしれないけど、私はそれでも自分のせいだと思ってる。私が死ぬことで、あの男の気が済むのなら、それだって構わないと思ってるくらい。なのに、潤平さんは、そんな大切なことを何でもないとか、関係ないのひと言で片付けるってどういうの？」 潤平が鼻で嗤った。「馬鹿だな」

「馬鹿ですって？」 「ああ、そのとおりだ。ちゃんと警察が念入りに調査した上で、お前には罪がないと言われたんだ。それを自分で騒ぎ立てて事を荒立てて、何の得がある？ これ以上、くだらないことを考えるのは止めて、事故については一切、考えるな。もうすべて忘れるんだ」
忘れるですって？ 実里は潤平の最後の言葉を繰り返し反芻した。それは凶らずも自分自身への問いかけともなった。 忘れる？ そんなことができるはずがない。潤平にも言ったように、あの男一溝口悠理の発言は満更間違っていないのだ。あの男の妻の死について、百パーセント、実里に責任はないにせよ、少なくとも幾ばくかはある。それを知らないふりをして過ごすなんて、実里にはできない。できるはずもない。 実里が沈黙を守っていることが了解の証と理解したのか、潤平が車のエンジンをかけた。そのまま発進させようとするのに、実里は首を振った。「ごめんなさい。私、やっぱり、無理だわ」 潤平はハンドルを握ったままの格好で、前方を向いている。「その返事が何を意味するか判ってるのか？」 実里は頷いた。「ええ、ちゃんと理解してる。今夜、潤平さんのものにならなかつたら、もう結婚は考えられないってことでしょう」「そこまで判っていながら、俺と行かないのか？」「そうね。三月の終わりにプロポーズされてから、私なりに色々と考えてみたの。私たちって、今し方、潤平さんも言ってたけど、確かに変だったわよね。ううん、私が言いたいのは身体の関係があるとかないとか、そういうことではなくて、心のありよう」「心のありよう？ 今夜の実里は随分と難しいことを言うんだな」

皮肉も多少は混じっていたけれど、それは潤平の本音に近い気がした。「潤平さんも私も、八年も一緒にいながら、その実、少しも相手の本当の姿を見ていなかったんじゃないのかと思ってる」「本当の一相手の姿、か」「私、潤平さんと逢うときは、いつもあなた好みの可愛い清楚なお嬢さん風っていうスタイルにしてたけど、本当は違うのよ。普段の私はカジュアルで気取らない服が好き。行くお店だって、そう。Tシャツにジーンズはいて、焼鳥屋なんか行くようなデートがしたかった。でも、潤平さんは違うでしょ。今夜のように少しオシャレなレストランでスーツにワンピースっていうシチュエーションが好きなのよね」「なら、実里はこの八年間、ずっと俺好みの女を演じてきただけだと？」潤平の声は固かった。「まあ、そう言えば、そういうことよね」「俺は実里も愉しんでると思ってたんだぞ。お前を歓ばせたくて高い食事代払って、高級な店にも連れていった」「それは感謝してる」実里は少し考え、言葉を選びながら言った。「さっきだって、凄く嬉しかった。潤平さんが溝口さんに向かって、はっきり物を言って庇ってくれたから。ああ、守られてるんだって思って、幸せだなと思ったの」「それなら何故！今になって別れを匂わせるような話をする？」「プロポーズされてから、私たちがあまりに違いすぎることに気づいたの。求めるものも、考え方も何もかも違うのに、結婚して上手くやってゆけるとは思わない」「結局、プロポーズしたことが別離の原因になったとは、皮肉なものだな」「ごめんなさい。最後の最後にこんなことを言って。でも、良かった。今までずっと、あなたの顔色を窺ってばかりで言いたいことの半分も言えなかったけど、最後に言えたから」

潤平からしばらく応(いら)えはなかった。「どうやら、俺はお前が作り上げた俺好みの女っていう幻に惚れてたみたいだな。だがな、実里。たとえ幻であろうが、お前はお前、生身の人間であり女だ。俺は何も可愛いだけの人形を好きになったわけじゃない。だから、もう一度だけ考えてみてくれ。俺と仕事のどちらを選ぶか。俺はもう本当のお前とやらを知ったわけだから、今更、気取る必要もない。その上で俺は今、改めて求婚してる。その意味をよく考えて、また近い中に返事を聞かせて欲しい」「一ありがとう」「愛の告白に、礼を言われるのはあまり嬉しくないな」「じゃあ、ここで降りるわね」「そろそろ十時だ。家まで送ってくよ」実里は微笑んで首を振った。「大丈夫よ。まだ雨も降りそうにないし、歩いて帰るわ」「そうか。なら、気をつけて帰れよ。また電話する」実里は頷いて手を振った。白いセダンがウィンカーを点滅させながら、走り去ってゆく。実里は車が角を曲がって見えなくなるまで、潤平を見送った。潤平は自分が思っている以上に、頼り甲斐のある男なのかもしれない。実里は少しだけ弾んだ気持ちで歩き始めた。ここから家までは急げば十分くらいで着く。できるだけ早足で行こう。しばらく歩いた頃、実里は後悔していた。やはり、意地を張らずに送って貰えば良かった。帰り道には、実はあの道—実里が溝口早妃を撥ねた場所を通らなければならないのだ。普段は少し余裕を持たせて家や会社を出て、あの道は避けるようにしていたのだが、今日はフレンチレストランから歩いて帰ることになったため、回り道ができなくなってしまった。レストランは事故現場から直進方向にあり、脇道はない。

いつもはダイエットのために、片道二十分の道程を歩いて通勤していたのに、何故、あの運命の日に限って、車を使ったのか。それも今更ながらに悔やまれてならないことだ。一つには朝、出かけるときに雨が降りそうだったこと。駅前のスーパーでバイトをしている母がその日だけ父の車ではなく実里の車に乗せて行って欲しいと頼んだのが理由だった。いつもは七時半に家を出る父は当日に限り、早出だからと三十分早く家を出た。それで、八時前に実里が母を積んで車で家を出たのである。別に早妃の亡霊が出るとか、オカルトじみたことを考えて怖れているわけではない。実里が怖れているのは、あの夜の出来事を思い出すからだった。雨に濡れて道端に倒れ伏していた早妃の華奢な身体、膨らんでいた腹。アスファルトを染めていた血の色。一赤ちゃん、赤ちゃんがお腹に。か細い呟きや、搬送途中でしきりに痛みを訴えていた弱々しい声。そんなものが一拳に押し寄せてくるのだ。あれらを思い出す度に、自分が一人の女性の生命を奪ったという重すぎる事実打ちひしがれねばならなかった。ここまで来れば、もう引き返すことはできない。実里はいっそう早足になった。いよいよあの場所に近づいたときのことだ。少し離れた背後から、ひそやかな足音がついてくるのに気づいた。実里は恐る恐る後ろを振り返った。しかし、狭いアスファルト道路が伸びているだけで、辺りは一面の闇に包まれている。とうとう小走りに走ると、足音も速くなる。「一」実里はもう躊躇はしなかった。明らかに何者かが自分の後をつけているのだ。こんな月もない夜更けに人気のない住宅街を散歩する酔狂な人は少ないだろう。変質者かもしれない。

実里が全速力で走り出すと、相手も最早、気配を殺すのは止めたようだ。はっきりと闇夜をひた走る足音が不気味に夜の静けさの底に響いた。途中でふっと足音が止んだ。ああ、諦めたんだわ。実里は荒い息を吐きながら、立ち止まった。その時。突如として背後から羽交い締めにされ、実里は悲鳴を上げた。だが、声が洩れる間に素早く分厚い手のひらで口許を覆われた。なに、一体、どうしたの？ 実里は烈しいパニックに陥った。渾身の力で暴れたが、哀しいかな、非力な女の力では、どうしようもない。あまり想像したくはないことだが、どうも相手は屈強な男のようである。男は実里の口を手のひらで塞いだまま、引きずるようにしてじりじりと進んだ。やがて五十メートルほど来たところで、ふいに男が実里の身体を突き放す。勢い余って、実里はその場に倒れた。慌てて起き上がろうとした身体の上に男が上からのしかかってくる。眼をまたたかせ、馬乗りになってきた男の顔を認識した瞬間、実里は恐怖に眼を見開いた。「あ、あなたはー」あまりの展開に、声が小刻みに震えた。あろうことか、実里の上のしかかっているのは溝口悠理であった。危険な光を放つ瞳がじいっとこちらに向けられている。「どうして、こんなことを」弱々しい声で訊ねてみたが、その理由なら訊かずとも判っていた。復讐一だ。恐らく悠理は自分を殺すつもりに違いない。法的には実里は罪を問われなかったけれど、悠理にしてみれば、到底許し難いことだろう。

いや、むしろ実里が刑事的責任を問われなかったことで、余計に怒りの矛先が向けられたとも考えられる。男が身を乗り出し、彼の唇と彼女の唇との距離はわずか数センチとなった。「哀れっぽい声を出せば、俺がお前を許してやるとでも？」彼の囁きには、官能的で危険極まりない響きがこもっていた。怒りを暴発させないようにと努めているようにも見える。実里は首を振った。「生命乞いなんてしません。私を殺したいのなら、殺せば良いでしょう。それで、あなたの気が済むのなら、私は構いません」 どうせ生きていても、苦しみがあるだけだ。これからの長い一生を人を撥ねて殺したという意識を持ち続けて生きてゆくのはあまりに辛すぎる。

実里の言葉に、冷やかな悠理の口許がほころんだ。「それはそれは。また何と殊勝なというか潔い心がけだな」悠理は少し斜に構えた。「だが、生憎とあんたを殺すつもりはないんだ」「一？」実里は悠理を不審げに見つめた。「まっ、長年付き合った恋人がいるんだから、まさか初めてってわけじゃなかろうし」冷やかな氷の微笑が悠理の美しすぎる面を縁取っている。その笑みに満足と怒りが一体化したものを感じ取った。悠理は美しい悪魔のような凄艶な笑みを貼りつけ、見下ろす。「俺の妻と子が味わったように、お前も地獄の苦しみを味わうが良い」そこで悠理がふっと押し黙った。「早妃も赤ん坊も、もうどこにもいない。だが、お前は生きている」ふと落ちた呟きに深い苦悩がありありと表れていた。

「殺さないのなら、私をどうするつもり？」 眼を潰すとか、手足を折るとか？ よく映画で見かける残酷なシーンが頭をよぎり、実里は小さな顔を絶望の色に染めた。「考えようによっちゃア、あんたも良い目ができるかもしれないし、俺も役得かもしれない。とにかく、俺はあんたをとことんまで苦しめてやりたいんだ。傷物にされた自分の女を見て、あの気取り返った気障野郎がどんな顔をするのかも見物だろうな」 悠理の眼は見開かれ、その奥にひと筋の興奮が見取れる。実里は怯えを宿した瞳を睜り、傷ついた凶暴な獣のような男を震えながら見上げた。「騒がれたら、困るからな」 悠理はジーンズのポケットから布きれを出すと、手早く実里の口に押し込んだ。 突如として男の手が実里のスーツの前にかかった。勢いをつけて左右に引っ張られ、ボタンがはじけ飛ぶ。更に下のシフォンのブラウスも同様に引き裂かれた。ブラウスの下は淡いピンクのブラしか付けていない。派手過ぎもせず、縁についた白いレースと真ん中の飾りリボンが清楚なデザインは実里のお気に入りだ。 実里は死に物狂いで暴れた。時ここに至り、実里も漸く悠理の意図する`復讐、なるものの意味が判ったのである。 悠理は続け様にスカートを引き下ろす。薄手のストッキングはすぐに引き裂かれ、忽ち ブラとお揃いのパンティが現れた。「うう」 布を銜えさせられた口から押し殺した呻きが洩れる。 悠理は頓着せずに腕を伸ばして実里の背中に手を回し、ブラのフックを外した。まるで虫でも摘んで棄てるかのように、ブラを取り去り、後ろへと放り投げる。 ヒューと下卑た口笛が聞こえた。

「あんた、結構、良い身体してるな。胸もグラビアアイドル並にでっかいじゃん」

言いながら、器用に実里の脚から小さなパンティを引き抜いた。

「うーん、こいつは良いや。もう、やりたくなっちゃったよ。俺」

金属音が夜陰に不気味に響き、実里はヒッと恐怖に引きつった声を上げる。 悠理がジーンズのベルトを外し、既に猛り狂った彼自身を取り出したからだ。

「頂き～」

いきなり左の乳房の先端を銜えられ、実里は悲鳴を上げた。

「う、あう」

助けを求めたいのに、布を銜えさせられているために声が出せない。舌先で敏感な胸の突起を転がされる。その合間には空いた方の手で右の胸を揉みしだかれた。

円を描くように乳輪をキュッと押され、一方ではクチュクチュと乳房を吸われる。さんざん胸を弄り回され、実里のピンク色のいじらしい突起は唾液に濡れて淫靡な輝きを放っていた。

「あんたの胸、ホント、きれいだね。あの気障ったらしい男はどうもあんたをあんまり満足させてやってないらしい」

性体験のない実里には判らないけれど、この男は女性経験も豊富だから、女の身体を知り尽くしているのかもしれない。確かに早妃と結婚するまでのわずかな間、悠理は多くの女たちと寝た。その頃は求められれば、客ともホテルに行った。

そんな彼には実里の身体がまだそれほど男に抱かれていないのだとすぐに見抜いたようだ。

「ここが、どこだか判る？」

耳許を熱い吐息がくすぐり、実里は涙の滲んだ瞳を揺らせた。

「あんたが、早妃を轢き殺した場所さ」

「ー！」

実里の眼が大きく見開かれ、大粒の涙が白い頬をすべり落ちた。

「自分がひとり一人の生命を奪ったその場所で、レイプされる気分って、どんなんだろうねえ。そのテの趣味のあるヤツだったら、それだけではやイツちゃうくらい興奮するんだろうけど、箱入り娘のお嬢さまだから、そういうわけにもいかないかな」

言葉だけは優しく、宥めるように語りかけていながら、実里を見下ろす美しい瞳は少しも笑っていない。

実里が大粒の涙を零している間にも、悠理はいつそう屹立した彼自身を実里の下半身にあてがった。

「俺、こう見えてもホストだからさ、こういうのは得意なんだよ。あんたを気が狂うくらいに悦がらせてあげるからね」

前戯も何もなしにいきなり挿入されるのだから、堪ったものではない。しかも、実里はバージンだった。

「うー」

狭い隘路を剛直がおしひろげながら進んでゆく。実里を憎んでいる男だから、そこに労りや愛情が存在するはずがない。

途中まで挿れた時点で、悠理はすぐに違和感に気づいたようだった。

「何だか物凄く狭いな。あんた、もしかして、バージンか？」

実里は到底、返事などできる状態ではなかった。ただ、無理やり秘所を押し広げられる激痛に耐えているしかないのだ。

実里が反応しないので、悠理は再び進み始めた。途中からはもどかしくなったのか、一挙に最奥まで刺し貫いた。実里の細い身体が弓のようにしなり、涙はひっきりなしに流れ落ちる。そのときには悠理にも完全に状況を把握できていた。

悠理は実里の口に銜えさせた布を出した。

「あんた、やっぱりー」

「い、痛いー。痛い」

実里は恐怖と痛みで震えながら泣いていた。

「畜生。初めてなら初めてだと最初から言えよな」

悠理の瞳に一瞬、憎しみ以外の感情が浮かんだが、次の瞬間には消え去っていた。

「マ、それも良いか。早妃をあんたが轢いた場所で、あんたは俺にレイプされ女になった。たとえ処女を失ったのだとしても、早妃のように生命まで失ったわけじゃない」

それにと、悠理の顔に下卑た笑いが浮かんだ。「あんたの身体、凄く良いよ。もう一回レイプされちゃったんだし、どうせなら、キャバクラにでも行けば？ この身体なら、すぐに売れっ子になれるよ。何なら、良いお店、紹介してやるからさ」

何という酷いことを言うのか。 実里は泣きながら、悪鬼のような形相をした男を見つめた。

「殺して、いっそのこと、殺して」

こんな辱めに耐えるよりは息絶えた方がマシだ。

と、悠理の美しい顔が歪んだ。

「殺すもんか。あんたは俺にさんざん汚されて、それでも生きていくんだよ。あんたのあの気障ったらしいフィアンセとやらが今のあんたの姿を見て何て言うかねえ。何なら、写真の一枚でも撮って送りつけてやろうか？」

「止めて、そんなことしないで」

お願いだから。 実里が哀願するのを、美しい悪魔は凄艶な笑みを浮かべて満足げに見つめる

。

「痛みはどう？ 少しは治まった？」

別人のような優しい声色に実里が眼を瞞ったその時、それがやはり見せかけだけのものだとすぐに判った。

悠理が勢いをつけて腰を動かし始めたからだ。処女を失ったばかりだというのに、破瓜の痛みがまだ残っている内奥を鋭い切っ先で幾度も擦られ、抉られるのだ。

「あっ、あうう」

実里の声からは悲鳴とも喘ぎともつかない艶めかしい声がひっきりなしに洩れた。

「あんたの啼く声を聞きながらヤルのも良いんだけどね、いちおう、ここは住宅地だし、誰かに気づかれたらヤバいんだよね」

再び口中に布が押し込まれた。

それからの時間は更に地獄であった。

悠理は屹立を殆ど抜けそうなくらいまで引き出したかと思うと、今度は勢いつけて奥まで刺し貫く。その合間には、乳房を揉まれ、身体と身体が重なり合った下半身の接合部を弄られた。

その愛撫を加えられると、不思議に身体中に電流が走ったように甘い痺れが流れる。ついには気が狂うのではないかと思うほどの快感に包まれ、実里は絶頂に達した。実里の内奥が烈しく痙攣しながら悠理を締め付け始めると、悠理もまた熱い飛沫をまき散らしながら達した。

「あなたの身体って、いやらしいね。バージン喪失したばかりで、普通はこれだけ感じないはずだけど？」

悠理は実里の身体を抱き上げると、器用にひっくり返した。腹ばいにさせられたかと思うと、後ろに回り込んだ男に腰を抱かれ、身体ごと持ち上げられる。まるで犬のようなポーズを盗らされ、実里はあまりの恥ずかしさにまた泣きじゃくった。

悠理がまた口の布を取る。

「あなたが嘆き哀しみながら、俺にヤラれるのって最高。俺、余計に燃えちゃうよ？」

身体だけでなく言葉でも実里をいたぶり、嬲ろうとしているのだ。それから実里はまるで動物のように後ろから何度も犯された。

最後の絶頂を迎えた瞬間、実里は最奥で男の精がほとぼしる妖しい感覚に、身体を小刻みに震わせた。しばらく経っても、悠理の屹立はまだ熱い飛沫をまき散らしていた。感じやすい内奥が濡らされてゆく感覚が堪らなく淫靡であり快感でもあった。

「まさか復讐のためにレイプして、あなたがここまで悦がるとは思わなかった。まあ、俺も良い思いはさんざんさせて貰ったけど」

事が終わった後、悠理はさっさとズボンを元通りにすると、片手を上げた。

「じゃあね。今夜の一部始終をあなたの婚約者にせいぜい教えてあげると良い」

あまりに烈しい荒淫に、実里は心身疲れ果てていた。しばらくその場に気を失って倒れていたと思う。

どれだけ失神していたのかは判らないけれど、気がついたときにはまだ周囲は夜の気配に包まれていた。実里はのろのろと起き上がり、その場に散らばっていた下着や服をかき集めた。ブラウスもスーツも乱暴に引き裂かれて使い物にはなりそうになかったが、とにかくブラとパンティをつけてからブラウスを羽織り、スカートをはいた。ボタンは全部引きちぎられている。前を間に合わせでかき合わせた。

ストッキングは幾ら探しても見つからないので、諦めた。そうやって、とにかく体裁だけは整え一実際には到底、体裁を整えているとは言い難かったが一、とぼとぼと歩き出すと、さんざん大きな肉棒でかき回された下半身が疼くように痛んだ。

地面の上で犯されたので、剥き出しになった素肌のあちこちが擦れて、小さな傷がついている。まさに復讐という言葉にふさわしい、相手への思いやりなど欠片も感じさせない行為だ。

復讐という言葉を使いながらも、あの卑劣な男は自分の欲望もそこそこ満たしたようには見えた。本当に欲望処理だけのセックス。そこには、愛情など当然ながら存在するはずもなく、ただ憎しみだけがあった。

実里には初めての経験だった。それなのに、まさか二十七年間生きてきて初めて男に抱かれるのがレイプだなんて、想像さえしたことはなかった。

新たな涙が滲んできて、実里は低い嗚咽を洩らしながら道を歩いた。

両親が既に寝ていたのは幸いだったといえる。謹厳な父と小心な母が今の実里の姿を見れば、卒倒するに違いなかった。実里は玄関からそのまま二階に上がり、ベッドに倒れ込んだ。本当はシャワーを浴びて、あの卑劣な男にさんざん弄ばれた身体を清めたかった。だが、正直、今はそれだけの気力も残ってはいない。

あの男が自分の中に入り込んで、何度も精を放ったのだと思っただけで嫌悪感に吐いてしまいそうだ。

しかし、その時、実里は迂闊にも気づいていなかった。やがて、その夜の人知れぬ出来事によって、自分がどのように大きなリスクを背負うことになるのかを。実里は着替える元気もなく、そのままベッドに打ち伏して泥のような深い眠りの底に落ちていった。

昼休みの給湯室は実に騒がしい。仕事からひととき解放された女子社員たちが一斉に溢れ出し、ここにたむろするからだ。慎ましい儉約家はここで持参した弁当をちゃっかりひろげている。実里は元来、あまり大勢と群れる質ではなく、大抵は同じ歳の大木ひかると二人で行動することが多い。同年といっても、ひかるは四大を出て入社したので、実は実里の方が会社では先輩になる。しかし、付き合いも長い二人は、今では無二の親友と言って良い関係を築いていた。二十七歳といえば、微妙な年齢である。もう入社したての若い子とはいえず、かといって三十過ぎた中年女と呼ばれるにはいささか早すぎる。

#Detection (発覚)

#Detection (発覚)

昼休みの給湯室は実に騒がしい。仕事からひととき解放された女子社員たちが一斉に溢れ出し、ここにたむろするからだ。 慎ましい儉約家はここで持参した弁当をちゃっかりひろげている。実里は元来、あまり大勢と群れる質ではなく、大抵は同じ歳の大木ひかると二人で行動することが多い。

同年といっても、ひかるは四大を出て入社したので、実は実里の方が会社では先輩になる。しかし、付き合いも長い二人は、今では無二の親友と言って良い関係を築いていた。

二十七歳といえば、微妙な年齢である。もう入社したての若い子とはいえず、かといって三十過ぎた中年女と呼ばれるにはいささか早すぎる。

この時期になると、同期、或いは同年の女子社員たちは三分の二が退社している。その殆どが結婚を目的とした寿退社だ。もちろん、中には今の職場が合わず同業種で別の会社に移った者もいるし、新たな道を求めて旅立っていった者もいた。

しかし、いずれも今の自分に満足できず、新たな道へと踏み出したことに変わりはない。その点、男子社員たちは女子と違い、途中で職を変える者は少なかった。その点はやはり、男にとって仕事は一生のものという考え方がまだまだ日本に根強く残っているからだろう。 同じ年頃の女子社員たちが次々と結婚して辞めていく中で、実里とひかるだけは相変わらず今の会社でしぶとく頑張っている。

その日、実里は給湯室に来て、ホッとしていた。しかも幸運なことに、その日はいつになく人がおらず、閑散としている。実里とひかるが入ってきたときには数人の若い子がいたが、入れ替わるように出ていった。何でもフレンチレストランでランチをするのだとはしゃいだ会話の端々から判った。

「良いわねえ。今時の若い子は何をするにも明るくて」

ひかるが心もち肩を竦める。 実里はすぐに同意して良いものが判らず、曖昧な笑顔を返した。

「良いんじゃない？ しかめっ面しているより、明るい方がまだ良いわよ」

と、ひかるがプツと吹き出した。

「やだ、なに、それ。鹿田さんのこと言ってるつもり？」

鹿田さん、というのは、編集部にいる四十三歳のベテラン社員である。若い女の子たちからは鹿田のお局、といわれ畏怖される対象だ。いまだに独身で、駅前の豪華なワンルームマンションで悠々自適の生活を送っているらしい。

美人といえはいえなくもないが、度の強い銀縁めがねをかけ、長い髪をシニヨンにしていつも黒づくめの格好をしているので、余計に近寄りがたい印象を与える。

「別に鹿田さんのことを言ったわけじゃないわ。人間きの悪いことを言わないで」

とにかく仕事に関しては厳しく、新入社員の中で鹿田さんの洗礼を受けなかった者はいないとまで言われるほどだ。去年の春には、入社したての男子社員が鹿田さんに手厳しく注意され、皆の前で大泣きしたというエピソードがある。

「まあ、でも、確かにああなりたくはないわよね」

ひかるの言葉にはしみじみとした本音を感じられた。

「でもね。知ってる？ 私、大変なことを聞いたのよ」

ぼんやりと考え事に耽っていた実里の耳許で突如として大きな声が聞こえた。

「実里、聞・い・て・る・の」

実里は瞬間的にピクリと身を震わせた。

「な、何よ。耳の側でいきなり大声出さないで」

ひかるが頬を膨らませた。

「だって、実里ったら何を話しかけても、まるで上の空なんだもの」

「ごめん、ごめん。で、何の話だったけ？」

「鹿田さんよ、鹿田さん」

「ああ、そうね。そうだったわね」

ひかるが更に顔を近づけた。

「鹿田さんが営業部長の愛人だって噂、聞いたことがある？」

声を低めて問われ、実里は首を振る。

「まさか。そんな話、聞いたこともないけど」

ひかるは更に小声になった。

「それが、どうやら、そのまさからしいのよ。私も金橋君から聞いたんだけどね」

ひかるには一年近く付き合っている彼氏がいる。金橋大悟といって、営業部二十六歳、一つ下である。爽やかなアスリート系というのか、ルックスも性格もそこそこ良くて若手女子社員たちからはモテる方だ。

「金橋君は営業でしょ。だから、部長ともよく一緒に仕事するじゃない。必然的に鹿田さんとのことも気づいたんですって。いつだったか、退社時間間際に急に鹿田さんが営業部に現れて、二人してそそくさといなくなったそうよ」

「でも、それだけで愛人関係にあると決めつけるわけにはいかないでしょう」

実里が指摘すると、ひかるは笑った。

「でも、その噂って、実はもう数年前から社内では知る人ぞ知るらしいわよ」

「そうー」

実里は気のない様子で相槌を打った。

今の実里には鹿田さんが営業部長の愛人であろうがなかろうが、どうでも良い。

それよりも気になることは幾らでもあった。まず恋人潤平のことだ。あの恐怖の夜一溝口悠理にレイプされた四月半ば過ぎ以降、潤平とはずっと逢っていない。

四月から五月の初めてかけては、潤平の方が忙しかった。いよいよニューヨーク出向が本決まりになり、仕事の引き継ぎなど多忙を極めているらしい。

実里は不安だった。潤平にはまだプロポーズの正式な返事をしていない。なのにニューヨーク行きが決定したというのは、何を意味するのだろうか。当初、ニューヨークに行くためには既婚者でなければならないという条件が付いていたと聞いた。

もしかしたら、潤平は実里が彼の求婚に対してNoと言うはずがないと自信と確信を抱いているのかもしれない。実里自身、確かに今は潤平のプロポーズを受けても良いかもしれないなどと考え始めていた。それは彼には申し訳ないけれど、潤平への気持ちが強まったというよりは、あの夜の出来事一悠理に陵辱の限りを尽くされた一がかなり影響しているだろう。

溝口早妃が死亡したことで、実里は期待していた新規プロジェクトからも外された。実里の不名誉な噂が主要メンバーには不適切ということだったのだから、もしかしたら、ここら辺で会社を辞めた方が良いのかもしれない。会社側もそれを期待しているのではと思えなくもない。

長年温めていた夢も失い、後はただ受付嬢の仕事をするだけ。別に、若さとそれなりの外見があれば、誰でもできる仕事だ。更に二十七歳という年齢を考慮すれば、若さと外見が武器になるのも後わずかにすぎない。

やがては受付嬢からも外され、今度は資料室配属にでもなるのだろう。資料室というのは会社関連のあらゆる資料が保管されている部署ではあるが、現実には資料室行き、を命じられれば、それは永遠に出世コースからは外れたということの意味する。ゆえに社内では資料室配属になった社員を「島流し」と呼んでいた。

そんな屈辱を受ける前に、こちらから身を退くべきなのは判っていた。そのためには、潤平との結婚はとてもタイミングの良い理由になるではないか。

また、あの忌まわしい夜の記憶から逃れたいという気持ちもあった。あの夜を境にして、実里は男性恐怖症に囚われてしまったらしい。会社でも男性社員が側に来ると、忽ち身体が震え始め、顔が引きつる。

もし偶然にでも相手と身体の一部が接触しようものなら、飛びすさってしまう。そのために何度か怪訝な顔をされたことはあるが、今のところは意思の力を総動員しているため、誰かに気づ

かれているということはないだろう。

こんな有様で潤平と結婚して上手くいくのかどうかは判らない。有り体にいってしまえば、彼に抵抗なく身を任せられるかどうか自信はない。

しかし、いつまでも今の状態を続けるのも良くはないことも判る。一度は心療専門のクリニックを受診しようかと考えたこともあった。専門クリニックには、そういったレイプを受けた女性たちを対象にカウンセリングを行ってくれるところがあると以前、女性雑誌で読んだことがある。

しかし、いざパソコンを立ち上げてネットで探しても、現実を受診するとなると尻込みしてしまうのだった。たとえ相手が医師とはいえ、あの夜に体験した怖ろしく屈辱的な記憶を思い出し、誰かに語るというのは酷く抵抗があった。もう、二度と思い出したくもない。

五月の連休明けに一度、潤平から連絡があった。

—そろそろ例の返事を聞かせて貰いたいんだけど、一度、逢えないか？ 潤平

携帯に並んだ短いメールを見ながら、実里は想いに沈んだ。

こんな状態であれこれ思い悩んでいても意味がない。たとえ悠理とのことがなかったとしても、結婚を決める時、女性は色々とあらぬ心配をしてしまうというではないか。これをいわゆるマリッジブルーと考えて、思い切って潤平の胸に飛び込むのがいちばん賢い選択なのだろう。

結婚なんて、誰でもしていることだ。互いに生まれも育ちも違う者同士が家族になり、長い年月を一緒にやっていくのだから、問題が起きないはずはない。その起こるかどうかも判らない問題を気にすることに、何の意味があるというのか。しかし、一方で実里はちゃんと自覚していた。実里の抱える問題は単なる花嫁の憂鬱とは違う、と。潤平は今風の外見とは打って変わり、古い考え方を持っている。だからこそ、八年も交際しながら、実里の頼みを受け容れ二人の関係を敢えてセックスに持ち込もうとはしなかった。

結婚までの女性の純潔性を重要視しているという点では、今時、かなり珍しいかもしれない。相手が潤平自身ならともかく、他の男に抱かれた女を彼が受け容れるかどうかは判らない。しかも、あの夜、潤平にホテルに行こうと誘われながら、実里は断った。その同じ日の夜に実里はレイプされたのだ。

あの時、潤平の誘いに応じていたら、と考えるでもなかった。しかし、やはり、何度、同じ時間に戻ったとしても、自分は彼の求めには応じていなかっただろうと思う。相手にはっきりと身を委ねる覚悟もないのに、生半な気持ちで関係を持ってしまうというのは、実里のポリシーに反する。

その点、出逢ったその日に深間になっても不思議はないとされる現代の風潮の中では実里も潤平も稀有な変わり種、似た者同士なのだろう。

後に、その実里の潤平への認識は一八〇度どころか、三六〇度変わることになるのだけれど。めぐる想いに応えはない。

結局、実里が潤平に返信したメールは、ごく素っ気ないものだった。

一ごめんなさい。今は私の方が仕事が忙しくて、どうにもならないの。落ち着いた頃にまた連絡します。 実里

その落ち着いた頃というのが、いつなのかは実里自身にも実は応えようがないのだ。

「実里、ねえ、聞いてる？」

またしても、ひかるの声が耳を打ち、実里は顔を上げた。

「あっ、う、うん」

ひかるは首を傾げた。

「だから、どうしようかなと思ってるの。私もそろそろ潮時だしね、金橋君がプロポーズしてくれるのなら、それを受けても良いかなと思ったりもして」

何の話だっただろうか？ 今のひかるの発言からして、金橋君がついにひかるにプロポーズした？ 実里は話を合わせるかのように明るい笑顔を作った。

「良かったじゃない。ひかるも満更でもないでしょ。金橋君のこと」

しかし、流石に長年の付き合いだけあって、ひかるは実里が話を殆ど聞いていなかったこなどお見通しのようである。 ひかるにじいっと見つめられ、実里はつい視線を逸らしてしまった。

「何だか最近の実里はおかしいよ？」

「え、そ、そうかな？」

実里は狼狽えながらも無理に微笑んだ。

「お昼、食べないの？ ぐずぐずしてたら、昼休みなんて、あっという間に終わっちゃうよ」

「うん、そうだね」

実里は抱えてきたビニール袋からコンビニのお握り一個とペットボトルのウーロン茶を取り出した。

「ええっ、お昼って、それだけ？」

いささか大仰にも取れる反応を見せ、ひかるが眼を剥いた。

「あまり気分が良くないの。少し胃の調子が悪くて。むかむかして最近は何も食べられないことの方が多し、これだけでも全部食べられないかも」

それは嘘ではない。六月に入ってから、実里は身体の不調が続いていた。始終、頑固な吐き気が続き、食べる物が食べられない。そのせいで、ひと月の間に、実里は一回り以上痩せた。元々小柄で細いから、最近は痛々しい印象すら与えることに、当人はまだ気づいていない。

ひかるがふいに黙り込んだ。何やら考え込んでいるようだ。

「そういえば、実里って、ここのところ、お昼は殆ど食べてないわよねえ」

ひかるに言われるとおりであった。これまでは手作りの弁当を持参するのが日課で、たまにプチ贅沢して、ひかると一緒に近くのファミレスにランチをしに行く程度。

なので、今年、入社したての若い子たちが先刻のようにフレンチレストランにランチに行くと聞けば、やはり数歳離れているだけでも、考え方は明らかに異なっていると思わずにはいられない。実里がこここのところ、頭を悩ませている潤平との件を咄嗟に思い出したのも、彼女たちのフレンチレストランに行くという他愛ない会話からだった。あの店は潤平が好み、しばしばデートで利用するからである。

六月に入った頃から、胃の不調は続いていたので、折角作っても食べられないことが多かった。そのため、弁当は止めて、通勤前にコンビニでサンドイッチやお握りを買ってくることが多くなりつつある。

「そうなの、やっぱりストレスから来てるのかな」

実里は言いながら、音を立ててお握りのラッピングを剥がした。今日の具は鮭。適度の塩味がしつこい吐き気を撃退するには丁度良い。食べただけで吐いてしまうので、用心して、ひと口嚙る。その瞬間、いつになく烈しい嘔吐感が奥底からせり上がってきて、実里は口を押さえた。

「うっ」

どうにも我慢がきかず、愕くひかるを尻目に給湯室を飛び出て、向かいの女子トイレに駆け込む。洗面台の蛇口を流しっ放しにして、少しだけ手のひらに戻してしまったものを洗い流した。

「実里、大丈夫？」

ひかるが気遣わしげに背後から問いかけてくる。

実里はハンカチを出して口の周りや手を拭きながら頷いた。

「ごめんね、急に」

「私なら良いのよ。でも、本当に大丈夫？ 私の見たところ、ただ事ではないような気がするわ。一度、病院に行った方が良いんじゃない？」

「そうね。私も一度、内科に行ってみようかと思うんだけど」

と、ひかるが突然、思いもかけないことを言った。

「こんな質問、実里は嫌がるかもしれないんだけど、実里、前の生理はいつだった？」

「えっ、や、やだ。ひかるってば、何でそんな話になるの？」

実里は頬を染めた。どちらかといえば性的なことには奥手の彼女は、そのテの話も苦手なのだ

。

「女同士なんだから、別に良いでしょ。ねえ、いつだったの？」

ひかるらしくもないと思ったけれど、深くは考えずに応えた。

「えっと、確か三月の終わりだったと思う」

ひかるが愕いたように言った。

「そんなに前？　じゃあ、それからずっと来てないのね」

「うん。ここのところ、新規プロジェクトのこととか、色々あったからね。胃の調子が悪いのもそっちも環境の変化が原因だと思うの」

ひかるはまたも思案顔で言った。

「これも訊きにくいことだけど、彼氏とはその一」

流石にひかるも少し躊躇った後、口にした。

「彼氏と寝たりしてる？」

実里の頬がますます赤らんだ。

「そんなことしないわ」

「えっ、実里。まさか彼氏とはまだ一なんて言わないわよね」

「今日のひかるってば変。何で、そんな話ばかりするの？」

いつもなら実里が嫌がれば、そんな話を続けようとはしないのに、何故、今日は執拗に訊きたがるのか。

疑問に思いながらも、実里はありのままを応えた。

「潤平さんとは、まだ一度もないわ。あなたが多分、訊きたいようなことは」

「信じられない。八年も付き合っているながら、一度もないの？　本当に本当？」

「嘘じゃないわ」

「愕いた。私はてっきりー」

ひかるは心底、愕いたようである。

「じゃあ、ひかるは金橋君とはもう？」

そこは気心の知れた女友達同士、明確にせずとも通じ合うものがある。

当たり前だというように彼女は頷いた。

「付き合っ、そろそろ一年だもの。別に不思議はないでしょう」

毅然として言うひかるの横顔を見る実里の心境は複雑だ。ひかるが急に見知らぬ女になったようでもあるし、ある意味では、そんな風に自然に彼氏と次の段階へと進めるひかるの柔軟さや勇気が羨ましくもある。

だからといって、ひかるが特に蓮っ葉だとか淫乱というわけでは断じてない。むしろ、彼女は実里ほどではないにしろ、現代女性にしては慎ましいタイプの方だ。

恐らく実里のように、結婚前には関係を持ってない、持ちたくないと考える方が時代錯誤すぎるのだろう。今日日、できちゃった結婚は珍しくもない、日常茶飯事だ。

しかし、ひと昔前までは、結婚前の娘が妊娠するなどということは、あってはならないことだった。未婚の娘が身ごもるといふ不祥事が起きれば、その家の者は皆、世間に顔向けができないと小さくなったものである。それが、いつのまにか`結婚前に子どもまでできるとは、更におめでたい喜ばしいこと、になってしまった。今の時代は、どこの有名ホテルに行っても、妊婦用のウェディングドレスが当たり前のように備えてある。つまりは、それだけ結婚前のセックスが一普及したという言い方には語弊があるかもしれないが、世間で抵抗なく受け容れられるようになったという証でもある。あまりにも考え方、風潮そのものが真逆になったとしか言いようがない。

しかし、実里の両親、特に父は典型的な昭和の男だから、婚前交渉（大体、この言葉こそが今は使われない）や結婚前の妊娠などと聞いただけで、額に青筋が浮かびそうだ。実里がいまだに奥手なのは、そういう両親の影響も少なくはないだろう。

彼女がまたも考え込んでいると、ひかるの独り言が聞こえてきた。

「彼氏とは一度も寝ていないのに、生理が来ないのも妙だわ。実里は彼氏がいるのに、他の男と寝るようなタイプじゃないし」

その意味をさして深く考えもせず、実里は微笑んだ。

「今日の帰りに病院に寄ってみるわ」

「私も付き添おうか？」

親切な申し出には感謝するべきだろうけれど、実里は笑った。

「別に子どもじゃあるまいし、一人で行けるわよ」

そこで、昼の休憩時間終了のチャイムが鳴り、話は終わりになった。

その日は六月最後の週だった。ちょうど水曜日だったので、午後から開いている病院を探すのはひと苦労したけれど、何とか開いている病院を探し当てることができた。

その小さな病院は会社からの帰り道にあり、住宅街の一角にそっぴりと建っていた。例のフレンチレストランからも近い。

しかし、ということとは、その病院から自宅に帰るにはまたもあの事故現場を通らなければならないということでもある。内科の看板を掲げてはいるが、片隅には`皮膚科・婦人科、と申し訳程度のように小さく記されていた。

別に関係ない科なのだと思います、受け付けでは内科受診希望であることを伝え、診療室の前の長椅子に座る。置いてある女性週刊誌を捲っていると、すぐに名前が呼ばれた。

四十過ぎの医師は背が高く、屈強な体つきをしていたが、眼がね越しの細い眼は穏やかで、この先生ならば安心して任せられそうという不思議な安心感がある。けして愛想が良いというのではない。が、物腰もやわらかく、不思議に感じの良い医師だという印象だ。

問診と簡単な診察の後、医師は首をひねりながら言った。

「吐き気が続いているのは、いつからですか？」

「六月に入ってからです」

「つかぬことをお訊きしますが、生理はいつ？」

実里は眼を見開いた。この医師までがひかると同じことを訊く。

医者だから訊ねるのだろうと、さして疑問にも思わず応えた。

「三月の終わりですが」

医師は少し考え込むような顔でカルテを眺めていたかと思うと、看護師を呼んで実里に尿検査を受けさせるように言った。

一旦、診察室を出てトイレに行き、また診察室に戻る。しばらくして医師の許に看護師が戻ってきた。検査の結果が出たようだ。医師はまたカルテに何か書き込んだ。

「あの、先生。私、何かの病気なんですか？」

考え込む医師の表情からして、あまり良い兆候とはいえない気もする。

「いえ、特に病気というわけではありませんが、どうも、入倉さん、妊娠されているようですね」

刹那、実里の両眼が射るように見開かれた。

「先生、今、何と？」

医師は改めて実里に向き直り、はっきりと言った。

「おめでとうございます。妊娠されていますよ」

突然、奈落の底に突き落とされたようで、眼の前が真っ白になった。無意識に立ち上がり、目眩を憶えた。ふらつく身体を駆け寄った看護師が慌てて支えてくれなければ、無様に転んでいたに相違ない。

「あ、あの。私」

身に憶えなんてありません。実里が口を開く前に、医師は淡々と告げた。

「妊娠されたのは四月半ばでしょう。今、三ヶ月です。出産予定は来年の一月ですね」

「一」

烈しい衝撃が実里を貫いた。

妊娠したのは四月の半ば一。

医師の宣告がリフレインする。溝口悠理にレイプされたのは丁度、その時期だった。忘れもしない四月十六日の夜だ。

「大丈夫ですか？」

四十歳くらいの女性看護師が優しく顔を覗き込み、実里は辛うじて頷いた。その後、実里は改めて婦人科の診療室で内診を受けた。そこで手のひらサイズの小さなモノクロ写真を渡された。

「これが今の赤ちゃんの様子です。もう、ちゃんと心臓も動いていますし、元気に育っています。このままいけば、来年早々には元気な赤ちゃんが生まれますよ」

手渡された写真を見ると、確かに子宮の片隅に、はっきりと小さな丸っこいものが見えた。これが赤ちゃんの入っている胎囊という袋だと説明された。

また、身体の不調の原因はすべて妊娠によるものだろうと言われた。悪阻が少し烈しいようだが、これも入院治療が必要なほどではないから、処方された薬を服用すれば問題ないだろうとも。

「ここは婦人科なので、基本的にお産は取り扱いません。選択肢としては二つあります。一つは安定期に入る五ヶ月くらいまでは、うちで診させて貰って、それ以降はお産のできる病院に移る方法。もちろん、紹介状を書きますから、それと今までの妊娠経過を記したカルテを持って行って頂きます。二つ目は、ご自分の希望するクリニックがあれば、次回からはそちらで診て貰うという方法ですね。最初から同じ医師、病院で妊娠経過を診て貰う方が望ましいかもしれませんが、どちらを選択するかは患者さんのご希望にお任せします」

実里が何も言わないのを勘違いしたのか、看護師が側から言い添えた。

「ここも十年前まではお産を取り扱っていたんですけど、年々、赤ちゃんの数も減ってくるでしょう。設備を導入しても、肝心の妊婦さんが減る一方なので、仕方なく止めたんですよ」

しかし、実里は最後まで聞いてはいなかった。溢れてくる涙を零さないようにするのが精一杯だったのだ。待合室に戻ると、堪えていた涙が一拳に溢れ出してきた。

何故、どうしてという思いが脳裏を駆け巡る。

これが天罰なのだろうか。

溝口早妃が亡くなったことへの天が実里に下した罰一。

「入倉さん、入倉実里さん」

さして待つこともなく呼ばれ、一週間分の薬を渡された。

「妊娠は病気ではありませんから、あまり深刻に受け止める必要はありませんよ。このお薬を飲んで、無理に食べようとはせずに、食べたいときに食べたい物を食べてね。あと一ヶ月もすればも悪阻も治まりますからね」

先刻の看護師が優しく言い、受け付けで薬を渡してくれた。その時、入り口で囁き交わす声が飛び込んできた。「あれって、受付の入倉さんじゃない？」

「妊娠って言わなかった？」

「私、聞いたわよ、悪阻がどうか」

実里は恐る恐る振り返った。視線の先に、見覚えのある顔が二つ、好奇心を剥き出しにしてこちらを凝視している。二人ともに庶務課の若い女の子たちだ。確か、実里よりは四年ほど遅れての入社ではなかったか。

「こんにちはー」

「入倉先輩、どうされたんですかぁ？」

若い子の語尾を引き延ばす特有の話し方がこれほど瘡に障ったことはなかった。

つい今し方、妊娠だとか悪阻だとか言っていたのに、しれっと訊ねてくるところも嫌らしい。

「ちょっとお腹の調子が悪くて。あなたたちは？」

彼女たちはささっと意味ありげな目配せを交わし、丸顔の可愛らしい子の方が言った。

「私たち、花粉症なんです。もう涙とか鼻水だとか、嫌になるくらい止まらなくて」

もう一人の子の方はマスクをしていたから、それはあながち嘘ではないのかもしれない

「それは大変ね。お大事に」 実里が先輩らしく余裕を見せて笑顔で言うと、丸顔の子がにっこりと笑った。

「先輩もお身体を大切にしてくださーいね。元気な赤ちゃんが生まれると良いですね」

刹那、実里は身体中の血液が逆流するのではないかと思った。真っ青になりながらも気丈に微笑み、`それじゃあ、お先に、と彼女たちの前を通りガラスの引き戸を開けて外に出た。

背後で、`いやだー、と嬌声が上がり、クスクスと忍び笑いが聞こえた。

耳障りな声を遮断するかのようにピシャリと扉を止めると、一步外に出た実里の眼を眩しい初夏の陽光が貫いた。神様はあまりに残酷だと思った。

確かに自分は溝口早妃を車で撥ねた。彼女がそれによって亡くなったのも紛れもない事実である。しかし、ここまでの代償を払うくらいなら、いっそのこと死んで償えと言われた方がはるかに楽なように思えた。

誰かに逢いたかった。このまま一人でいれば、果てのない絶望と哀しみに気が狂ってしまいそうだ。

実里は夢中で携帯電話をバッグから取り出し、潤平の携帯番号を押した。

しかし、潤平は何度コールしても出なかった。まだ仕事が忙しいのかもしれない。それに、今はまだ会社にいる時刻である。彼が仕事に電話をかけられるのを厭うのは知っている。そんなことも忘れるほど、今の自分は精神状態が不安定なのだろう。

それにしても、自分をつくづく身勝手な女だと思う。これまで潤平から熱心なプロポーズを受けながら返事を渋っていたのに、妊娠が判った途端にこの体たらくだ。

むろん、実里に何の下心もあるはずはなかった。狡猾な女ならば、まだ妊娠初期だから、すぐに潤平と関係を持てば彼の子だと上手く月数をごまかせると考えるかもしれない。

だが、実里はそういう類の女ではなかった。ただ、心が折れそうな絶望のただ中にいる時、いちばん側にいて欲しいと思ったのが潤平だったのである。

それでも、彼女にしてみれば、自分が身勝手だと思うのは実里の謙虚な人柄によるものだ。この八年間、感情を露わにしたことなどおおよそなく、いつもクールさを失わなかった潤平。そんな彼が実里の本音を聞いてもなお、感情を余すところなくさらけ出し、実里にプロポーズしてきた。

彼を嫌いであれば、八年も付き合うはずもないし、ただ結婚に踏ん切るには、彼への気持ちの中にあと一つだけ足りないものがあるような気していた。

それが何なのかは実里にも判らない。ただパズルの最後のピースが見つからないような、小さいけれど大切な何かは潤平への想いには含まれておらず、実里はプロポーズに対しての明確な返答を避けていともいえる。自分の心の奥底を覗いてみれば、けして新規プロジェクトの件だけが理由ではなかったのだと、今ならはっきりと判る。

もしかしたら、今なら、まだ間に合うかもしれない。もっとも、潔癖で完璧性を求める潤平の性格からすれば、他の男の子を身ごもった女をこれまで同様、求めてくるとは考えがたかったが。

だが、どうしようもない状況に置かれた時、真っ先に思い浮かんだのは彼であり、側にいて欲しいと願うのも彼だ。ならば、後はもう当たって砕けろでいくしかない。

実里はお腹の子どもについても潤平にきちんと話すつもりだ。生むかどうかは一今のところ、判

らない。潤平が墮ろしてくれと望むなら、もちろん、従うつもりでした。

妊娠を打ち明けるならば、レイプのことも話さないわけにはゆかないだろう。第一、実里にしても、あの卑劣漢一溝口悠理の子どもなど生みたくはない。愛も労りもなく、ただ憎しみに駆られ、欲情の赴くままに陵辱された末に身籠もった子なんて、こちらから願い下げたいくらいだ。

実里はF駅まで引き返し、電車に乗った。私鉄沿線でふた駅先で降りる。潤平が両親の住むF町の自宅を出て一人住まいを始めたのは、大学を卒業後、就職してからのことだ。勤務先の広告代理店がこのN町にあるので、N駅前の瀟洒なマンションに暮らしている。

交際期間は八年に及ぼうとしているが、実のところ、実里がこのマンションを訪ねるのは数えるほどの回数でしかなかった。潤平は会社に実里が電話してくるのも嫌うし、必要以上に私生活に踏み込まれるのも歓迎しなかったからだ。その癖、自分は休日には度々、実里の家を訪ねている。だから、父も母も潤平のことはよく知っているし、娘にとって彼が「特別な存在」であると信じている。今更、結婚しないだなどと言えば、二人とも腰を抜かさばかりに愕き、ショックで寝込むかもしれない。私生活に実里を踏み込ませたくない癖に、自分は実里の家に平然と恋人として出入りする。そんなところにも、潤平という男の身勝手さがよく現れていた。

むろん、実里もそれに気づいていないわけではない。が、これまでは敢えて、気づかないふりをしてきたのだ。潤平のマンションに着いたときには、既に午後七時近かった。この時間ならば、彼も既に帰宅しているはずだ。

いきなり現れるよりは先に連絡しておいた方が良いと判断し、携帯を出して電話してみた。だが、やはり、潤平は出ない。実里は唇を噛みしめた。まだ帰っていないのだろうか。しかし、ここで引き返せば、折角の決意が鈍ってしまう。今夜、ここで実里の本心とありのままの事実を打ち明け、それでも彼が実里を妻として必要とするならば、実里は彼のプロポーズを受けるつもりでいた。

これまでの彼の性格を考えれば、あまり可能性はなさそうではあるけれど、少なくとも、実里自身が次へ踏み出すきっかけにはなるに違いない。

部屋の前まで待つというのも、これまた避けたい選択肢ではあったが、致し方ない。これから来るであろう瞬間にすべてを賭けて、実里はここまで来たのだから。

エントランスを通り、エレベーターに乗り込む。十二階のボタンを押すと、そこが点滅しながらエレベーターは軽やかに上昇してゆく。

エントランスまで来たことは数回あるけれど、エレベーターに乗るのも潤平の部屋を訪ねるのも初めてだ。それにしても外見同様、内装も見事な、都会の一流ホテル張りの豪華さを誇っている。

実里が暮らす古い二階建て住宅とは雲泥の差だ。あの界隈は今ではどこの家も建て替えて、瀟洒な住宅街に変わってしまったが、実里が物心つくかつかない頃は、まだ、どこも似たような簡素な家ばかりだった。

しががない公務員だし、建て替えるだけのお金もなかったのだろうが、頑固で昔気質の父は自分の親の代から受け継いだ家を頑なに守り続けている。

これだけの贅を尽くしたマンションに暮らしていれば、実里の家は潤平の眼にはさぞ貧相に映じたことだろう。たまに訪れる彼は、どこまでも穏やかな物腰の好青年にしか見えず、両親は大いに彼を気に入っていた。しかし、にこやかな笑顔の下で、潤平は何を考えていたのか。

十二階に着いた。実里はエレベーターから滑り降りると、突き当たりに向かって進んだ。紅い絨毯を敷き詰めた廊下はゆったりとしており、やはり有名ホテルの優雅な雰囲気漂わせているインターフォンを軽く押すと、ほどなく内側から応答があった。

「どちらさま？」

その聞き慣れぬ声に、実里は慄然とした。

あろうことか、その声の主は女性であった。向こうで、やりとりする気配が伝わってくる。声は低くて聞き取れない。男と女の声。やはり、潤平はマンションにいたのだ。

やがてカチャリと内側からロックが外され、重厚なドアが開いた。

「あら、どなた？」

出てきたのは、実里の見たことのない女だった。背の高い、すらりとした容姿は艶然と咲き誇る深紅の薔薇を思わせる。愕いたことに、女はオフホワイトのバスローブを身に纏っていた。漆黒の丈なす豊かな黒髪はまるでそれ自体が意思を持っているかのようにうねり、濡れている。化粧はしていなかったが、白晳の面にそこだけ一点、緋色のルージュが艶めかしくもあり毒々しくもあった。

「潤ちゃん、可愛い子が来てるわよ」

「潤ちゃん、の部分だけがやけに強く聞こえたのは、気のせいだろうか。」

次いで潤平が姿を現した。

「何だよ、美津江。客か？」

これだけゴージャスな美女を相手にしても、傲岸で俺様な物言いは変わらないところは潤平らしい。

やはり潤平もお揃いのバスローブ姿だ。慌てて着たのか、バスローブの前ははだけ、逞しい胸が覗いている。お揃いのバスローブを身に纏った二人が直前まで何をしていたか。流石に男女のことには疎い実里にもすぐ理解できた。

「あなたって、最低」

乾いた音が静寂に響き渡った。殴られた潤平は何が起こったのか判らないようなポカンした表情である。

それもそうだろう。つきあい始めて八年間、実里が初めて見せた、ささやかな反抗、だったのだから。いつも従順で、表立って潤平の主張に逆らったことなど一度もなかったのだ。

少し力を入れすぎたかもしれない。潤平の頬を打った手が痺れる。実里は踵を返すと、そのままエレベーターに向かった。

背後で潤平が何か叫んでいるようだったが、無視する。やって来たエレベーターに乗り込み、一階のボタンを押した。実里を乗せた箱は途中で二度、止まった。乗り込んでくる人がいたからだ。一度目は若い夫婦者らしく、小さな子を連れていた。一人は男の子で三歳くらい、一人は性別までは判らないけれど、ベビーカーに乗った生後半年くらいの赤ちゃんだった。

これから出かける予定でもあるのだろうか。実里は睦まじげに語り合う夫婦が連れてくる赤ん坊を覗き込んだ。つぶらな瞳、小さな手と足。少し力を入れれば、折れてしまいそうな大切な壊れ物。

不思議な気持ちだ。今、自分の胎内にはやはり赤ちゃんが宿っていて、今この瞬間もめざましい勢いで育っている。あと一年もしない中に、その小さな小さな生命はこんな立派な人の形をした赤ちゃんになる。

実里は思った。もし仮にこれが心から愛する男の子どもなら、たとえ未婚の母という十字架を背負うことになったとしても、実里は躊躇わず生むだろう。しかし、お腹の子の誕生を望む人は誰もいない。この子の母親である私自身さえも。

その瞬間、赤ちゃんがにこっと実里に笑いかけた。何と愛らしい笑顔！　どれだけ腹を立てている人でも思わず顔が緩んでしまうような顔ではないか。

なのに、実里はふいに涙が滲んできて、慌て手のひらでぬぐわなければならなかった。

初めての赤ちゃんを歓迎できず、しかも生む選択ができないなんて。

二度目に乗ってきたのは六十代くらいの老夫婦だった。杖をついた老妻をやはり銀髪の品の良いご主人が労る姿には心温まるものがあった。

どちらも今の自分とは対極にある幸せそのものの夫婦の姿である。実里の心は余計に沈んだ。

いよいよエレベーターが一階に着き、実里は最後に降りた。

と、愕くべきことに、潤平が降りたその場所に待ち受けていた。恐らく、階段を使ったに違いない。途中で二度も止まらなければ実里の方が先に着いたかもしれないが、全速力で駆け下りた男の方がわずかに早かったのだろう。

「実里！」

潤平が実里の腕を掴む。　実里はその腕を思い切り振り払った。

後からやってきた子連れの子夫婦が何事かとこちらを興味津々で見ながら通り過ぎていった。

「もう良いから」

「何が良いんだよ」

潤平も負けずに怒鳴る。

実里は今度は溢れ出る涙をぬぐいもせずに、潤平を睨んだ。

「あなたが私を絶対にマンションに呼ばない理由が漸く判ったわ」

「一体、何を言ってるんだ？」

あくまでもシラを切るつもりなのだ。

実里は潤平を真正面から見据えた。

「私以外に付き合っていた女の人がいたのね」

そこで潤平が初めて弱気な態度を見せた。

「弁解をするつもりはないが、これだけは聞いてくれ。お前にこの前一四月に逢った時、俺はお前に言った。俺のものになってくれと。だが、お前は頑としてはねのけ、俺を拒絶したんだぞ？

実里、俺だって男だ。八年もの間、待ち続けて更にお預けを喰らわされて、平気でいられるとでも思うのか？」

実里は乾いた声で言った。

「じゃあ、たった今、私が見たあの光景は、すべて私のせいだというの？　私があの時、あなたとホテルに行かなかったから？」

私は、あなたの何なの？ 実里は大声で叫びたかった。

「お預けだなんて言い方しないで。私は、あなたの欲しいときに身を投げ出す餌じゃないわ」
あの女は誰？ 訊ねようとしたけれど、止めた。

今になって判ったところで、意味はない。 潤平は訊ねられもしないのに、自分から応えた。
「あの女は取引先の人だ。お前と最後に逢ってから、こういう関係になった。もちろん、顔見知りではあったが、誓って長い付き合いじゃない」

「つまり、あの人と男と女の関係になったのも、私の煮え切らない態度が原因。あなたはそう言いたいよね」

実里は淡々と言った。

今から思えば、四月末から五月頭にかけて多忙だと言って実里に逢おうとしなかったのも怪しいものだ。

そのことから考えて、あの肉感的な美女と深間になった時期というのは、潤平の言うとおりの嘘ではないのかもしれない。「もう良いわ。言い訳なんかしないで」 実里は首を振った。 今となっては、もう、どうでも良いことだ。 潤平があんな女と何をしようが、既に実里には関係ない。 実里の中で言いようのない烈しい感情がせめぎ合っていた。自分は心ならずも悠理にレイプされたことに対してあれほど罪悪感を感じた。むしろ、潤平に対しての罪の意識があったからだ。望まざることとはいえ、悠理の子を宿して、潤平を裏切ったという気持ちにさえなった。

しかし、実里が罪に悶々と喘ぐその一方で、肝心の潤平は実里を平然と裏切っていたのだ。少なくとも実里が悠理に犯されたのは実里自身の意思ではない。が、潤平があんな女と関係を持ったのは彼が自分から望んだことだ。 潤平の態度が劣勢に転じたというのは間違いだった。彼は開き直ったのだ。

すべてを一自分が犯した過ちと裏切りをことごとく実里のせいにして卑怯にも言い逃れようとしている。 全く、こんな男に八年も自分は何を期待していたのだろう。結婚という甘い夢を見ていた？

長年付き合いしてきた情もあったことは否定できない。

愚かな、なんて馬鹿な私。 あまりにも馬鹿らしくて、涙さえ出てこない。

実里は小さく息を吸い込んだ。 さよなら、何も知らなかった未熟な私。 甘く儚い幻想を後生大切に宝物のように抱いていた世間知らずの愚かな娘。 こんな男を好きだと思い込み続けた八年間。

今こそ判った。

潤平への想いに足りないと感じていた何か、愛というパズルを完成させるための最後のピースを漸く手にしたのだ。 それは、真心だった。潤平には最初から真心がなかったのだ。相手に対する誠意と言い換えても良いだろう。

だから、あっさり実里を裏切り、あまつさえ、その理由を実里のせいにしてしようとしている。

しかし、実里だって、潤平だけを責められはしない。自分もまたこの男に対して真心を与えようとしたことがあっただろうか。

結婚という保険を手にするための一つの手段、言うならば安全パイのような存在がもしかしたら潤平だったのかもしれない。

それでも、実里は確かに潤平を愛していた。いや、愛しているとまではいえなくても、ある特定の感情を抱いてはいた。もしかしたら、結婚という二人の関係を変えるチャンスを経て、その感情が愛に変わることもあったかもしれない。でも、潤平は自らその可能性を断ち切ってしまったのだ。もう、この男に未練も期待もない。

「さよなら」

実里は潤平に今度こそ背を向け、歩き出した。今度は潤平も追いかけてこようとはしなかった。

梅雨の合間の晴れ間から一転して、外は雨が降り始めていた。あの不幸な事故があつて以来、雨は嫌いになった。

だが、今夜だけは雨が降ってくれて、ありがたいと思わずにはいられない。

途切れることのない涙を優しい雨が隠してくれる。

実里は頬を流れ落ちるのが涙なのか、雨なのか自分でも判らなかった。

マンションの前には小さな花壇があった。もうすっかり海色に染め上がった紫陽花が雨に打たれて、しっとり濡れている。エメラルドグリーンの上葉の上にジルコニアのように煌めく滴が無数にのっている。

実里は人差し指でそっと水滴の一つに触れた。何故か、その滴を見ていると、あの赤ちゃんの笑顔が臉に浮かんだ。束の間、かいま見たにすぎないのに、不思議とくっきりと眼裏に焼きついている。

小さな顔に黒い大きな瞳が冴え冴えと輝いていた。そう、丁度、緑眩しい葉の上の滴のように。

実里は腹部に手のひらを当てた。まだここに新たな生命が息づいているとは思えないほど、平坦でふくらみは感じられない。

けれど、今も目覚ましい勢いで育っている新しい生命がここにある。その瞬間、実里の中に強く訴えかけてきた感情一、それは母性、であった。道端の花がこうして生きているように、お腹の子も大きくなろうと一生懸命頑張っている。やがて、生まれた出た子は自分の人生を生き、自分なりの花を咲かせるだろう。どんな花を咲かせるのか、誰も知らない。

何故なら、この子の人生はたった今、実里の胎内で始まったばかりなのだから。生もうと思った。たとえ誰が望まなくても良い、この自分がこの子を一生かけて愛し、守ってゆけば良いのだと強く強く思った。そしていつか、この子がどんな花を咲かせるのか、実里も側で見守りながら見極めたい。

ここでひっそりと息づいている生命をむざと摘み取ることなど、誰もできはしないのだ。この子の生命はこの子のものであり、この子の人生もまたこの子だけのものなのだ。たとえ母親といえども、新しい生命を身勝手に葬り去ることを天は許しはしないだろう。この時、実里の中で

初めて母の自覚が生まれた。

道端の紫陽花が夜陰の中でほのかに浮かび上がっている。実里は雨に濡れるのも厭わずに、いつまでも真っ青な花を見つめていた。



その二日後の昼下がり。

実里は突然、人事部の部長から呼び出しを受けた。

部長室の扉をノックすると、すぐに応答があった。

「入りたまえ」

「失礼します」

実里は慇懃にお辞儀をして部長の前に立つ。五十過ぎの人事部長は始終、渋面をしていることで社内でも有名である。あだ名は「ムシさん」。苦虫を噛みつぶしたような表情がトレードマークだからだ。

ゆったりとしたスペースのある部長室は一面を大きなガラス張りの窓が占めており、重厚なマホガニーのデスクがその窓を背景に配置されている。ムシさんはその立派すぎるデスクと座り心地の良さそうな椅子には、いささか不似合いだ。部長と聞かなければ、平の冴えないサラリーマンに見える。

今日はその渋面が更に苦い薬でも飲んだように顰められていた。

「今日、ここに呼ばれた原因は君ももう判っているだろうね」

こんな時、あっさりと自分の非を認めては駄目だ。呼び出しを受けた理由が何にせよ、会社側をはやそれだけで有利に立たせることになる。それは七年間のOL生活でちゃんと心得ている。

「お言葉を返すようですが、私には何のことか判りかねます」　ウオッホン。ムシさんは白々しい咳払いをした。

「一昨日の夕方のことになる。人事部の方に匿名で電話があった。その内容はというとだね、まあ、どうも受付係の一人が妊娠しているらしいという通報だったんだよ」

妊娠。

そのひと言がムシさんの口から飛び出てきて、流石に実里もただ事ではないと感じた。

刹那、二日前に小さな病院で偶然出くわした若い女子社員の顔が浮かんだ。丸顔の可愛らしい感じの子と一方は、大きなマスクをしていたので容貌は定かではない。確か庶務課の子たちのはずだ。女の噂話ほど無害のように思えて、実は有害なものはない。

「その受付係の名前はお訊きになったのですか？」

シラを切り通すのが賢明だとは判っていたが、どうしても訊かずにはおれなかった。

「ホウ、君には心当たりがあるのかね」

ムシさんの小さな眼が光った。

この期に及んで、実里は、しまったと思った。まんまと相手の術中に填ったのだと知っても、もう取り返しがつかない。

明らかな誘導尋問である。

ムシさんは小さな溜息をつく、デスクの上の両手を軽く組み合わせた。

「入倉君。人事部でも君については、このところよく名前が出るのが多くてね」

「部長—」

言いかけた実里をムシさんが手を上げて制した。

「まあ、聞きたまえ。僕は君のことをかえって気の毒だと思っているんだよ。四月頭に起こった

事故については、本当に万が悪いとしか言えなかったからね。あれはたまたま起きたものだ。亡くなった女性を轢いたのは君ではなくて、僕だったかもしれない。あの事件の後、君の進退についてとやかく言う管理職もいないでもなかったが、僕は社内の人事を一手に扱っているという立場から、君の辞職については一切あり得ないと押し通した」

実里は眼を瞠った。まさかムシさんが自分に対して同情的な立場を取り、社内で庇ってくれていたとは知らなかった。

「新規プロジェクトについては庇い切れなかったことを申し訳ないと思っている。あれは社長自らが言い出したことで、下っ端の僕にはどうしようもないことだった」

「部長、色々ご配慮頂きまして、ありがとうございます」

実里は目頭が熱くなり、慌てて頭を下げた。

ムシさんは頷いた。

「そこで、一昨日の通報についてだが、入倉君は今後、どうするつもりかな？ 僕としては是非、君の意見を聞きたい。その応えいかんによって、僕が君の力になれるかどうかとも判るだろう」

「部長、それは一体、どういうー」

ムシさんが細い眼を更に細めた。

「単刀直入に言おう。何も女子社員の妊娠は珍しいことではない。今日日、結婚しても勤務を続ける女子社員は増える一方だからね。しかし、君がまだ未婚なのは社内でも周知の事実だ。まあ、言いにくいことではあるが、四月の事件がなければ、今回のことも寛容に対処しても良かった。だが、あの事故に続いて、また問題になりそうなことが起こったとなれば、人事部としても黙ってはられない。だからだね。入倉君、もし君がそのお腹の子どもの父親とすぐにでも籍を入れるとか結婚するというのなら、こちらとしても問題はないんだよ」

ムシさんは一旦言葉を切り、言いにくそうに続けた。

「または、これも言いづらいが、君が中絶を考えている場合も、事は穏便に処理できる」

実里は小さく息を吸い込んだ。

「それでは、もし私が生むという決断を下した場合は、辞職せざるを得ないということですか？」 応えは聞かずとも判っていた。

「気の毒だが、そういうことになるだろうね。何しろ、うちの社長は頭が固いから。殊にそういう道義的な事柄に関しては煩いんだ。今時、シングルマザーなんて珍しくもないと僕なんかは思うけどねえ」

ムシさんはかなり薄くなった頭髪に手をやった。

「いやあ、身内の恥をさらすようなものだけど、うちの娘も今月初めに結婚したんだよ。それができちゃった結婚だった。まあ、参った。いきなり見知らぬ男と現れて、子どもができたから結婚させるだとか何とか言われて、僕は一瞬、血圧が上がって死ぬんじゃないかと思うほどのショックだ。家内はもう泣き崩れるし。一人娘だからと甘やかしていたのが災いしたらしい。だから、入倉君のことも他人事とは思えなくてね。僕としては、君がどういう選択をしようが、このまま会社にいられるようにしてあげたいと思う。しかし、やはり、現実としては、そうは問屋が卸さないだろうね」「判りました」

実里は頭を下げた。

つまり、実里は会社を辞めざるを得なくなった一ということだ。

「入倉君」

部長室を出ようとした実里の背後からムシさんの声が追いかけてきた。

実里が振り向くと、ムシさんが心配そうに言った。

「それで、君はどうするつもりなんだね？ ああ、この質問は人事部長ではなく、君と同じ年頃の娘を持つ一人の父親として聞いているんだが」

実里は微笑んだ。

「私は生もうと考えています」

何故か、ムシさんの小さな顔がパッと明るくなったような気がした。

「それは良かった。いや、僕は君に止めて欲しくはないんだよ。でも、折角、授かった生命だ。もしかしたら、僕は君が生まない選択をするんじゃないかと思ってね。娘が連れてきた男は職にもついてなくて、アートグラフィックデザイナーの卵だとかなんとかいって、本当に頼りない男だった。こんなヤツに大切な娘をやるものかと断固反対してやったら、娘のヤツ、しまいには結婚を許さないのなら、お腹の赤ん坊を中絶するなんて言い出して、これがまた大慌てさ。僕と家内にとっては初孫なんだ。しかも、娘は三十だからね。それで、仕方なく、だよ」

ムシさんの言葉は心に滲みた。そのときのムシさんの今の顔は少なくとも渋面ではなかった。

「元気な子を産みなさい。人事部長としてはしてあげられることは何もないが、個人的なら話は別だ。困ったことがあれば、いつでも自宅の方に訪ねてくると良い」

ムシさんは名刺に住所と解り易い地図まで書き添えてくれた。

「長い間、お世話になりました」

実里は深々と頭を垂れ、部長室を後にした。

夕方になった。

会社が退けてから、実里は大木ひかるを駅前の喫茶店に誘った。

例の溝口悠理の友達だというホスト片岡柊路とここで逢ったのは、もう二ヶ月も前になる。あれ以来、柊路からは二、三度、連絡があった。その度に短いやりとりを交わした中からは、彼が実里のことを真剣に心配してくれているのが判った。

しかし、実里の方から柊路に電話することもなく、その中に彼からの連絡は途絶えた。あの時、彼は言ったはずだ。悠理は普通の状態ではない。気をつけろと。

実里がもっと彼の警告を真摯に受け止めていたなら、あの夜のレイプは避けられたかもしれない。もう一度、あの優しい眼をした穏やかな青年に逢ってみたいと思わないでもなかったけれど、悠理の友達だというただそれだけの関係の彼に、実里の方から連絡するのも躊躇われた。

実里は、ひかるに人事部長とのやりとりをほぼ全部話した。

「そんな一。それはあんまりというものじゃない。新規プロジェクトのことだってそうだけど、たったそれだけのことで、実里を切り捨てるなんて割に合わないわ。絶対におかしいわよ」

話を聞いたひかるはまるで我が事のように憤慨した。

「仕方ないわよ。ムシさんだって、できるだけのことをしてくれたんだし」　かえって渦中の本人の方がひかるを宥めている。　と、ひかるが急に憂い顔になった。

「ねえ、一つだけ訊いても良い？」

「なあに？」

「実里のお腹の赤ちゃんの父親は誰なの？」

実里は硬直した。

ひかるが慌てて取りなすように言った。

「話したくないのなら、無理に訊こうとは思わないわ。でもね、今だから話すけれど、一昨日、

実里が給湯室で吐きそうになった時、私は実里が妊娠しているんじゃないかと思ったの。私には姉がいるでしょ。その姉が結婚して初めて妊娠したときに悪阻が物凄くて、実家に一時戻ってきて、静養したくらいなのよ。実里の様子がそのときの姉とそっくりだったから、もしかしたらと思ったの」

実里は微笑んだ。

「私は生もうと考えています」

何故か、ムシさんの小さな顔がパッと明るくなったような気がした。

「それは良かった。いや、僕は君に止めて欲しくはないんだよ。でも、折角、授かった生命だ。もしかしたら、僕は君が生まない選択をするんじゃないかと思ってね。娘が連れてきた男は職にもついてなくて、アートグラフィックデザイナーの卵だとかなんとかいって、本当に頼りない男だった。こんなヤツに大切な娘をやるものかと断固反対してやったら、娘のヤツ、しまいには結婚を許さないのなら、お腹の赤ん坊を中絶するなんて言い出して、これがまた大慌てさ。僕と家内にとっては初孫なんだ。しかも、娘は三十だからね。それで、仕方なく、だよ」

ムシさんの言葉は心に滲みた。そのときのムシさんの今の顔は少なくとも渋面ではなかった。

「元気な子を産みなさい。人事部長としてはしてあげられることは何も無いが、個人的なら話は別だ。困ったことがあれば、いつでも自宅の方に訪ねてくると良い」

ムシさんは名刺に住所と解り易い地図まで書き添えてくれた。

「長い間、お世話になりました」

実里は深々と頭を垂れ、部長室を後にした。

夕方になった。

会社が退けてから、実里は大木ひかるを駅前の喫茶店に誘った。

例の溝口悠理の友達だというホスト片岡柊路とここで逢ったのは、もう二ヶ月も前になる。あれ以来、柊路からは二、三度、連絡があった。その度に短いやりとりを交わした中からは、彼が実里のことを真剣に心配してくれているのが判った。

しかし、実里の方から柊路に電話することもなく、その中に彼からの連絡は途絶えた。あの時、彼は言ったはずだ。悠理は普通の状態ではない。気をつけろと。

実里がもっと彼の警告を真摯に受け止めていたなら、あの夜のレイプは避けられたかもしれない。もう一度、あの優しい眼をした穏やかな青年に逢ってみたいと思わないでもなかったけれど、悠理の友達だというただそれだけの関係の彼に、実里の方から連絡するのも躊躇われた。

実里は、ひかるに人事部長とのやりとりをほぼ全部話した。

「そんな一。それはあんまりというものじゃない。新規プロジェクトのことだってそうだけど、たったそれだけのことで、実里を切り捨てるなんて割に合わないわ。絶対におかしいわよ」

話を聞いたひかるはまるで我が事のように憤慨した。

「仕方ないわよ。ムシさんだって、できるだけのことをしてくれたんだし」　かえって渦中の本人の方がひかるを宥めている。　と、ひかるが急に憂い顔になった。

「ねえ、一つだけ訊いても良い？」

「なあに？」

「実里のお腹の赤ちゃんの父親は誰なの？」

実里は硬直した。

ひかるが慌てて取りなすように言った。

「話したくないのなら、無理に訊こうとは思わないわ。でもね、今だから話すけれど、一昨日、

実里が給湯室で吐きそうになった時、私は実里が妊娠しているんじゃないかと思ったの。私には姉がいるでしょ。その姉が結婚して初めて妊娠したときに悪阻が物凄くて、実家に一時戻ってきて、静養したくらいなのよ。実里の様子がそのときの姉とそっくりだったから、もしかしたらと思ったの」

「それで、生理のことを訊いたのね。私ってば、女失格だわ。ひかるが私に訊ねてきたときに、何でそんなことをいきなり訊ねるんだらう、幾ら親しくても嫌だなんて思っちゃったの」

実里が正直に打ち明けると、ひかるは笑った。

「それが実里の実里らしいところだもんね」

「なに、それ。褒められてるような気がしないんだけど」

二人は顔を見合わせて笑った。

この優しくて明るい親友とも、これで離れ離れになる。会社を辞めることは確かに実里にとって一つの大きな節目になるに違いなかった。

「でも、実里。あの日も言ってたけど、彼氏とは何でもないんでしょう。なら、赤ちゃんの父親はそれ以外の男ってこと？」

実里の顔が真っ青になったのを見て、ひかるは首を振った。

「ごめん、もう訊かない方が良いのよね」

「私の方こそ、ごめんなさい。ひかるには本当に仲良くして貰ったのに、何も話せなくて」

実里は心からひかるに申し訳なく思った。

ひかるは破顔した。

「なに水くさいことを言ってるのよ。それよりも、私から総務の部長に言ってあげようか？ 総務の部長は社長の甥っ子だから、うちの部長から取りなして貰えれば、頑固爺ィの社長の考えも変わるかもしれないわ」

実里は微笑んだ。

「ありがと。ひかるがそこまで私のことを考えてくれて、本当に嬉しい。でも、やっぱり止めておく。仮に総務部長から取りなして貰って会社にいられることになったとしても、他人の眼というものがあるしね。きっと、今まで以上に居づらいと思うのよ。そういう針の筵のような場所にいるのも、お腹の子どもには良くないだらうから、この際、思い切って辞めることにする」

「実里、何だか強くなったわね。ついこの間までの実里と別人みたい。やっぱり、母は強しってというのは本当なのかなあ」

ひかるは感心したように言い、突如として唸った。

「それにしても、許せないわ」

「何が？」

本当に何のことか判らなくて問うと、ひかるは焦れったそうに言った

「もう！ 実里は本当にお人好しすぎるわよ。庶務課のあの子たち。病院で実里に逢ったっていう後輩たちのことに決まってるじゃないの。大方、あの子たちが実里のことを人事部に通報したに違いないわ」

実里自身も間違いないと思っていた。第一、あの二人に出逢ったその日、人事部に通報が入ったのだ。偶然の一致にしてはできすぎている。

「もう済んだことよ。今更、言ってみても始まらないわ」

「ああ、あなたは本当に人が好すぎるわ」

ひかるが嘆息混じりに呟いた。

「良いわ、私が実里の代わりに、あの子たちに制裁を加えるやるから。憶えてなさい。私の大切な親友に酷いことをしたら、ただじゃおかないんだから」

「せいぜいお手柔らかにね」

実里の冗談とも本気ともつかぬ言葉に、ひかるは笑った。

「あなた、眼が笑ってないわよ？」

ひかるの指摘に、`そう？、と、しれっと笑顔で応えた。

「それで、会社止辞めて、次の仕事の心当たりはあるの？」

「全然。しばらくは家にいるわ。といっても、そうそう、のんびりともしてられないけどね。お腹が大きくなってきたら、できる仕事も限られてるでしょうし。今の中にバイトでもして、しっかりと稼いでおかないと」

冗談めかして言ったのに、かえって、ひかるは涙ぐんで黙り込んでしまった。

確かに、ひかるの言うとおりでと思う。自分で言うのもおかしいけれど、実里は相当なお人好しだ。自分を陵辱したあの男一溝口悠理ですら、今はもう憎しみをあまり感じなくなっている。

もちろん今も顔だっで見たくないほど大嫌いな男に違いはないが、事件直後のように殺してやりたいと思うくらいの憎しみは薄れていた。

あの男を憎んでも意味がない。それは恐らく、あの事故の起きた日、実里が早妃を轢いてしまったことにも言えるだろう。誰を恨んでも憎んでも、何も始まらないし、生まれぬ。

実里はもう事故のことで自分を責めるのは止めた。ただ自分が生命を奪ってしまったひとりの女性の存在だけは永遠に心にとどめ、罪は背負っていこうと思っている。そうやって自らの罪と向き合うことでしか、実里には償うすべはない。せめて忘れないことが、あの女への贖罪なのだ。

早妃のことは憶えておいて、あの男一悠理の存在はさっさと記憶から消してしまおうと思う。あの忌まわしい汚辱の夜も。

自分にはこの子さえいてくれれば良い。

私だけの子、可愛い私の赤ちゃん。

この子には最初から父親はいない。私をレイプした男があなたのお父さんよだなんて、絶対に言えるはずがない。この秘密は私がこの生命尽きて墓場に行くまで、ずっと秘めて、あの世にまで持っていく。

実里は無意識の中にお腹を押さえていた。

六月最後の日、実里は短大を出て七年間勤めた会社を辞めた。ひかるは大泣きに泣いた。

「やあね。別に永の別れでもあるまいし。逢おうと思えば、いつでも逢えるじゃない」

実里が縋りついてくるひかるを抱きしめると、ひかるは更に声を上げて泣いた。

「元気でね。赤ちゃんが生まれたら、抱っこしに行くからね」

こうして、実里は思い出多い出版社を後にした。

Conflict (葛藤)

Conflict (葛藤)

実里は周囲に判らないように、そっと溜息をついた。また腰が痛み始めたので、拳を作ってトントンと軽く叩く。

「入倉さん、疲れたのなら、少し休憩室で休んで来たら？」

隣のレジから恰幅の良い四十代半ばの女性が声をかけてくれた。おなじパート仲間の新垣さんだ。

「ありがとうございます。大丈夫ですから」

実里は微笑み、自分を叱咤した。

一いけない、こんなことでは駄目でしょ。

会社を辞職してから、もう五ヶ月になる。実里の腹の子は順調に発育し、既に妊娠八ヶ月に入った。大きなお腹でのパート仕事はかなり大変だけれど、生まれてくる子どもと自分のためにも頑張っている。

あれからの日々は、語り尽くせないほど困難を極めた。まず、実里の両親の説得がひと苦労だった。

妊娠を告げると、父は激怒し、実里は頬を打たれた。

一馬鹿者ッ。一体、どこの男とそんなふしだらな真似をしでかしたんだ。今すぐ、そいつを連れてこい。二人並べて、ぶん殴ってやる。

予想通りの反応だった。

実里が正座したまま何も言わないのを見て、父の怒りはますますエスカレートした。

一相手は潤平君か？

父にしてみれば、そうであって欲しいと一縷の望みを賭けての問いであったに違いない。

しかし、実里は、これにはきっぱりと否定した。

一違います。潤平さんとは、もう別れたの。お腹の赤ちゃんの父親はあの男ではないわ。

その言葉に、父は完全に切れてしまった。

一何という呆れた娘だ。そんな有様だから、潤平君にも早々と愛想を尽かされたんだろう。

もう一度、平手が飛んでこようとするのを、脇から母が泣いて止めた。

一止めて下さい。この娘(こ)の身体は普通じゃないって、お父さんも知ってるんでしょう。お腹に子どもがいる娘を殴ったりして、万が一のことがあったら、どうするんですか？

結婚してから二十八年間、一度も父に逆らったことのない母が泣きながら父に断固として刃向かったのだ。

結局、父は折れた。折れざるを得なかったのだ。

実里は何度訊かれても、赤ん坊の父親の名を明かさなかった。その中に、父も母も訊かなくなった。どうも道ならぬ不倫の恋の果てにでもできた子—父親が明かせないのは、その男に家庭があるからだろうと勝手に推測したらしい。実里は自宅からパートに通うことになった。幸いというべきか、母が近々、スーパーのレジ打ちを止める予定だったので、その後釜として入った。

一度、休日にムシさんこと人事部長が自宅まで訪ねてきてくれたこともあった。
一妊婦には何が良いか、よく判らなくてねえ。

ムシさんは高級メロンの箱を下げてやって来て、笑った。

恐らくムシさんは本当は優しい面倒見の良い人なのだろう。しかし、長年の会社勤めは、その優しいムシさんを始終、渋面の気難しそうなおじさんに変えてしまった。

丁度、その日は父も自宅にいて同年配の二人はすっかり意気投合した。

一娘なんか、育てても仕方ありませんなあ。部長、大切に育ててきた娘がまさか男に騙されて棄てられて、こんな風に一人ぼっちで子どもを生む羽目になるとは思いもしませんでした。娘のことを考えると、私は死のうにも死ねません。

昼間から母が出した酒に酔っぱらい、父はムシさん相手にさんざん愚痴を言っている。

恥ずかしいのはもちろんだが、日頃は酒を飲んでも繰り言一つ口にしない父がああまで乱れてしまうのは、やはり父の言葉どおり、不肖の娘が原因だろうと思うと居たたまれなかった。

一いや、全くです。うちの娘も似たようなもんですよ。しかし、お父さん、孫は可愛いですぞ。うちのところは先月に生まれまして、これがもう可愛い何のって。家内なんか一日に何度写真をうっとり眺めていることやら。生まれた孫の顔をひとめ見たら、何もかも忘れられますよ。

ムシさんは巧みに話を別の方に持っていき、父は

一おお、そうですか。やはり、そんなに可愛いものですかね。部長さん、うちはどうも女の子らしいんですよ。いやー、私が娘一人だったもので、初孫は男が良いかなと思っていたんですが、これがまた期待はずれで。

と、ムシさんに上手く乗せられている。

一いやいや、女の子の方がじいじには可愛くて、よろしいですよ。うちも女の子ですから、私の言うことに間違いはありません。

一そうですかねえ。そうですね。やっぱり、最初は女の子ですかね。

そう言いながら、父は男泣きに泣いていた。実里は、これまで父の涙など一度も見たことがなかった。そんな父の姿を見て、実里もまた物陰で泣いた。

お父さん、ごめんなさい。親不孝な私を許して。

父にも母にも詫びの言葉がなかった。

一元気そうで、安心したよ。あと少しだね。良い子を産むんだよ。

ムシさんは帰り際、見送りに出た実里の肩を叩いて帰っていった。

それがつい一週間前のことだ。

「済みません、レジ、お願いできますか？」

遠慮がちな声に我に戻り、実里は狼狽えた。

「ごめんなさい。すぐに打ちますから」

どうもムシさんと父の会話を思い出していたのがまずかったようだ。

我を忘れていたことを悔いながら、まずは客に謝った。ここを止めさせられたら、本当に仕事の当てがなくなってしまう。

実里の考えでは、妊娠九ヶ月の終わりまでは働いて、臨月から産休に入ろうと考えていた。

その前に店長に直談判して、産後もできれば、今度は正社員として働かせて貰えないかと頼み込むつもりだ。

そのためにも、精一杯働く。間違っても、客からクレームをつけられるようではいけない。

「本当に申し訳ございません。ついうっかりして」

客がカゴに入れてきた商品のバーコードを一つ一つ、スキャナで読み取ってゆく。

鶏飯弁当、ウーロン茶、男性用シェービングローション。

どうも独身の男性らしい。実里は値段をスキャナで読み取った後、初めて客の方をまともに見た。

丁度、その日は父も自宅にいて同年配の二人はすっかり意気投合した。

一娘なんか、育てても仕方ありませんなあ。部長、大切に育ててきた娘がまさか男に騙されて棄てられて、こんな風に一人ぼっちで子どもを生む羽目になるとは思いもしませんでした。娘のことを考えると、私は死のうにも死ねません。

昼間から母が出した酒に酔っぱらい、父はムシさん相手にさんざん愚痴を言っている。

恥ずかしいのはもちろんだが、日頃は酒を飲んでも繰り言一つ口にしない父がああまで乱れてしまうのは、やはり父の言葉どおり、不肖の娘が原因だろうと思うと居たたまれなかった。

一いや、全くです。うちの娘も似たようなもんですよ。しかし、お父さん、孫は可愛いですぞ。うちのところは先月に生まれまして、これがもう可愛い何のって。家内なんか一日に何度写真をうっとり眺めていることやら。生まれた孫の顔をひとめ見たら、何もかも忘れられますよ。

ムシさんは巧みに話を別の方に持っていき、父は

一おお、そうですか。やはり、そんなに可愛いものですかね。部長さん、うちはどうも女の子らしいんですよ。いやー、私が娘一人だったもので、初孫は男が良いかなと思っていたんですが、これがまた期待はずれで。

と、ムシさんに上手く乗せられている。

一いやいや、女の子の方がじいじには可愛くて、よろしいですよ。うちも女の子ですから、私の言うことに間違いはありません。

一そうですかねえ。そうですね。やっぱり、最初は女の子ですかね。

そう言いながら、父は男泣きに泣いていた。実里は、これまで父の涙など一度も見たことがなかった。そんな父の姿を見て、実里もまた物陰で泣いた。

お父さん、ごめんなさい。親不孝な私を許して。

父にも母にも詫びの言葉がなかった。

一元気そうで、安心したよ。あと少しだね。良い子を産むんだよ。

ムシさんは帰り際、見送りに出た実里の肩を叩いて帰っていった。

それがつい一週間前のことだ。

「済みません、レジ、お願いできますか？」

遠慮がちな声に我に戻り、実里は狼狽えた。

「ごめんなさい。すぐに打ちますから」

どうもムシさんと父の会話を思い出していたのがまずかったようだ。

我を忘れていたことを悔いながら、まずは客に謝った。ここを止めさせられたら、本当に仕事の当てがなくなってしまう。

実里の考えでは、妊娠九ヶ月の終わりまでは働いて、臨月から産休に入ろうと考えていた。

その前に店長に直談判して、産後もできれば、今度は正社員として働かせて貰えないかと頼み込むつもりだ。

そのためにも、精一杯働く。間違っても、客からクレームをつけられるようではいけない。

「本当に申し訳ございません。ついうっかりして」

客がカゴに入れてきた商品のバーコードを一つ一つ、スキャナで読み取ってゆく。

鶏飯弁当、ウーロン茶、男性用シェービングローション。

どうも独身の男性らしい。実里は値段をスキャナで読み取った後、初めて客の方をまともに見た。

「九百五十円です」

言い終わらない中に、実里は「あっ、と声を上げていた。

客の方も眼を丸くしている。

「もしかして、実里ちゃん？」

「片岡さんー」

何と、その客は悠理の親友片岡柊路であった。

その場は実里の仕事があるので、後でまた逢うことにして柊路は帰った。

二時間後、実里の勤務時間が終わり、二人は実里の自宅までの道程を肩を並べて歩いた。

「ああ、持つよ」

実里が両手に野菜や肉を詰め込んだビニール袋を下げているのを見、柊路が奪い取るように荷物を取った。

その点、パートは店内の商品を何割引かで買えるので、助かる。これからはできるだけ節約しなければならない。何しろ出産したら、しばらくは身動きが取れない。そのときに備えて、貯金は少しでも多い方が良かった。

むろん、両親と同居しているのだから、援助は受けられる。しかし、名前も明かせない男の子どもを身籠もり、今また生もうとしている親不孝に加えて、これ以上、親に心配や負担はかけたくなかった。

現に、実里はこうして数日に一度は自費で夕飯の食材を購入して帰る。父も母も余計な心配はするなとしきりに言うのだが、実里の心がそれに甘えられないのだ。

「実里ちゃん、結婚したんだ？」

いきなり問われ、実里は言葉に窮した。

小さく息を吸い込み、笑顔を作る。

「いいえ、結婚はしてません」

え、というように柊路が眼を見開いた。

「でもー」

柊路の視線がすっかり大きくなった腹部に注がれている。

実里はうつむいた。

「ごめんなさい。ちょっと訳ありで、一人で子どもを生むことになって」

「別に実里ちゃんが謝ることはないけど、俺には君がそんな風な女の子には見えなかったけどなあ」

柊路は首を振り、思い直したように笑顔になった。

「でも、まあ、安心したよ。あれから、どうしてるのかなと心配はしてたんだ。だけど、君みたいなごく普通の女の子は俺のような男とはあんまり関わり合いにはなりたくないだろうと思って」

どうも実里の方から連絡を取らなかったことを気にしているらしい。それで、やはり、彼からの連絡が途絶えたのだ。柊路はそれを彼の職業のせいだと思い込んでいるようだ。

「片岡さん、勘違いしてます」

柊路の形の良い眉が少しだけはねた。

「どういうこと？」

実里は言葉を探しながら慎重に言った。

「私は片岡さんのお仕事のこととか、全然気にしてません。それを言ったら、私の方がよっぽど社会のあぶれ者ですよ。会社もクビになっちゃったし、今、流行のシングルマザーにもなるわけだし」

「ねえ、こんなこと訊くのは失礼だと思うんだけど、どうして、お腹の子どもの父親と結婚しないの？」

何人もの人に訊かれたことだ。

実里は小さな声で言った。

「相手の男は妻子持ちなんです。だから、私と一緒にすることはできなくて」

淀みなく応えた実里を、柊路はじいっと見つめてくる。まるで嘘など端からお見通しだよ、とでも言いたげな鋭い視線だ。

「認知くらいはしてくれてるんだろ？」

実里は首を振る。

「一その人は子どもができたことは知りませんから」

柊路が声を荒げた。

「そんな馬鹿な話があるか！ 手前だけ愉しむだけ愉しんどいて、いざ子どもができたら、知らん顔だなんて、あまりにも男として責任がなさすぎる」

「だから、相手の人は一」

実里が狼狽えても、柊路の憤りはおさまらないようだ。

「知らないんなら、俺が知らせてやるよ、どこのどいつだ？ 俺が落とし前つけさせてやるから」言葉そのものは荒いが、心底から実里のために腹を立ててくれているのだと判る。

ここにも自分のことを気にかけてくれる人がいる。実里は泣きたくなった。

思わず涙がほろりとかぼれ落ちた。

柊路が眼を見開く。

「実里ちゃん？ 何で泣くんだ。俺、何か泣かせるようなことを言ったかな。それとも、俺が一方的にまくしたてたから？」

「片岡さんが物凄く優しいから。嬉しくて、つい」

柊路は何故か実里を眩しげな眼で見た。

「そいつとどうしても結婚できないっていうんなら、俺はどう？ ああ、でも、ホストなんかやってる男、堅気のお父さんには婿として認めて貰うのはいまいち難しいかな」

柊路は真剣な表情で考え込んでいる。

「俺もそろそろ、この稼業も潮時だと思ってるんだ。何せ俺、もうじき二十五だし。この世界は若いヤツが次々に入ってくるから、いつまでも続けられるものじゃないしなあ。入店以来、ずっとトップを維持してきた悠理のようなヤツは滅多としないし」

と、柊路が首をひねった。

実里は自分でも顔が蒼白になるのが判った。

「冗談、冗談だよ。そりゃ、実里ちゃんと結婚できるなら、ホスト止めても良いと思ってるのは本当だけどね。まあ、頭の片隅にくらい入れといて。お腹の子どものことも全然、気にしない。こう見えても、年の離れた弟妹がいるから、子どもの扱いは上手いんだよ、俺」

柊路が冗談に紛らわせようとしても、実里は笑えなかった。

「溝口悠理、もう二度と耳にしたくない、顔も見たくない男が突如として伏兵のように出現したのだ。」

「どうしたの？ 顔色が悪いよ。俺が冗談にしても、結婚の話なんかしたからかな」

実里の脳裏に「あの日、の光景がまざまざと甦った。跳ねる実里の身体を上から押さえつけ

、奥まで何度も刺し貫いた男。下腹部が引き裂かれそうな痛みに涙を流す実里を下から烈しく突き上げながら、あの男は自らの快楽をもっと貪るために、実里の乳房を揉みしだき、二人の接合部を弄り回した。

—こうやると、あんたのあそこが俺のを物凄い勢いで締め付けて、気持ち良いんだよ。

淫らで残酷な科白を毒のように耳許に流し込みながら、悠理は実里の中で何度も射精した。それが、今日の実里の姿に繋がったのだ。

「あ、ああ」

実里はその場にうずくまり、身体を丸めた。

怖かった。辛かった。死んでしまいたかった。嫌だと叫びたくても、それさえ許されなかった

。

あの時、確かに実里は思ったのだ。

一体、自分は何のために生まれたのだろう、と。まさに煉獄で業火に焼かれているような痛みと傷を実里の心身に刻み込んだ。

あの日の忌まわしい汚辱の記憶が次々と再現されてゆく。頭を両手で抱え込み、実里は、あの日の恐怖と闘った。

「実里ちゃん？ どうした、しっかりしろ」

柊路がしゃがみ込み、実里の肩に手をかけたその時、実里の恐慌状態は頂点に達した。

「いやーっ。来ないで、触らないで。私をどれだけ苦しめば気が済むの？ もう十分でしょう。どうしても許せないというのなら、私を殺せば良い。もう二度と、あなたなんかに触れられたくないんだから」

柊路の手を振り払い、実里は涙を振り散らしながら叫んだ。

柊路は愕然としてその場に立ち尽くした。

今の実里の反応がすべてを物語っていた。それは柊路が最も起こって欲しくないと思っていたことだった。

しかし、まさか悠理がそこまでするとは正直、彼も考えていなかった。柊路の読みが甘かったのだ。

可哀想に、どれだけ怖かっただろう。辛かっただろう。

「実里ちゃん、大丈夫、大丈夫だから」

柊路は泣きじゃくる実里を抱きしめ、しっかりと腕に抱え込んだ。

「もう、誰にも実里ちゃんを哀しませたりはさせない。俺が一生、実里ちゃんを守るよ」

柊路の腕の中は温かくて広かった。こうしていると、まるで自分が雛鳥になって親鳥の翼に抱かれているように思える。安心できる場所という気がした。

実里は気づいてはいない。悠理にレイプされて以来、ずっとひそかな男性恐怖症だったのに、柊路には触れられても、こうして強く抱きしめられてさえ、拒否反応は何も起こらなかった。

「あいつ、許さねえ」

柊は唇を噛みしめ、怒りに拳を震わせた。

早妃は確かに悠理にとっては女神だったかもしれない。だが、あの事故は本当に不幸な巡り合わせであったとしか言いようがなかったのだ。早妃を失った悠理の気持ちは推し量れないものがあるだろう。

だが、この世の中には、やって良いことと悪いことがある。そして、柊路もまた彼だけの女神を見つけたのだ。悠理が全身全霊をかけて彼の女神のために闘おうとするように、彼もまた彼

の女神のためならば、生命を賭けて彼女を守ろうとするだろう。　たとえ、生涯の友だと誓った相手だとしても。

悠理は口角を笑みの形に象る。この極上の笑みがどれほど多くの女たちを一瞬で虜にするか、彼はよく知っている。

「ああ、これからまた次に悠理クンに逢えるまで、ひと月も待たなければならないのね。随分と長いひと月だわ」

眼の前の女―藤堂実沙が甘えた声で悠理にしなだれかかる。

「そんなこと言わないで下さいよ。俺だって、実沙さんに逢えるまでの時間は途方もなく長くて、持て余すくらいなんですから」

もちろん口先だけの追従にすぎなかったが、実沙の頬が嬉しげに緩んだ。

「まあ、嬉しいことを言ってくれるのね」
が、次の瞬間、さっと顔を翳らせ、すり寄ってくる。

「どうせ大勢の女に似た科白を囁いてるくせに」

悠理は吹き出したいのを堪えるのに苦労しながら、いかにも哀しげな表情を作って見せた。

「酷いことを言うんですね。俺の心が昼も夜も実沙さんだけで一杯なのは判ってるでしょう？」
「フフ、お世辞でも悪い気はしないわね」

実沙はシャネルのバッグからいつもの長財布を取り出し、一万円札を三枚差し出した。

「これで何か美味しいものでも食べなさい」

ふと思い出したように言う。

「そういえば、お母さまはお具合は、あれからどう？」

一瞬、虚を突かれ、悠理は慌てて顔を引き締めた。

そうか、そういえば、大分前に、お袋の調子が悪いんだとこの女に言ったことがあったっけ。しかし、若い男とのアバンチュールを愉しむことしか頭にないだろうと思っていた女が半年以上も前の自分の言葉を憶えているとは思わなかった。

「お陰さまで、最近は大分調子が良いんです。感激だなぁ。実沙さんが俺のお袋のことまで気にかけてくれてたなんて」

「あらぁ、悠理クンのことなら、何でも気になるわよ」

当たり前でしょ、とでも言いたげなあからさまな秋波をよこされ、悠理は吐き気を憶えた。

しかし、嫌悪感を一瞬たりとも客に見せるわけにはゆかない。

「そう。なら良かった。親は大切にしなきゃ駄目よ。うちのドラ息子なんて、この間、いきなり女の子を自宅にまで連れてきて、大騒動だったのよ」

悠理は眼をわずかに見開いた。この女が普段、どのように過ごしていようが興味などさらさらでないが、同年代だという息子には幾ばくかの興味がある。

「そうなんスか。何か揉め事でも？」

実沙は憮然として言った。

「どこの馬の骨とも知れぬヤンキー女を連れてきてね。話を聞いていたら、何とキャバクラ勤めの水商売をしている女だっていうじゃない」

その何気ない言葉には、隠しきれない侮蔑の響きが込められている。

悠理は内心、毒づいた。手前の方こそ良い歳をして息子と同じ歳のホストに入れ込んでる

のに、その言い草はねえだろう？

「もう、髪の毛なんて、あなた日本人なの？ って訊きたくなるくらい金髪で、爪なんかは真っ赤っか。見ているだけで背筋が寒くなったわよ。あんな娘をうちの嫁にだなんて、とんでもない。うちの子はきっと世間知らずで女なんてろくに知りもしないから、あの女に騙されたんだわ」

そういうあんたの方こそ、五十にもなって爪をピンクに染めてるじゃねえか。その方がよっぽど見苦しいんだよ。 悠理は心の叫びはおくびにも出さず、神妙に頷いた。

「実沙さんもお心労が絶えませんね」

「ああ、そう言って判って貰えるのは悠理くんだけね。亭主は言うのよ。好きになってしまったものは今更どうしようもないんだから、諦めろですって、冗談じゃないわ。私はあんな破廉恥な女、藤堂家の嫁にだなんて、絶対に認めませんからね」

実沙がピンクのスーツのポケットからシガレットケースを取り出す。もちろん、これもブランド物だ。煙草を一本摘んで銜えるのに、悠理はさっと脇からライターを出して火を付けてやった。

「最近ね、また煙草を始めたの。息子を生むのをきっかけに長い間、止めてたはずなんだけどね。どうもやりきれないことが多くて、煙草でも吸わないと苛々してやってられない」

あんたみたいな暇あり金ありの有閑マダムがやってられないんなら、俺はもっと、やってられないよ。何が哀しくて、休日の昼間から、こんなオバさん相手に機嫌取りしなきゃならねえんだ？

悠理はまた心で悪態をつき、さりげなく腕時計を見た。金色のロレックスは、実沙からのプレゼントである。こういう、いかにも成金めいた物は好きではないから、普段は絶対に身につけないが、流石に実沙が店に来るときには忘れずに愛用しているふりをする。

「実沙さん、そろそろ電車の時間スけど」

いかにも残念そうに言うのも忘れない。

実沙が煙草を口から放すと、悠理はまたクリスタルテーブルの上の灰皿を実沙の前に差し出した。

実沙は悠理が恭しく捧げ持った灰皿に煙草の先を押しつけ、棄てた。

「ああ、本当に名残は尽きないわ。こうしてずっと明日の朝まで悠理くんと一緒にいたい気分」
冗談じゃねえや。 悠理は肩を竦めたい衝動を抑え、また「キラール・スマイル」を浮かべた。氷のように冷たいのに、女心を熱く蕩けさせるといわれている伝説の微笑である。

「俺も、またひと月も実沙さんに逢えないと思うと、何か胸にこう、ぽっかり穴が空いたようですよ」

別れ際のこのひと言が実はどれだけ女の心をぐっと惹きつけるかは長年の経験から嫌になるくらい知り尽くしている。 胸に片手を添えて哀しげに言うと、実沙は悠理の顎に手をかけて仰のかせた。

彼は二人並んでソファに座っているこの場所から、一瞬、逃げ出そうかと思った。しかし、逃げ出したいのを堪え、婉然と女に微笑みかける。

実沙はそのまま悠理の顔を引き寄せ、唇を塞いだ。悠理もまた女の身体に手を回し、熱烈なキ

スに 応える。

少しく後、悠理はさりげなく女の身体を押しやった。

「そろそろ行かないと。電車に乗り遅れてしまう」

「ねえ、今度はアフタ、行けるでしょ」

この女と関係を持ったのは、いつだったか。そう、四月の終わりだった。あの女—入倉実里をさんざん弄んでやってから数日ほど後のことだ。

あの女は良かった。こんな枯れかけたオバさんとは段違いだ。早妃と入籍するまでは、結構な数の女と関係を持ったが、玄人の風俗嬢でも、あれだけの良い身体をした女は見たことがない。胸もみずみずしく豊かで、膚には吸い付くような柔らかさと張りがある。あそこもほどよく締まっていて、俺が突いてやると、切なげな吐息を洩らした。

考えただけで、身体の芯が熱くなり硬くなる。あの魅惑的な肢体を思い出ただけで、身体が疼いて堪らない。あれから何度も、実里を待ち伏せて、どこかのホテルにでも連れていこうかと考えた。

だが、その度に、馬鹿げた自分の思惑に気づき、呆れた。あれは復讐のためにしたこと、何もあの女の身体が欲しくてやったわけではない。

あの女の豊かな乳房や淡い茂みの奥に秘められた蠱惑的な狭間を思い出す度に、何故か、あのときの女の表情まで浮かんでくる。彼の巧みな愛撫によって上り詰めるときの表情も切なげで良かったが、何故か、初めて彼を迎え入れたときの涙を滲ませた顔や破瓜の痛みを訴えるときの縋るような瞳の方が強く印象に残っていた。

馬鹿な。あの女は俺の早妃を轢き殺した仇だぞ？

自分に言い聞かせるが、それ自体がはや尋常ではないのだと自分でも理解はしていた。更に一日の中に何度も似たようなことを繰り返し考えている自分に思い至り、愕然とするのだ。

俺は何故、あんな女のことばかり考えている？ 今もまた、いつもの思考パターンに引き込まれそうになり、悠理は慌てて自分を戒めた。

「今度は必ず。俺も辛いんですよ。実沙さんをこうやって腕に抱きながら、何もしないで見送るのは地獄です」

「悠理くんが我慢してるんだものね。私も耐えなくちゃ」

実沙は悠理の上辺だけの態度と言葉に騙されていることに気づいてもいない。

「それじゃ、気をつけて。一ヶ月後、お待ちしてます」

フロントまでは見送らないのは暗黙のルールだ。もちろん、人眼につく怖れがあるからだ。

部屋の入り口まで行くと、いきなり女が背伸びして悠理に抱きついてきた。悠理は女の未練に辟易したが、やはり女を引き寄せ強く抱きしめた。

「また来るわね」

実沙が名残惜しげに言い、蒼い絨毯の廊下を歩いてゆく。途中で一度振り返るのは判っていたから、悠理もまだその場所に立っていた。こういうこともホストであれば、気を抜かないものだ。微笑んで見せると、女は嬉しげに頷き、今度こそ意を決したように歩み去っていった。

思わず大息をつき、部屋のドアを閉める。

先刻まで女と座っていたソファにドサリと身を投げ出し、横になった。

またしても、あの女の泣き顔がちらつく。

途端に自分でも言い表しがたい烈しい感情が湧き上がってきて、悠理は部屋に備え付けの冷蔵庫からチューハイを出した。プルタブを引き抜き、ひと息に飲み干す。よく冷えた甘い液体が喉をすべり落ちてゆく感触は実に心地よかった。

と、ドアを外側から誰かがノックする。

「どうぞ」

投げやりに言ったのが聞こえなかったのかどうか。言い終わる前に、ドアが開いた。

「おう」

悠理はだらしなくソファに寝っ転がったまま、片手を上げた。挨拶代わりにつもりだ。

しかし、突如として入ってきた親友は珍しく精悍な顔を強ばらせていた。

「昼日中からアルコールとは結構なことだな。店の規則では客には飲ませても、俺たちは店内では飲むなと言われてるだろう」

こりゃ、どうも機嫌が悪いな。 悠理は大袈裟に肩を竦めた。

「店の規則なんて糞くらえだ。俺の知ったことじゃねえや」

わざと蓮っ葉に言うと、柊路は呆れたように言った。

「また、来てたのか？」

主語は省略しているが、柊路が言いたいのが藤堂実沙であることは明らかだ。

「客のプライベートについては一切、他言無用。それが店のルールだろ。お前の方こそ、忘れたのか？」

皮肉っぽく言う。

柊路はそれには取り合わず、歯を食いしばった。唇を真一文字に結んでいる。何か表情を作ろうとして口許を歪めたが失敗したという感じだ。

「母親より年上の女とよくもやってられるな。恥ずかしくはないのか？」

いきなり言葉を突きつけられ、悠理は眼を剥いた。

「何を今更。俺だけでなくお前だって、さんざんやってきたことだろう。大体、それを言うのなら、この店の客は大半が中年以上の女だ。残念ながら」

「客の心を必要以上に弄ぶな」

ヘッと悠理は唾棄するように言った。

「それが俺たちの仕事だろう」

「仕事？」

柊路が眉をつり上げた。

「俺たちの仕事は客に夢を与えることじゃないのか」

「いかにも綺麗事好き、理想主義の柊路らしいな」

悠理はクックッと低い声で笑う。聞きようによっては、それは嘲笑にも取れる。

「幾ら言葉で飾り立てようと、俺たちは所詮、ホストだ。それ以上でも以下でもないさ」

「自分の仕事に誇りを持たないのか？」

さも意外なことを聞いたとでも言うように悠理は眼をまたたかせた。

「誇り？ 笑わせる。手練手管で女の気を惹くのが商売のこの仕事にどうやって誇りを持つんだ？」

柊路は救いがたいと言いたげな表情で首を振った。

「つい最近、俺にこんなことを言った人がいたよ。どんな仕事をしているかよりも、どれだけその仕事に夢中になって打ち込んでいるかで人間の価値は決まるそうだ」

「阿呆らしい」

悠理はペッと唾を吐いた。

またしても、あの女の泣き顔がちらつく。

途端に自分でも言い表しがたい烈しい感情が湧き上がってきて、悠理は部屋に備え付けの冷蔵庫からチューハイを出した。プルタブを引き抜き、ひと息に飲み干す。よく冷えた甘い液体が喉をすべり落ちてゆく感触は実に心地よかった。

と、ドアを外側から誰かがノックする。

「どうぞ」

投げやりに行ったのが聞こえなかったのかどうか。言い終わる前に、ドアが開いた。

「おう」

悠理はだらしなくソファに寝っ転がったまま、片手を上げた。挨拶代わりにのつもりだ。

しかし、突如として入ってきた親友は珍しく精悍な顔を強ばらせていた。

「昼日中からアルコールとは結構なことだな。店の規則では客には飲ませても、俺たちは店内では飲むなと言われてるだろう」

こりゃ、どうも機嫌が悪いな。 悠理は大袈裟に肩を竦めた。

「店の規則なんて糞くらえだ。俺の知ったことじゃねえや」

わざと蓮っ葉に言うと、柊路は呆れたように言った。

「また、来てたのか？」

主語は省略しているが、柊路が言いたいのが藤堂実沙であることは明らかだ。

「客のプライベートについては一切、他言無用。それが店のルールだろ。お前の方こそ、忘れたのか？」

皮肉っぽく言う。

柊路はそれには取り合わず、歯を食いしばった。唇を真一文字に結んでいる。何か表情を作ろうとして口許を歪めたが失敗したという感じだ。

「母親より年上の女とよくもやってられるな。恥ずかしくはないのか？」

いきなり言葉を突きつけられ、悠理は眼を剥いた。

「何を今更。俺だけでなくお前だって、さんざんやってきたことだろう。大体、それを言うのなら、この店の客は大半が中年以上の女だ。残念ながら」

「客の心を必要以上に弄ぶな」

ヘッと悠理は唾棄するように言った。

「それが俺たちの仕事だろう」

「仕事？」

柊路が眉をつり上げた。

「俺たちの仕事は客に夢を与えることじゃないのか」

「いかにも綺麗事好き、理想主義の柊路らしいな」

悠理はクックッと低い声で笑う。聞きようによっては、それは嘲笑にも取れる。

「幾ら言葉で飾り立てようと、俺たちは所詮、ホストだ。それ以上でも以下でもないさ」

「自分の仕事に誇りを持ってないのか？」

さも意外なことを聞いたとでも言うように悠理は眼をまたたかせた。

「誇り？ 笑わせる。手練手管で女の気を惹くのが商売のこの仕事にどうやって誇りを持つんだ？」

柊路は救いがたいと言いたげな表情で首を振った。

「つい最近、俺にこんなことを言った人がいたよ。どんな仕事をしているかよりも、どれだけその仕事に夢中になって打ち込んでいるかで人間の価値は決まるそうだ」

「阿呆らしい」

悠理はペッと唾を吐いた。

「俺は馬鹿げているとは思わない。確かにホストと聞いただけで、真っ当な人間だと見て貰えないのは事実だが、俺はさっきの言葉を聞いてから、考えを改めたよ。ここに来る客は皆、事情は違うけれど、誰もが心に闇を抱えてる。俺たちはその闇を少しでも取り除いてやるのが仕事だ。客がここに来て、俺たちとほんのわずかな時間を共にすることで、また元気になって、それぞれの日常に帰っていければ良いと思ってる」

「語りたければ、そこでいつまでも理想論を語ってろ」

悠理はだるそうに言い、寝転んだままの姿勢で眼を閉じた。

「とにかく、あの藤堂実沙という客にはあまり深入りするな。あれはただの遊びの目つきじゃない。下手にその気にさせたら、あの女だけでなく、お前まで大けがすることになりかねないぞ」

この店にはなかったが、他の似たようなホストクラブでは、以前、本気になりすぎた客が家も何もかも棄ててホストの許に押しかけたことがある。

しかし、ホストがすぎなく突き放したため、一旦は帰った女性は再び今度は刃物を持って店に現れた。大騒ぎの中、女性はホストを刺し殺し、自分もその場で胸を貫き、後を追った。事件当時は週刊誌などに「中年女性の純愛、ホスト狂いの真相！」などと題して、面白おかしく書き立てられ話題になったものだ。

「別に向こうが勝手に燃え上がってるだけだ。やっぱ、アフタに行ったのがまずかったかな」

悠理は眠そうに眼をこすった。

「これ以上、くだらない話を続けるつもりなら、出てっってくれないか。俺は疲れてるんだ」

「これ以上、犠牲者を増やすつもりか？」

「犠牲者？ 人間きの悪いことは止してくれ。俺はお前流の言葉で言うなら、藤堂実沙に夢を与えてやってるんだ」

と、柊路がつかつかと歩いてきて、悠理の胸倉を掴み上げた。

「貴様、一体、あの子に何をした？」

「あの子？ あの子もこの子も色々いるから、さっぱり見当がつかねえな」

冗談を言ったつもりで、一人へらへらと笑った。しかし、柊路はにこりともしなかった。陽に焼けた男らしい顔が怒りに燃えていた。

「名前を言わなければ、判らないのか？ それなら教えてやる。入倉実里だ」

「入倉一実里」

悠理はぼんやりと呟いた。

「彼女に何をした、言え！」

柊路は鬼気迫る形相で迫った。

そこで悠理は開き直った。そうさ、俺は別に悪いことをしたわけじゃない。当然のことをしたんだ。俺の早妃と赤ん坊を殺した憎い女に制裁を加えてやったんだ。なのに、誰が俺を責める権利があるっていうんだ？

悠理は悪びれもせずに言い放った。

「レイプしてやった。良い身体してたぜ、あいつ。バージンだったみたいだけど、俺、最初は気

づかなくてさ。前戯もなしにいきなり突っ込んでやったら、痛かったらしくて酷く泣かれた。けど、そのときの泣き顔もまたそそられる。俺は余計に熱くなっちゃまって、やりまくってやったんだ」

柊路は両脇に垂らした拳をわかかなせていた。

「お前は自分のしたことの意味を判ってるのか？」

「ああ、判ってるさ。俺は早妃を轢き殺した憎い女に正義の鉄槌を下した。ただ、それだけのことだ」

悠理は平然と言葉を放った。

「良い子じゃないか。何で、そんなことをしたんだ」

柊路が振り絞るように言った。

悠理が呆れて鼻を鳴らした。

「柊路、まさか、お前、あの女に惚れたのか？」

ククと耳触りな笑声を上げた。

「こいつは良い。レイプされた女とホストの純愛か。お似合いすぎて、涙が出るな。週刊誌にネタ売ったら、さぞかし飲んで飛びつくだろうよ」

ひとしきり笑ってから、悠理は柊路にグイと顔を近づけた。

「おい、俺が今、何を考えてるか教えてやろうか」

「お前の心の中なんて知りたくもない」

柊路が顔を背けるのに、悠理は邪悪な美しい笑みを端正な面に浮かべる。

「あれから俺は一度も、入倉実里に手を出しじゃない。だが、頭の中でなら、一日に何度、あの女をレイプしているか知れたものじゃない。あいつの身体はグラビアアイドル並か、それ以上だ。一度抱けば、お前だって、その味が忘れられなくなるだろう。いっそのこと、あの女を服従させて、一生、俺の側に縛りつけておいてやっても良いんだ。いつでも俺が望んだときに身体を投げ出す性の奴隷にしてやれば、完璧な復讐になる」

「一止めろ」

柊路が呟く。しかし、悠理はなおも滔々と続けようとした。

「お前は綺麗事を言っているが、あいつとやりまくってみれば、考えも変わるさ」

「止めろと言ったら、止めろ。そのお喋りな口をすぐに閉じないと、後悔することになるぞ」

柊路の拳がついに悠理の頬に飛んだ。

「貴様の一貴様が彼女にした酷い仕打ちのせいで、彼女が今、どんな状態になってるのかをお前は知っているのか！？」

「俺の知ったこっちゃないね」

悠理は殴られた頬をさすりつつ、あらぬ方を向いた。

「事故を起こしたことで、折角、抜擢された新しいプロジェクトのメンバーからも外されたんだぞ」

「それが、どうしたっていうんだ。早妃と赤ん坊は死んじゃったんだ。生命を失うのに比べたら、その程度のことは痛くもかゆくもないだろ」

「お前ってヤツは」

二度目の拳が来た。今度は悠理も大人しくはしていなかった。やられっ放しではなく、柊路の頬を殴り返した。

「恥知らずな貴様の友達でいることが恥ずかしいよ」

「それは、こちらの科白だ。お前はあの女が俺の女房と子どもを轢き殺した張本人だと知った上で、のぼせ上がったんだろうが」

「俺は彼女の人柄や生き方に惚れたんだ。それをお前にとやかく言われる筋合いはない」
上になり下になりと揉み合いながら、二人の男はどちらも負けない大声で怒鳴り合った。上になった柊路の振り上げようとした拳がふと力なく降りた。

やりきれない声が洩れた。

「悠理、一彼女、妊娠してるぞ」

その言葉に、悠理はハンマーで脳天を一撃されたように思えた。

「あの女が一妊娠？」 悪い夢を見ているようだ。

悠理は無理に笑おうとした。

「どうせ、どこかの男と愉しんだんだろうよ。一度ヤラレちまえば、後は何回やろうが、同じことだからな。まさか、相手はお前じゃないだろうな」

柊路が悠理を烈しい眼で睨んだ。

「お前、もう一発、殴られたいのか？」

悠理は愕然としていた。

そう、そんなはずはない。あの女は俺にヤラれるまではバージンだったのだ。二十七にもなって処女だった女が容易く誰とでも寝たりはしないだろう。

それとも、レイプされて自棄になって、誰彼構わず？ いや、それもないだろう。悠理は実里の瞳を思い出した。くっきりとした黒い瞳は理知の光を湛え、明るい知性と温かな優しさがあつた。

あの女が卑怯な人間であれば、早妃を轢いたときに、そのまま逃げたはずだ。だが、あの女はすぐに救急車を呼び、搬送の間もずっと付き添い、病院にも詰めていた。

あのことだけでも、あいつが恥知らずな人間ではないことは判る。

いいや、俺は端から判っていたんだ。本当に悪いのはあの女じゃない。早妃の方が先に路上に飛び出し、あの女は咄嗟にブレーキをかけた。だけど、間に合わなかった。あれは不幸な事故だ。あの女はたまたま、その現場に居合わせたただけだ。

俺はそれを重々判っていたながら、敢えて判らないふりをした。そうしなければ、心が耐えられなかったから。俺の早妃と赤ん坊が突然、取り上げられてしまったという理不尽な宿命に心が折れそうだったから。

だから、俺はあの女をひたすら憎むことで、怒りの矛先をあいつに向けることで、辛うじて自分自身を保ったんだ。恥知らずなのは、俺の方だ。俺は心が弱すぎて、誰かを憎むことでしか哀しみを乗り越えられなかった。

悠理が黙り込んだのを見て、柊路は悠理から離れた。

「信じられないというのなら、お前自身の眼で確かめてみると良い。彼女、妊娠したせいで会社にも居づらくなって、辞めさせられたんだ。多分、お前の顔を見るのも恐らく、これが最後になるだろう」

「柊路？」

「俺は店を辞める。これからは風俗から脚を洗って、堅気として生きてみる。まずはそこから始めなきゃ、実里ちゃんにふさわしい男にはならないからな」

悠理がガバと顔を上げた。

「店を辞めて、それから、どうするんだ？」

「実里ちゃんに改めてプロポーズするつもりだ。生まれてくる子どものこともあるし、できるだ

け早く結婚するつもりだよ。もっとも、運良くOKして貰えればの話だが」

柊路は最後の一瞬、精悍な顔をほころばせ、悠理がよく知る親友の顔を見せて去っていった。

実里は精一杯、背伸びしてみた。それでも、まだ最上段の棚には届かない。こんなときには、小柄な自分が恨めしくなる。

実里の勤務するスーパーでは、パートは三交代制だ。朝八時半から一時まで、更に午後一時から五時半まで、最後が五時半から閉店の十時までの勤務となる。

小さなスーパーだが、夜遅くまで開いていることから、勤め帰りの人が立ち寄ることが多く、それなりに繁盛していた。

そろそろ妊娠も九ヶ月が近くなってきた。ここのところ、自分でも判るくらいお腹は急激に大きくなっている。今は、赤ん坊は一六〇〇グラムくらいだと医師から教えられた。

結局、実里はあのまま町の小さな病院に通っていた。自宅から近いのと中年の医師が気さくで信頼できる人だったのが大きな要因である。でも、やはりお産はできないので、臨月に入ってから紹介先の総合病院に移ることになっていた。

一もう出てきても、十分大きくなれるところまで成長していますよ。

この間も、医師がそう言って笑っていた。

女の子であるということも判っていた。 私の赤ちゃん、元気で大きくなって生まれてきてね。

実里は大きくせり出した腹部を愛おしげに撫でた。合図するかのよう、胎児が腹壁を元気よく蹴るのが判った。成長めざましい時期なのか、胎動もとみに活発だ。時には蹴られすぎてお腹が痛いほど暴れることもある。

スーパーには制服はない。実里は防寒も兼ねて厚着をしていた。淡いブルーのハイネックセーターにチャコールグレーのコーデュロイのマタニティスカート。その上に厚手のざっくりとしたカーディガンを羽織っている。もちろん、スカートの下は厚手のタイツを穿いている。ここまで完全防備でならば、風邪を引く心配もないだろう。

制服がない代わりに、各自で持参したエプロンをつけている。お腹が大きくなるにつれて、腰の痛みは更に頻発するようになった。以前はそれほどでもなかったのに、少し立っているだけで腰がだるくなり痛み出す。

実里は拳でトントンと腰を叩き、また背伸びした。箱に詰めている液体洗剤の詰め替え用を棚のいちばん上に順序よく並べていく。たったこれだけの作業が、今の実里にとっては、かなりの難作業となってしまうている。普通では考えられないような手間と時間がかかるのだ。

仕方ないと、脇にあった小さな台を引き寄せ、その上に上がった。

「これでよし。何とか届くみたい」

ひとりごち、台に乗って商品を棚に置いた。刹那、身体が重心を崩して揺らいた。

「あっ」

悲鳴を上げたのと誰かの逞しい腕に抱き止められたのはほぼ同時のことだ。

「こんなでかい腹をして、高いところになんか上るんじゃない」

どこかで聞いたような声に、実里はハッと顔を上げた。

「一！」

実里の可愛らしい顔が見る間に蒼白になってゆく。

あの日の記憶がフィルムを巻き戻すように、一挙に押し寄せてくる。

衣服を荒々しく引き裂いた男の手。素肌を這い回った男の熱い唇。

そうだ、眼前のこの怖ろしい男が実里を滅茶苦茶にし、黴り抜いたのだ。

「あー」

実里は顔を引きつらせ、嫌々をするようにかぶりを振った。

今更、どうして、溝口悠理が自分の前に現れたのだろう。まさか、まだ復讐が足りないの実里をどうにかするつもりで？ 実里は烈しい驚愕と怯えを滲ませ、ぶるぶると震えた。

こんな卑劣な男の前では毅然としていたいの、情けなくも声まで震えてしまう。

「わ、私をどうするつもり？」

「少し話がしたい」

悠理の態度は少なくとも外見上は穏やかだ。しかし、それが単なる見せかけだけでないとは、どうして言えるだろう？

「私には話すことは何也没有せん」

辛うじて体勢を立て直し、実里は真正面から悠理を見据えた。

「あんたになくても、俺にはあるんだ。仕事ももう終わりだろ、どこかで話さないか？」

「嫌です、行きません」

「少しで良い。時間は取らせない」

実里は悠理をキッと睨んだ。

「あれだけ私をいたぶっておいて、まだ足りないんですか？ また私を好きなだけ弄んで、それで満足するんですか？」

気丈に言いながらも、実里は相変わらず小刻みに身体を震わせている。

悠理は曖昧な表情でかすかに首を振った。

「そんなに怯えてなくても良い。嫌がる妊婦を押し倒すほど、俺は獣じゃない」

「とにかく私には、あなたと話す必要はないんです。早く私の前からいなくなってください」

実里は強い口調で言った。

悠理が小さな吐息をついた。

「俺があんたにしたことを考えたら、そう言われても仕方がないことは承知だ。だが、これだけは聞かせてくれ。あんたの腹の赤ん坊は、誰の子だ？」

ヒッと実里の口から悲鳴とも何ともつかない声が洩れ出た。その反応は、たとえ彼女が応えずとも、悠理に確信を抱かせるに十分すぎた。

「そんなこと、あなたには関係ないでしょう」

「その赤ん坊の父親が俺だったとしてもか？」

実里が息を呑んだ。今や、彼女の顔色はすっかり白くなっている。今にも倒れるのではと心配になるくらい血の気を失っていた。

「なあ、頼むから教えてくれ。その赤ん坊は俺の子なのか？」

悠理が迫ってくる。実里は恐怖に眼を見開き、後ずさった。

「一緒になろうとは言わない。だが、せめて、子どもの父親だとは認めてくれ。その子を俺の子どもとして認知したい。あんたにも子どもにもできる限りのことをしたいんだ」

悠理が実里の細い手首を掴む。彼が実里の手をしげしげと眺めた。

「あんた、随分と痩せたな。俺があんたを抱いたときには、もっと肉がついてー」

「止めて！」

実里は掴まれた手をまるで彼の手が汚物でもあるかのように勢いよく引き抜いた。

「あなた、今頃になってよくそんなことが言えるわね。この子は、赤ちゃんは私だけの子です。この子に父親なんて、初めからいないんです。たとえ頼まれって、あなたの世話になんかならないし、力を借りようとも思いません」

あなたに縋るくらいなら、お腹の子と一緒に死ぬわ。

悠理の表情が固まった。口許が引きつり、眼には歪んだ笑みが浮かんでいる。この笑み、自己嫌悪まのまなざしに何かが感じられ、実里は口にしたばかりの言葉をひたたくって取り戻したくなった。

だが、一度発した言葉は二度と取り返せない。同じように、自分とこの男の関係も未来永劫、変わりはないのだ。過失とはいえ、妻を轢き殺した女と。復讐で女を辱め、身籠もらせ

た男と。 そんな二人の人生が変わるはずがない。

いや、早妃の死という不幸な出来事がきっかけで違う世界で生きていた二人が出逢ったことこそが、大きな悲劇の始まりだったのだ。

実里が早妃を轢き殺したという十字架を背負って、これからの人生を生きてゆかなければならないように、この男もまた、一人の女をレイプし、その人生を滅茶苦茶にしたという事実を抱えていかなければならないのだ。

運命とは、かくも残酷なものなのか。 実里は一生涯、我が子に父親について真実を話すことはないだろう。 秘密は永遠に葬り去られ、やがて忘れ去られる。

悠理は黙って実里に背を向けた。 肩を落として去ってゆく男を見送りながら、実里もまた茫然とその場に立ち尽くしていた。

スーパーの近くに小さな公園があった。 いつか早妃と寄ったことがある。 あの頃、早妃は妊娠五ヶ月で、近くの神社で簡単な安産の祈禱を上げて貰い、腹帯を貰って帰る道すがらであった。

ほんの猫の額ほどの公園にはブランコと滑り台があるだけで、それすらも今は殆ど使用されていないらしい。

草がぼうぼうに生えて、忘れ去られたかのようなブランコと滑り台が淋しげに見えた。

早妃と並んでブランコに腰掛け、揺らしながら見た世界はすべてが希望に溢れ輝いて見えた。

あれからまだ一年も経たないのに、何と世界は変わってしまったのか。

悠理はブランコに乗り、訳もなく揺らしながら空を振り仰いだ。

失った赤ん坊が戻ってきた。 そう思った喜びも束の間、父親になるという夢はすぐに潰えた。

そもそも当たり前なのだ。悠理はあれほどまで徹底的に実里を辱めた。その挙げ句に身籠もった子を産もうと彼女が決意しただけでも、実里には感謝すべきだろう。 そんな彼女が今になって、悠理が手を差し伸べたところで、ありがたがるはずがない。むしろ、いつまでも忌まわしい過去を思い出させる男が周囲をうろつけば、迷惑がるに決まっている。

終路の言うことは間違っただけではなかった。 たとえ、どれほど人を憎んだとしても、この世にはやって良いことと悪いことがある。ましてや、早妃の死は本当は実里のせいではない。彼女を憎むことで、早妃を失った哀しみを別の方に向けようとしただけだ。

むしろ、実里は会社での立場も悪くなり、しまいには俺に妊娠させられて、辞めざるを得なくなった。そして今、未婚の母として生きようと健気にも頑張っている。

俺は結局、自分で自分の首を絞めたんだ。 折角、我が子がこの世に一度こそ元気な赤ん坊が生まれてくるというのに、その子をこの腕に抱いてやることも父親と名乗ることも許されない。

しかし、それだけの罰を受けても仕方のないことを俺は彼女に対してした。

薄青い初冬の空にひとすじ、絵の具を垂らしたようなちぎれ雲が浮かんでいる。

ふいに空の色がほやけて、悠理は眼をしばたたいた。頬が濡れている。どうやら、知らない間に泣いていたらしい。 でも、俺には、それが何の涙なのかは判らなかった。 あの女への罪の意識、それとも哀れみ？ いや、多分、それは俺自身への哀れみの涙だったかもしれない。

十一月の寒風が悠理の前髪を揺らし、通り過ぎていく。悠理は意味もなくブランコを揺らしな

がら、ひっそりと涙を流した。

P r a y (祈り)

P r a y (祈り)

運命のその日は、足音すら立てずにやって来た。

十二月半ばのある日、実里はF 駅から私鉄電車に乗り、隣町のI 駅で降りた。これまでなら迷わず車を使うところだけれど、四月のあの事故以来、車は乗っていない。

車を運転すると、どうしても、あの日のことを思い出してしまうのだ。なので、どこに行くにも交通機関を必然的に利用することになった。

I 駅で降りると、結構な道程(みちのり)を歩かなければならない。駅前の寂れた商店街を抜け、しばらく行くと、だらだらと上ってゆく坂道がある。坂の両脇には静かな住宅街が並び、その長い坂道を上りつめたところに広い墓地があった。

頂上の墓地からは遠くはるかに海が見渡せた。蒼い、どこまでも果てなく続く海は、お腹の子を宿したと知ったばかりの頃、潤平のマンションで見た紫陽花の色にも似ている。

あれで本当に潤平とは終わりになった。風の噂によれば、彼は予定どおり九月初旬、ニューヨーク支社に赴いたという。何と愕くべきことに、空港からロス行きの飛行機に搭乗する彼の傍らには美しい妻が寄り添っていた。

その妻は潤平の直属の上司の姪で、それでなくとも出向から戻ってくれば栄転は間違いなしといわれている彼のこれからの輝く前途を約束しているかのようなようだった。

どうやら、ニューヨーク行きが正式に決まった少し前には、上司を通じて縁談が持ち込まれていたらしい。潤平は流石に確答は避けたものの、かといって、はっきりとも断らず、上司の姪とは時折逢ったり、メール交換をしていた。つまり、潤平は両天秤をかけていたことになる。実里との結婚を望みながらも、万が一に備えて逃げ道をこしらえていた。それを良いように勘違いした上司は潤平が姪との結婚を決めたと思い込み、出向の話を進めた。

もともと、潤平が仮にこの縁談を断った場合、姪可愛さのあまり、怒った上司が出向の話を白紙にしたであろうことも十分考えられる。狡猾で貪欲な癖に、そこまで頭が回らないのが彼らしいといえはいえた。

考えてみれば、潤平の妻になった女性も哀れではあった。夫の狡賢い本性などついで知らないのだから。

所詮、実里は彼にとって、その程度のものにすぎなかったのだ。あの時、潤平のプロポーズに Y e s と応えなくて良かったとしみじみと思うのだった。

既に九ヶ月めに入り、実里のお腹ははち切れんばかりになっている。傾斜は緩やかとはいえ、けて短くはない坂を登り切るのは、今の身体では至難の業といえた。

苦勞してやっと頂上に辿り着くと、しばらくは蒼く輝く海を眺めながら呼吸を整えた。今日は殊の外良い天気で、陽光が蒼海を照らし、海は眩しく煌めいている。

実里はしばらく海を眺めながら休むと、今度はまたゆっくりと歩き出した。広大な墓地の一角に小さな十字架がひっそりと立っていた。十字架の前には枯れた百合の花が忘れ去られたよう

に放置されていた。実里は腕に抱えてきた真新しい百合の花束をそっと墓前に供えた。

十字架はまだ真新しく、SAKI MIZOGUCHI 1988～2007、と彫り込まれている。

一許してください。

実里はしゃがみ込むと、両手を合わせて黙祷した。

実里はクリスチャンではない。だから十字は切らなかったけれど、心から亡き人に祈りを捧げた。

あの事故以来、こうして月に一度、時間の許すときに早妃の墓参りに通いつけている。

柩路から早妃が百合の花が好きだったと聞いたので、大抵は百合の花を持ってきた。いつも白ばかりでは淋しいだろうからと、今日は華やかなオレンジ色の百合と優しいピンクの色合いのスプレーカーネーションで花束を作って貰った。可愛らしいピンクのリボンで束ねられている。

この十字架の下に永眠(ねむ)っているのは早妃だけではない。早妃のお腹には、ついにこの世の光を見ることなく儂く逝った赤ん坊もいたのだ。

自分がもうすぐ出産を控え、実里は今なら早妃の気持ち痛みほど理解できた。母となる喜びを指折り数えながら待っていたのに、突如として生命を奪われてしまった。どれだけ悔しかっただろうか。生きたいと願っただろうか。

今日、カーネーションを花束に入れたのは、母となることを望みながらも不幸にしてなり得なかった早妃へのせめてもの手向けの意味もあった。

実里は長い間、その場に跪いていた。海に面した高台の墓地は吹きすさぶ風もいっそう冷たかった。臨月も近くなったというのに、風邪を引いてはまずいと思い、そろそろ帰ろうと立ち上がったときである。腰に鈍痛を憶えて、思わず顔をしかめた。またいつもの腰痛だろうと腰をさすってみたが、痛みは治まるどころか余計に烈しくなるばかりである。

ふいに激痛が腰から腹部にかけて走り、実里は小さなうめき声を上げて頼れた。

一痛い一。

腹を押さえながら、実里はその場に倒れた。

痛みはひっきりなしにやってくる。まるで波が寄せるように、少し楽になったかと思えばまた振り返りながら、確実に強くなっていった。

やがて、生暖かいものが下腹部から溢れ出し、太腿をつたい落ちてゆくのが判った。

一まさか。

実里は蒼褪めた。初産なので知識でしか知り得ようがないが、これは陣痛の始まりではないのか。今、ほとぼしるように下肢を濡らしているのは、破水なのかもしれない。

どうしよう。実里は懸命に身を起こそうしたが、痛みは増すばかりで、身動きもできない。その間にもひっきりなしに痛みが襲ってきて、実里はパニックに陥った。

「一誰か、誰か来て」

しかし、こんな真冬の平日に辺鄙な墓地を訪れる人はいなかった。

このままでは出産が始まってしまう。実里は恐慌状態になりながら助けを求め続けた。

その時、誰かが駆け寄ってきて、実里は逞しい腕に抱き起こされた

「大丈夫か？」

この声は一。

「柊路さん？」

うわ言のように呼ぶと、相手が息を呑む気配がした。

またひときわ烈しい痛みが直撃した。実里は痛みで顔を歪めながら、必死で訴える。

「お願いします、助けて。赤ちゃんが、赤ちゃんが生まれそうなんです」

既に意識は朦朧としていた。

「おい、しっかりしろ、眼を開けろ。眼を開けてくれ」

声は若い男のものだった。この人が親切な人ならば良い。もしそうなら、病院まで連れていってくれるだろうー。そこまで考えて、実里の意識は完全に闇に飲み込まれた。

時間はこれより少し前に遡る。

悠理はこの日、実里に遅れることわずかで墓地に辿り着いた。ここは海沿いで眺めも良い場所だし、陽当たりも良い。わずか十九歳で逝った早妃が永久(とわ)の眠りにつくにはふさわしい場所だ。

悠理自身は無宗教で、父は小さな仏壇を祀っていたから、実家は仏教なのだろう。だが、短い人生で色々ありすぎたせいか、神仏に頼るといふ思考など、とうに棄てた。

早妃は個人的にキリスト教を信奉していたし、時には近くの教会の礼拝にも参加することもあった。それなら、彼女の望むやり方で葬式をしてやれば良いと思った。

早妃の墓の手前まで来た時、彼は墓前に先客がいることに気づいた。相手は悠理の存在には気づいてはおらず、一心に祈っている。

悠理は他の墓の影から、ずっとその様子を見ていた。しばらくして墓参者が立ち上がり、漸くその横顔が見えた。そのときの彼の愕きは生半ではなかった。

何と墓参りに訪れていたのは入倉実里だったのである。三週間ほど前に見たときより、お腹は更に大きくなっている。あの中に我が子がいるのだ一と思うと、感無量で胸が熱くなった。

実里には完全に拒絶されたが、こうして遠くから我が子を見守るくらいは許されるだろう。

彼は今更ながらに気づいた。早妃が亡くなってからというもの、彼は月命日には必ずこうして墓参りに来た。不思議なことに、大抵、先客があつたらしく、まだ咲き誇る百合の花束が供えられていた。

早妃の両親だとは到底、思えなかった。悠理と違って彼女の義父と母親はまだ健在ではあるものの、葬式の日時を知らせても顔も見せなかったような両親である。

誰か友達か知り合いと考えるのが妥当であったが、キャバクラを辞めてから早妃はキャバ嬢時代の友達には逢いたがらなくなった。

だとすれば、友達関係というのもあまり考えられない。早妃の好きだった百合の花を持って毎月必ず律儀に訪れる人、その人がそも誰なのか。

悠理はずっと知りたいと願っていた。逢って、その心優しい人に心から礼を言いたいと思っていたのだ。それが、よもや実里であったとは！

声をかけようかどうしようか迷った。また、あんな恐怖と怯えを宿した眼で見られるかと思うと、このまま顔を合わせない方が良いのかもしれないと思えてくる。彼が思いあぐねていたその時、小さなうめき声が耳を打った。

ハッと顔を上げると、実里が墓の前に倒れていた。腹が痛むらしく、片手でお腹を押さえている。その表情から相当の痛みを堪えているのだらうと察せられた。

迷ってなどいられない。悠理はすぐに実里の側に走った。

「大丈夫か？」

抱え起こして声をかけると、実里はうっすらと眼を開いた。その苦しげな表情に、かすかに安堵が滲んだ。「柊路さん？」 刹那、悠理の胸を軽い衝撃が駆け抜けた。

実里は柊路に心を寄せ始めているのだ。

当然のなりゆきにも思えた。男の悠理が見ても、柊路は男気のある男らしい男だ。

柊路は十一月のある日、ホストクラブを辞めた。同じホスト仲間から聞いたところによると、自動車の整備工場で見習いとして働いているらしい。見習いをしながら、将来は本格的な整備士になるのを目指しているのだという。

自らの目的を持ち、それに向かって邁進している柊路。その毅然とした生きる姿勢は、実里にも共通するものだ。そして、柊路の方も実里にベタ惚れだ。

あの二人なら、似合いだろう。 柊路なら実里を幸せにしてくれるし、柊路自身も言っていたように、生まれてくる赤ん坊を我が子同然に慈しむに違いない。

二人を託すのに柊路ならば、何の愁いもない。なのに、悠理の心は晴れなかった。

その瞬間、彼は悟ったのだ。 俺はいつからか実里に惹かれ始めていたんだ。

始まりがいつからかは判らない。実里を執拗につけ回していた頃では断じてないし、レイプしてやろうと思いついたときであるはずがない。いずれにしろ、彼女につきまとっている中に彼女という人間を知るにつれ、実里という女の人間性に強く惹かれるものは感じていた、それは確かだ。

脆そうなのに、頑固で、ひたむきで真っすぐで、優しくて。上っ面だけ友達面をして、その実、相手を蹴落とすことしか頭のないホスト仲間の中にあって、たった一人、心を許せた親友柊路と実里はとてもよく似ている。

外見とかいうのではなくて、魂の奥底の深い部分で似ている。だからこそ、余計に悠理は実里に惹かれたのかもしれない。

彼女が早妃を轢いたと知りながら、悠理は次第に実里の人柄に魅せられていった。実里が彼の子を宿したと知った時、もしかしたら、親子三人で暮らせるかもしれないなどと馬鹿げた空想を夢見てしまったほどに。

むろん、これは、まだ愛とか恋と呼べる段階のものではない。しかし、芽生えたこの感情が少しずつ育っていけば、いずれは恋になり得る可能性のあるものではあった。 苦しげな声が聞こえて、彼は首を振った。

今は女々しい物想いに浸っているときではない。

冬だというのに、実里は脂汗をかいている。これはただ事ではない。

「お願いします、助けて。赤ちゃんが、赤ちゃんが生まれそうなんです」

息も止まりそうな苦しみに喘いでいるのに、お腹の赤ん坊のことばかりを気にしている。それがいじらしくもあり、哀れでもあった。

意識は朦朧としているのか、実里の眼は虚ろだ。

「おい、しっかりしろ、眼を開けろ。眼を開けてくれ」

悠理の叫びも空しく、実里はついにそれきり意識を失った。

悠理は意識を失った実里を苦労して背負った。実里の下半身はしとどに濡れている。ズボンがぐっしょりと濡れていた。やはり、これは尋常ではなさそうだ。実里の言うように、赤ん坊が生まれてこようとしているのかもしれない。

とりあえず墓地を出て住宅街の見える坂まで戻ると、携帯で救急車を呼んだ。

緊急を要すると判断した救急隊員は実里をI町の総合病院に運んだ。

ストレッチャーに乗せて運ばれていく実里は、死んだように顔色が悪い。そのやつれ果てた顔は、やはり同じように病院のストレッチャーに乗っていた早妃の死に顔と重なった。

刹那、悠理の中に烈しい感情が湧き起こった。

「失礼ですが、どういうご関係の方ですか？」

看護師に訊ねられ、悠理は即答した。

「赤ん坊の父親です」

流石に「夫」とは言えなかった。

「先生、お願いします、俺の子どもを助けて下さい」

ストレッチャーについて分娩室に入る白衣姿の医師に、悠理は取り続けた。

「お産がもう始まっているようです。破水もしていますので、今夜中には生まれるでしょう」

まだ若い医師は事務的な口調で告げると、慌ただしく分娩室に消えた。

しかし、事態はそう簡単には進まなかった。

悠理にとって、その夜は二十二年の生涯で最も長い夜となった。

彼は分娩室の前の椅子に座り、耳を澄ませて産声が聞こえてくるのを今か今かと待ち続けたが、聞こえてくるのは実里のうめき声と悲鳴だけだ。

まるで、どのような酷い折檻を受けているのではないかと心配しそうになるほど、すさまじい声がひっきりなしに聞こえる。

「頑張ってね、もう少しよ」

付きそう看護師たちの励ます声も混じっている。

分娩室に入ってから数時間経過した頃、医師が一度、出てきた。その深刻な表情から、悠理は実里の出産が順調ではないのだと悟った。

「先生、どんな様子ですか？」

待ちかねたように問えば、医師は難しい顔で首を傾げた。

「どうも赤ちゃんが逆子のです。それで、陣痛の波は来ても、途中で引っかかって上手く出てこられないいんでしょう。もう少し様子を見ますが、生まれる気配がなければ、途中で帝王切開に切り替えます」

「帝王切開一」

悠理は息を呑んだ。

医師はそのまま、また分娩室に戻った。その間も実里の痛々しい声は絶えない。

一時間ほど経った。今度は分娩室がざわつき、数人の看護師が慌ただしく出入りを繰り返し始めた。更に別のいかにもベテランといった銀髪の医師がどこからともなく現れ、分娩室に入る。どれもが良い兆候とは到底思えない。

悠理は忙しそうに行ったり来たりする看護師の一人に取り纏った。

「一体、どうなってるんですか？」

あれほど苦しげに聞こえていた実里のうめき声が聞こえないのも不吉な予感がした。

まだ若い看護師は悠理に構う暇も勿体ないとばかりに早口で告げた。

悠理は意識を失った実里を苦労して背負った。実里の下半身はしとどに濡れている。ズボンがぐっしょりと濡れていた。やはり、これは尋常ではなさそうだ。実里の言うように、赤ん坊が生まれてこようとしているのかもしれない。

とりあえず墓地を出て住宅街の見える坂まで戻ると、携帯で救急車を呼んだ。

緊急を要すると判断した救急隊員は実里をI町の総合病院に運んだ。

ストレッチャーに乗せて運ばれていく実里は、死んだように顔色が悪い。そのやつれ果てた顔は、やはり同じように病院のストレッチャーに乗っていた早妃の死に顔と重なった。

刹那、悠理の中に烈しい感情が湧き起こった。

「失礼ですが、どういうご関係の方ですか？」

看護師に訊ねられ、悠理は即答した。

「赤ん坊の父親です」

流石に「夫」とは言えなかった。

「先生、お願いします、俺の子どもを助けて下さい」

ストレッチャーについて分娩室に入る白衣姿の医師に、悠理は取り続けた。

「お産がもう始まっているようです。破水もしていますので、今夜中には生まれるでしょう」

まだ若い医師は事務的な口調で告げると、慌ただしく分娩室に消えた。

しかし、事態はそう簡単には進まなかった。

悠理にとって、その夜は二十二年の生涯で最も長い夜となった。

彼は分娩室の前の椅子に座り、耳を澄ませて産声が聞こえてくるのを今か今かと待ち続けたが、聞こえてくるのは実里のうめき声と悲鳴だけだ。

まるで、どのような酷い折檻を受けているのではないかと心配しそうになるほど、すさまじい声がひっきりなしに聞こえる。

「頑張ってね、もう少しよ」

付きそう看護師たちの励ます声も混じっている。

分娩室に入ってから数時間経過した頃、医師が一度、出てきた。その深刻な表情から、悠理は実里の出産が順調ではないのだと悟った。

「先生、どんな様子ですか？」

待ちかねたように問えば、医師は難しい顔で首を傾げた。

「どうも赤ちゃんが逆子のです。それで、陣痛の波は来ても、途中で引っかかって上手く出てこられないいんでしょう。もう少し様子を見ますが、生まれる気配がなければ、途中で帝王切開に切り替えます」

「帝王切開一」

悠理は息を呑んだ。

医師はそのまま、また分娩室に戻った。その間も実里の痛々しい声は絶えない。

一時間ほど経った。今度は分娩室がざわつき、数人の看護師が慌ただしく出入りを繰り返し始めた。更に別のいかにもベテランといった銀髪の医師がどこからともなく現れ、分娩室に入る。どれもが良い兆候とは到底思えない。

悠理は忙しそうに行ったり来たりする看護師の一人に取り纏った。

「一体、どうなってるんですか？」

あれほど苦しげに聞こえていた実里のうめき声が聞こえないのも不吉な予感がした。

まだ若い看護師は悠理に構う暇も勿体ないとばかりに早口で告げた。

「奥さんの血圧がかなり下がって、危険な状態です。出血量が多いので、これから輸血をします」

悠理の眼に涙が滲んだ。

「お願いします、助けてやって下さい。二人とも助けてやってくれ」

泣き崩れる悠理の肩を後から出てきた年配の看護師が叩いた。

「大丈夫ですよ、お父さん。奥さんも赤ちゃんも今、頑張ってますからね」

温かみのある声はしかし、悠理の不安を少しも和らげてはくれなかった。

再び長い時が始まった。

分娩室はあれほど騒々しかったのが嘘のように、しんと静まり返り物音一つない。

悠理は長椅子に座り込み、両手で頭を抱えた。

こうしてただ一人、薄暗い病院の廊下にいると、嫌な想像ばかりしてしまう。このまま実里は死ぬのではないか。いや、実里だけでなく、待ちわびている我が子まで、儚くなってしまわないだろうか。

もしかしたら、自分は子どもに恵まれない星の下にあるのかもしれない。俺の子どもを宿した女は皆、ことごとく死ぬ運命にあるのか！？ 馬鹿げた考えだとは判っていても、どうしても思考はマイナス方向にばかり行ってしまう。嫌だ、また、大切な人間が死ぬのなんて、耐えられない。

神さま、どうか俺の子どもと子どもを生んでくれようとしている女を一実里を助けてくれ。

けして信心深いどころか、全くの無信心であった自分がここまで神に真剣に祈ることがあるとは。彼は自分でも信じられなかった。

それからですら、随分と長い時間が流れたように思えた。ピチュピュと気の早い雀のさえずりが聞こえ始めたかと思う頃、悠理はハッと弾かれたように顔を上げた。

わずかな間、うとうとしていたらしい。

一実里は、実里はどうなったんだ？

慌てて立ち上がりかけたその時、静まり返った早朝の空気を底から震わせるように、力強い産声が響き渡った。「や、やった」

悠理は思わず叫び、ガッツポーズをした。

再び分娩室が騒がしくなり、ほどなくして年配の看護師が白いおくるみにくるまれた赤ん坊を抱いて出てきた。夜中に取り乱す悠理を励ましてくれたあの看護師だ。

「おめでとうございます。2, 200グラムの可愛い女の子ですよ。少し早めに生まれたので保育器には入りますけど、元気に育ちますから、安心して」

「一」

声が出なかった。様々な想いが一挙に渦巻いて、ぴったりの言葉が見つからない。

「ほら、新米お父さん、抱いてご覧なさい」

赤児を渡され、悠理はおっかなびっくり危なげな手つきで抱いた。

「ああ、そんなに力を込めなくても大丈夫、赤ちゃんは見かけ以上に力強いんですから」

悠理は言葉もなく、無心に眼を瞑る我が子を見つめた。小さな小さな手に自分の人差し指を握

らせると、存外に強い力で握りしめてくる。
「本当ですね。結構、力が強いや、こいつ」
悠理の頬をひとすじの涙が流れ落ちた。
「それで、母親の方はどうですか？」



一瞬、看護師が首を傾げ、ああと頷いた。

「奥さんのこと？」

この際、仕方がない。悠理は頷いた。

「はい、家内です」

「奥さんなら、大丈夫ですよ。今は疲れて眠っていますから。かなりの難産だったので、相当、体力を使っています。回復には少し時を要するかもしれませんが、まだ若いですからね。輸血もしましたし、当分は安静が必要です」

二時間後、実里はまたストレッチャーに乗せられ、病室に移った。

小さな白い個室には、ベッドと簡素な椅子が一つあるきりだ。

実里はベッドで静かに眠り、傍らにはガラスケースに寝かされた生まれたばかりの赤ん坊が眠っていた。

悠理は満ち足りた想いで二人の寝顔を眺めた。恐らく、これが家族、親子三人で過ごす最初で最後の時間になるだろう。

それから一時間余り、彼は大切な二人の顔を心ゆくまで眺めた。心の中に永遠に焼きつけるように、しっかりと刻み込むように。これで悔いはない。思いがけず、初めての我が子の誕生にも立ち会うことができた。

実里の顔色は依然として紙のように白く、血の気はなかったけれど、表情には女の大役を成し遂げた安堵のようなものが浮かんでいる。

実里の額には汗で髪が貼り付いていた。それが、たった今、彼女が終えたばかりの女の闘いの厳しさの名残を伝えている。彼の子どもを生命がけて生んでくれた女だ。

古今に渡って、原始の昔より女たちは身籠もり、生むという歴史を繰り返してきた。その気の遠くなるほどの長い間、連綿と繰り返されたきた生命の営みは男ではなく女たちによって司られてきたのだ。

もしかしたら、この世のすべてが男たちにとっては女神なのかもしれない。

彼はそっと手を伸ばし、実里の額に貼り付いたひとすじの髪の毛を優しい手つきで整えた。

「ありがとう」

疲れ果てて眠っている実里の乱れた髪を撫で、心からの労いの言葉をかけた。

病室のドアを閉めた時、廊下を向こうから歩いてくる医師に出逢った。実里の分娩に立ち会い、我が子を取り上げてくれた医師である。

「色々とお世話になりました。ありがとうございました」

深々と頭を下げると、医師はにこやかに笑った。やはり、分娩中は緊張していたのだろう。別人のように晴れやかな明るい表情をしている。

「母子ともに、一時は危険な状態でした。赤ちゃんの方は早産で生まれたので、これからしばらく保育器に入ることになりますが、大丈夫、元気で大きくなりますよ。どうなるかと心配しましたが、とにかく母子ともに無事で良かった。お母さんがよく頑張って持ち堪えましたね。眼が覚めたら、奥さんをたくさん褒めてあげてください」

「はい」

悠理は頷いて頭を下げた。

今日という日に生まれたばかりの太陽が真新しい光を地上に投げかける。

もう二度と、実里に逢うことも、彼女が生んだ俺の子に逢うこともないだろう。

だが、それで良いのだ。大切な人たちの前に、彼は姿を現さない方が良い。彼等の人生から永遠に立ち去り、消えることが悠理なりの愛情の示し方なのだ。

透明な朝陽が遠ざかる悠理の背中を照らし出し、病院の白っぽい廊下をひとすじの道のように浮き上がらせている。静かな病院の朝であった。

一瞬、看護師が首を傾げ、ああと頷いた。

「奥さんのこと？」

この際、仕方がない。悠理は頷いた。

「はい、家内です」

「奥さんなら、大丈夫ですよ。今は疲れて眠っていますから。かなりの難産だったので、相当、体力を使っています。回復には少し時を要するかもしれませんが、まだ若いですからね。輸血もしましたし、当分は安静が必要です」

二時間後、実里はまたストレッチャーに乗せられ、病室に移った。

小さな白い個室には、ベッドと簡素な椅子が一つあるきりだ。

実里はベッドで静かに眠り、傍らにはガラスケースに寝かされた生まれたばかりの赤ん坊が眠っていた。

悠理は満ち足りた想いで二人の寝顔を眺めた。恐らく、これが家族、親子三人で過ごす最初で最後の時間になるだろう。

それから一時間余り、彼は大切な二人の顔を心ゆくまで眺めた。心の中に永遠に焼きつけるように、しっかりと刻み込むように。これで悔いはない。思いがけず、初めての我が子の誕生にも立ち会うことができた。

実里の顔色は依然として紙のように白く、血の気はなかったけれど、表情には女の大役を成し遂げた安堵のようなものが浮かんでいる。

実里の額には汗で髪が貼り付いていた。それが、たった今、彼女が終えたばかりの女の闘いの厳しさの名残を伝えている。彼の子どもを生命がけて生んでくれた女だ。

古今に渡って、原始の昔より女たちは身籠もり、生むという歴史を繰り返してきた。その気の遠くなるほどの長い間、連綿と繰り返されたきた生命の営みは男ではなく女たちによって司られてきたのだ。

もしかしたら、この世のすべてが男たちにとっては女神なのかもしれない。

彼はそっと手を伸ばし、実里の額に貼り付いたひとすじの髪の毛を優しい手つきで整えた。

「ありがとう」

疲れ果てて眠っている実里の乱れた髪を撫で、心からの労いの言葉をかけた。

病室のドアを閉めた時、廊下を向こうから歩いてくる医師に出逢った。実里の分娩に立ち会い、我が子を取り上げてくれた医師である。

「色々とお世話になりました。ありがとうございました」

深々と頭を下げると、医師はにこやかに笑った。やはり、分娩中は緊張していたのだろう。別人のように晴れやかな明るい表情をしている。

「母子ともに、一時は危険な状態でした。赤ちゃんの方は早産で生まれたので、これからしばらく保育器に入ることになりますが、大丈夫、元気で大きくなりますよ。どうなるかと心配しましたが、とにかく母子ともに無事で良かった。お母さんがよく頑張って持ち堪えましたね。眼が覚めたら、奥さんをたくさん褒めてあげてください」

「はい」

悠理は頷いて頭を下げた。

今日という日に生まれたばかりの太陽が真新しい光を地上に投げかける。

もう二度と、実里に逢うことも、彼女が生んだ俺の子に逢うこともないだろう。

だが、それで良いのだ。大切な人たちの前に、彼は姿を現さない方が良い。彼等の人生から永遠に立ち去り、消えることが悠理なりの愛情の示し方なのだ。

透明な朝陽が遠ざかる悠理の背中を照らし出し、病院の白っぽい廊下をひとすじの道のように浮き上がらせている。静かな病院の朝であった。

E p i l o g u e ～終章～

E p i l o g u e ～終章～

早妃を突然、失ってから、壊れたままだった俺の心が今、新しく生まれ変わったのを感じていた。

早妃。俺と早妃のお腹の子は、新しい生命となって、あいつの一実里の生んだ子の中で今も生き続けていると考えてしまうのは、俺の身勝手な思い込みだろうか。

早妃、応えてくれよ、俺だけの女神。

—悠理クン。

ふと名を呼ばれたような気がして、俺は振り返った。 背後にはもちろん、誰の姿もなく、ただ今日、生まれたての太陽から放たれるひと筋の光が俺の行く手を照らしているだけだった。俺の前には長く伸びた一本の道のように、病院の白っぽい廊下が続いている。 俺は自分でも愕くほどの力強い足取りで、新たな一步を踏み出した。

(完)

☆ あとがき ☆

最後までご覧いただき、ありがとうございます。

この作品は私にとっては思い入れのある作品です。こうして発表させていただき、嬉しく思っています。

悠理のその後を描いた続編なども書いていますので、また機会があれば、ご披露させていただければ幸せです。

心からの感謝を。

東 めぐみ拝

2013年6月2日

My Godness～俺の女神～

<http://p.booklog.jp/book/65705>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65705>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65705>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ

My Godness～俺の女神～

<http://p.booklog.jp/book/65705>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65705>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65705>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ

My Godness～俺の女神～

<http://p.booklog.jp/book/65705>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65705>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65705>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ